

第1章 岡崎市の歴史的風致形成の背景

1-1. 自然的環境

(1) 位置

本市は、愛知県のほぼ中央部に位置し、名古屋から約 35 キロメートル、東京から約 250 キロメートル、大阪から約 150 キロメートルの距離にある。北は豊田市、東は新城市、西は安城市及び西尾市、南は豊川市、蒲郡市及び幸田町と接し、東西 29.1 キロメートル、南北 20.2 キロメートル、総面積 387.2 平方キロメートル(令和 7 年(2025) 8 月 20 日現在)である。



図1-1-1 愛知県の位置



図1-1-2 岡崎市の位置

(2)地形・地質・水系

①地形

市域は、東西 29.1 キロメートル、南北 20.2 キロメートル、面積 387.2 平方キロメートルに及び、県内では豊田市、新城市に次ぐ3番目の規模である。

市の北東部は中部山岳地帯に連なる三河山地、西部は広大な岡崎平野、南部は三河湾国立公園に含まれる山地となっている。中心部から北東部にかけて標高 100～300 メートル程の丘陵地がみられ、さらに、北東部にかけて 300～600 メートルの山地が嶺を連ねている。標高は東端に位置する本宮山の 789.2 メートルを最高地点とし、南西部の中島町の 6.2 メートルを最低地点とする。中心部から南東部にかけては桑谷山や扇子山など 400 メートル以上の山々が連なり、やや急な地形を形成している。市内の標高差は 700 メートル以上に及ぶ。

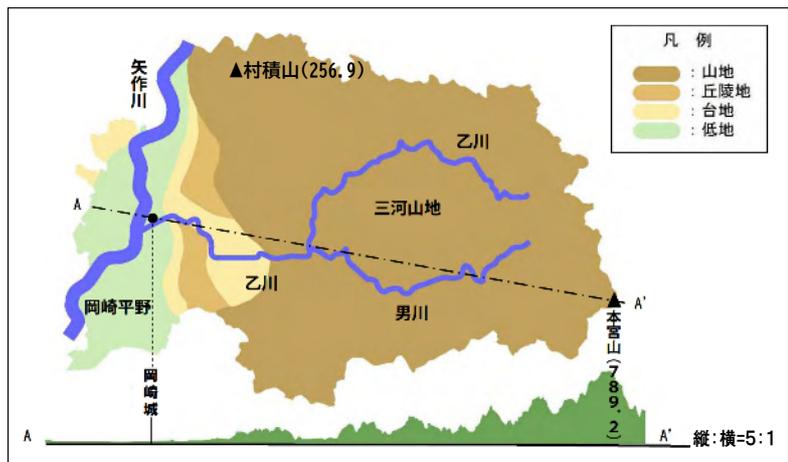


図1-1-3 岡崎市の高低差



図1-1-4 航空写真(岡崎市街地)

②地質

中心部から北東部の山地を形成するのは白亜紀に作られた^{かこうがん}花崗岩類であり、^{みかげいし}良質の花崗石が採れたことから江戸時代より石製品づくりが盛んとなり、石都・岡崎として発展していった。南東部の山地を形成するのは同じく白亜紀に作られた^{へんせいがん}変成岩類であり、丘陵地には新第三紀に作られた^{きがん}砂岩、^{れきがん}シルト岩、^{れきがん}礫岩が分布する。平野部は、第四紀に作られた礫・砂からなる段丘堆積物が分布しており、平野部の西側は矢作川が運んできた礫、砂、粘土が堆積してできた^{こうせきそう}洪積層や^{ちゅうせきそう}沖積層により形成されている。

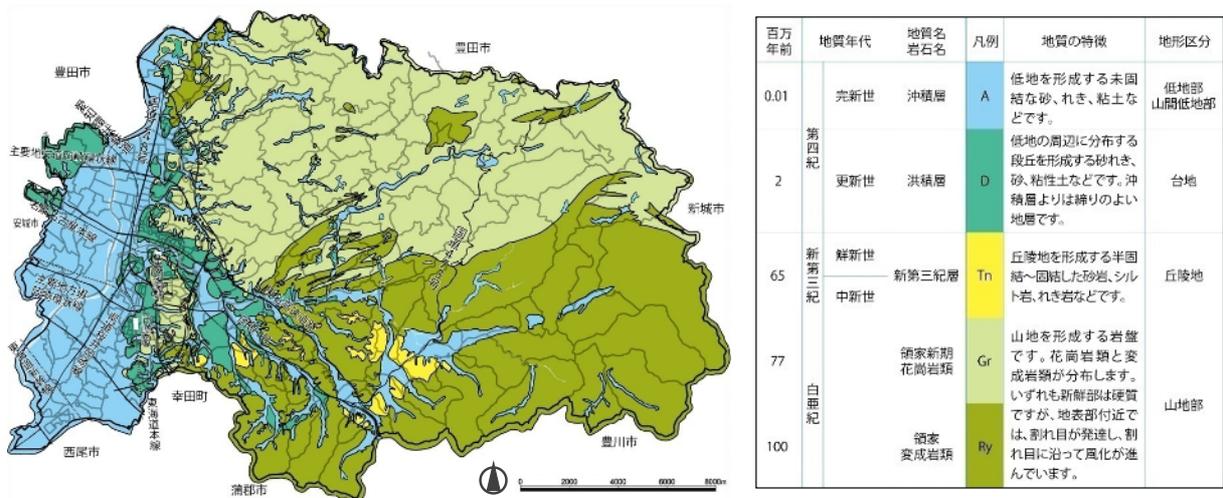


図1-1-5 地形・地質

③水系

中央アルプス南端の長野県に源を発する^{やはぎがわ}矢作川が岡崎平野の丘陵地を北から南へ貫流し、清流がゆるく流れて三河湾に注いでいる。矢作川によって形成された沖積地は見事な水田地帯となっており、豊富な表流水及び伏流水は水力発電、農工業用水、そして飲料水として利用されている。矢作川の主な支流は、^{ともえやま}巴山に源を発する^{おとがわ}乙川、^{おとがわ}本宮山に源を発する^{おとがわ}男川等であり、矢作川と乙川の合流部付近に、中心市街地が広がっている。

乙川は、市域を東から西へと流れ下るにつれて、ホタルの生息地としても知られる山間部の溪流から、市街地の中心部、河川緑地が整備された川幅の大きな下流部へと姿を変化させる。青木川が流れる滝町では、明治期からその水流を使用した^{ぼうせき}ガラ紡績が盛んになり、^{ぐんかいがわ}郡界川、^{やまつながわ}男川、^{はちがわ}山綱川、^{はちがわ}鉢地川等の流域各地に広がり発展していった。



図1-1-6 河川の分布

(3)気象

過去5年間(令和2年(2020)～令和6年(2024))の月別の気温と降水量をみると、7月～8月の夏季の平均気温は27℃前後、12月～2月の冬季の平均気温は5℃前後である。年間平均気温は16.3℃であり、四季を通じて温暖な気候である。

降水量は一年を通じて7月が最も多く、年間平均降水量は1,750ミリ程度である。降雪はほとんどない。

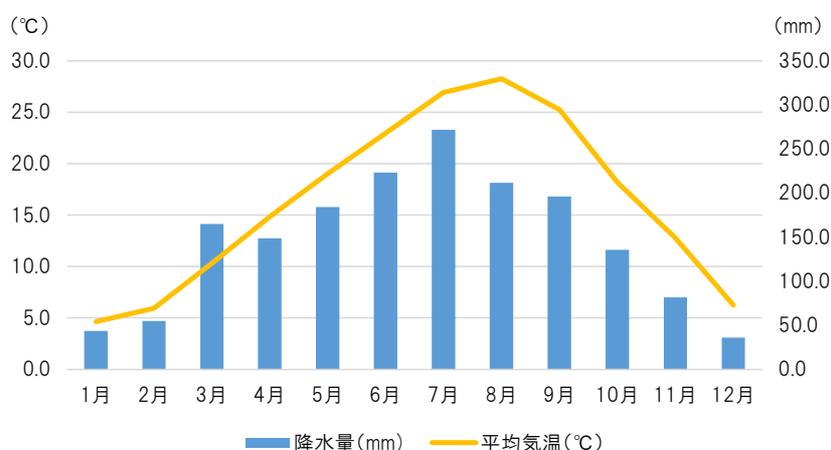


図1-1-7 月別の平均気温と降水量(令和2年(2020)～6年(2024))

平均気温は、気象庁が示している年別・月別の平均気温をもとに算出した値。ここでは、令和2年(2020)～令和6年(2024)の5年間の各月別平均気温の平均値を求めた値である。

1-2. 社会的環境

(1) 市の合併経緯

明治4年(1871)7月、^{はいはん ちけん}廃藩置県により岡崎藩は岡崎県となった。同年11月、岡崎県、西尾県、刈谷県など10県が合併して額田県となり、岡崎城内に県庁を置いた。翌年の明治5年(1872)11月に額田県は愛知県に統合された。そして、明治22年(1889)の町村制施行により岡崎町が誕生した。

明治35年(1902)には^{おとがわ}男川村の一部^{かけ}(欠)と、明治39年(1906)には三島村、乙見村の一部^{いな}(稲熊・小呂)と、大正3年(1914)には^{ひろはた}広幡町と合併し、大正5年(1916)7月1日に面積19.68平方キロメートル、人口37,639人で、県下3番目、全国67番目に市制を施行した。昭和3年(1928)には、岡崎村、^{みあい}美合村、^{ときわ}男川村、常磐村の一部と合併した。昭和の大合併により、昭和30年(1955)に^{やはぎ}矢作町、岩津町、福岡町、^{もとじゆく}本宿村、山中村、^{りゅうがい}藤川村、龍谷村、河合村、常磐村の3町6村と、昭和37年(1962)に^{むつみ}六ツ美町と合併した。面積は市制施行当時の約11倍の226.97平方キロメートルに、人口は約5倍の185,959人となった。

平成15年(2003)4月に中核市へ移行し、平成の大合併により平成18年(2006)に額田町と合併して、面積387.24平方キロメートル、人口36万人以上を擁する岡崎市となった。

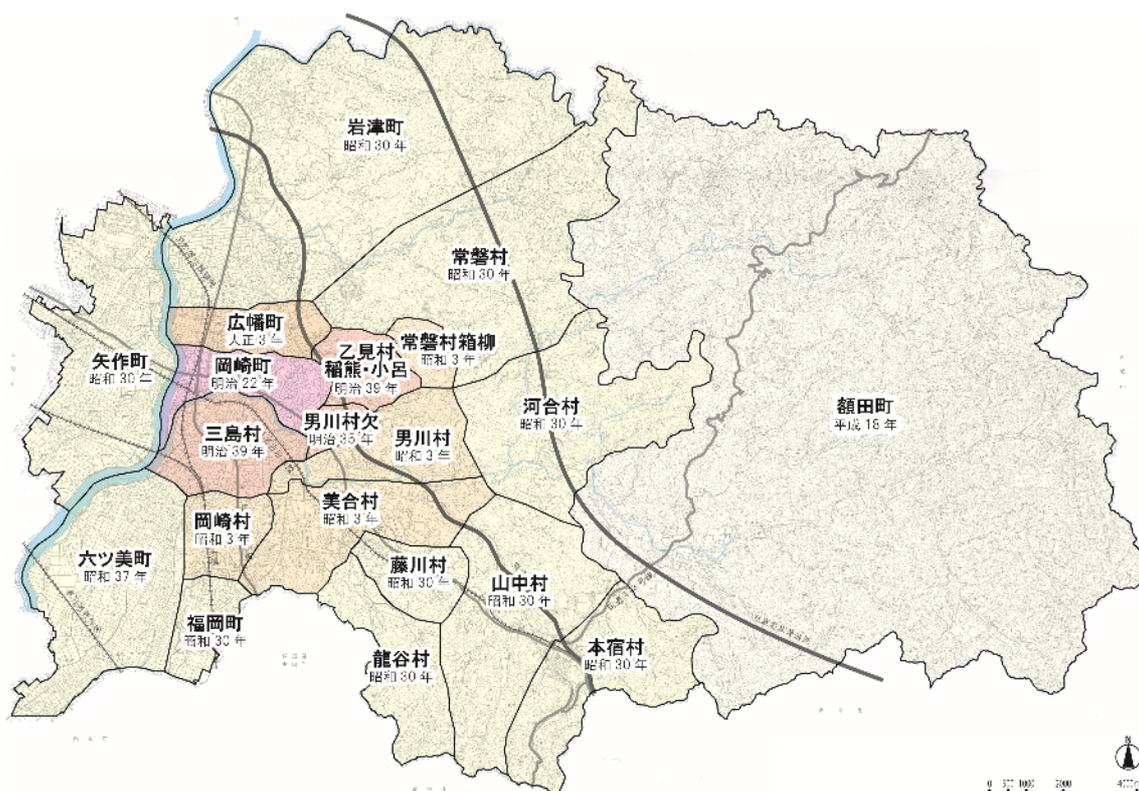


図1-2-1 合併による市域の拡大

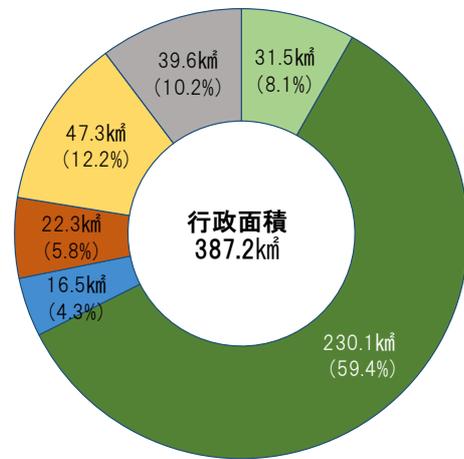
表1-2-1 岡崎市の合併経緯(明治22年以降)(2/3)

明治22年以前	明治22年 10月1日	明治23年～明治45年	大正1年～大正15年	昭和1年～昭和64年	平成1年～ 平成31年	令和1年～ 現在
土呂村 山畑村 高須村 宣園村 永井村 土地村 大谷村 本宿村 上衣文村 大輪村 龍巢村 蘇地村 龍泉寺村 尾原村 桑谷村 才熊村 栗木村 秦梨村 友久村 切越村 蓬生村 須瀧村 岩戸村 茅原沢村 古部村 生平村 羽栗村 池金村 舞木村 山瀬村 藤川村 市場村 藪川村 柳田村 名ノ内村 麻生村 藤治屋村 大林村 土村 南須山村 大山村 大河村 高瀬村 法味村 笠井村 竹沢連村 上毛呂村 下毛呂村 小瀬村 桃ヶ久保村 赤田和村 切山村 亀穴村 石原村 明見村 中金村 大代村 雨山村 河辺村 栃原村 千方町村 木下村 柿平村 井ノ口村 平針村 鬼沢村 寺平村 寺野村 櫻山村 接井寺村 牧平村 鹿嶋川村 下衣文村 細野村 光久村 片倉村 滝原村 深瀬村 鳥川村 保久村 中俣久村 伊賀谷村 外山村 一色村 富尾村 上田代村 折地村 田代村 蕪木村 蘭村	福岡村 上地村 本宿村 龍泉寺村 龍谷村 才栗村 秦梨村 河合村 山中村 藤川村 核形村 鍛笠村 南大須村 形笠村 井沢村 毛呂村 小久田村 河原村 官崎村 巴山村 豊岡村 高富村 中伊村 下山村	M26.11.8 町制 福岡町 本宿村 龍谷村 河合村 山中村 藤川村 形笠村 官崎村 M23.12.17 改称 栄枝村 M39.5.1 宮崎村に編入 M39.5.1 合併 豊富村 高富村	福岡町 本宿村 龍谷村 河合村 山中村 藤川村 形笠村 官崎村 下山村	福岡町 本宿村 龍谷村 河合村 山中村 藤川村 形笠村 官崎村 額田町 豊富村 下山村	岡崎市 岡崎市 岡崎市 額田町 H18.1.1 岡崎市に編入	岡崎市 岡崎市 岡崎市
				S30.2.1 岡崎市に編入	岡崎市	岡崎市
				S31.9.30 合併 額田町	額田町	H18.1.1 岡崎市に編入
				(一部、下山村、その後豊田市(田折村、田代村、蕪木村、蘭町) へ)		

(2)土地利用

土地利用の構成比は、森林が市域の59.5%を占め、宅地12.2%、農地8.1%である。なお、森林のうち98.4%が民有林であり、国有林は1.6%である。また、宅地の65.6%が住宅地であり、工業用地が10.7%である。

市域面積(行政面積 387.2 平方キロメートル)に対し、都市計画区域は 260.8 平方キロメートル(67.3%)で、市街化区域は 59.2 平方キロメートル(15.2%)、市街化調整区域は 201.6 平方キロメートル(52.1%)である。



■農地 ■森林 ■水面・河川・水路 ■道路 ■宅地 ■その他

図1-2-2 地目別土地利用面積の構成比(令和5年(2023))

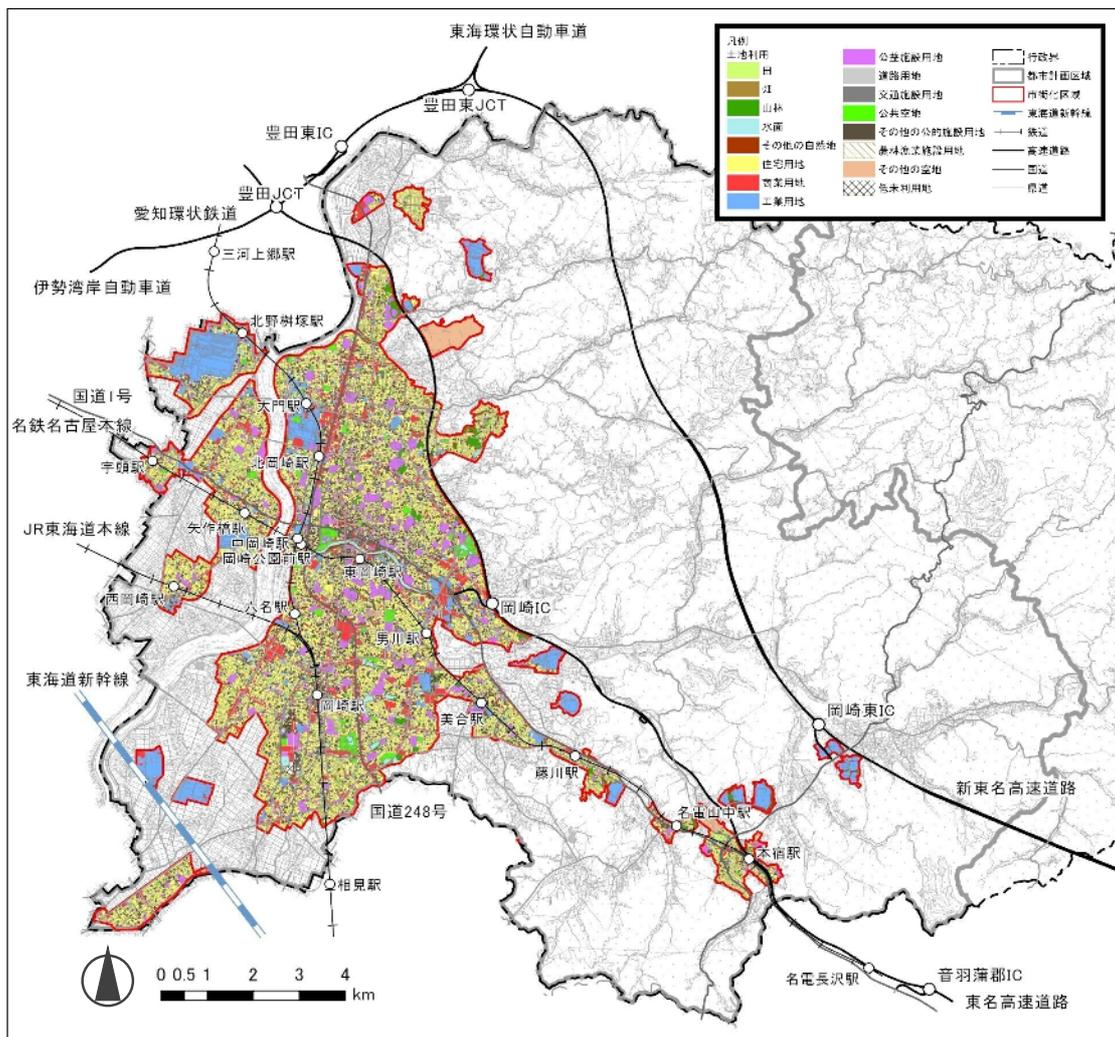


図1-2-3 岡崎市全域の土地利用現況

(3)人口動態

①総人口の推移と将来推計人口

令和2年(2020)10月1日の国勢調査によれば、本市の人口は384,654人、県内では名古屋市、豊田市に次ぐ3番目の規模である。

国立社会保障・人口問題研究所が令和2年(2020)の国勢調査の結果を基準人口として推計した値をみると、令和7年(2025)の推計人口は385,000人を超えるものの、それをピークとして、以降は減少に転じている。

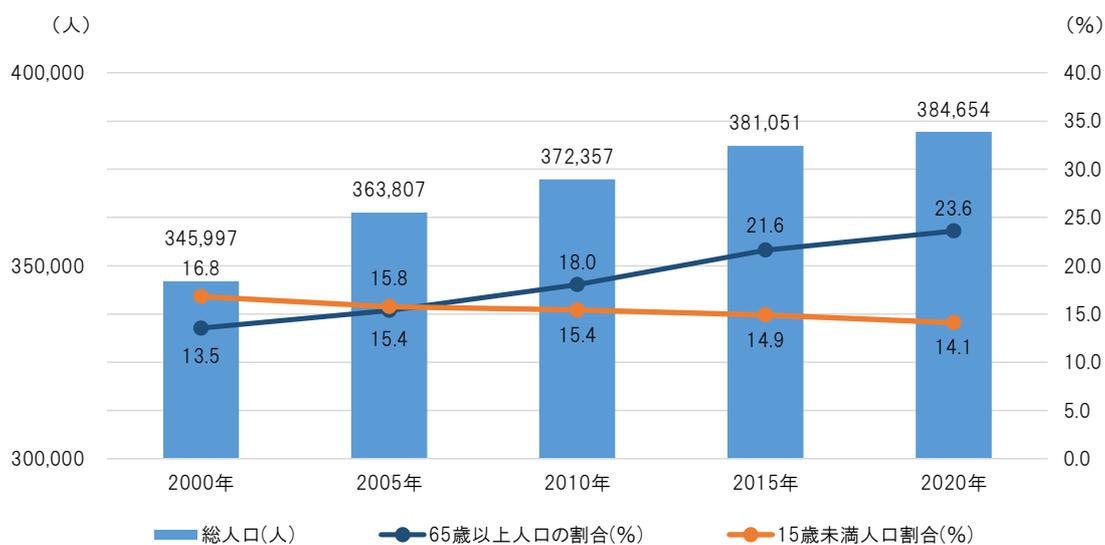


図1-2-4 総人口の推移と老年人口・年少人口の割合(令和2年(2020)10月1日)
(※2000年、2005年は、旧岡崎市と旧額田町の数値を合算したもの)

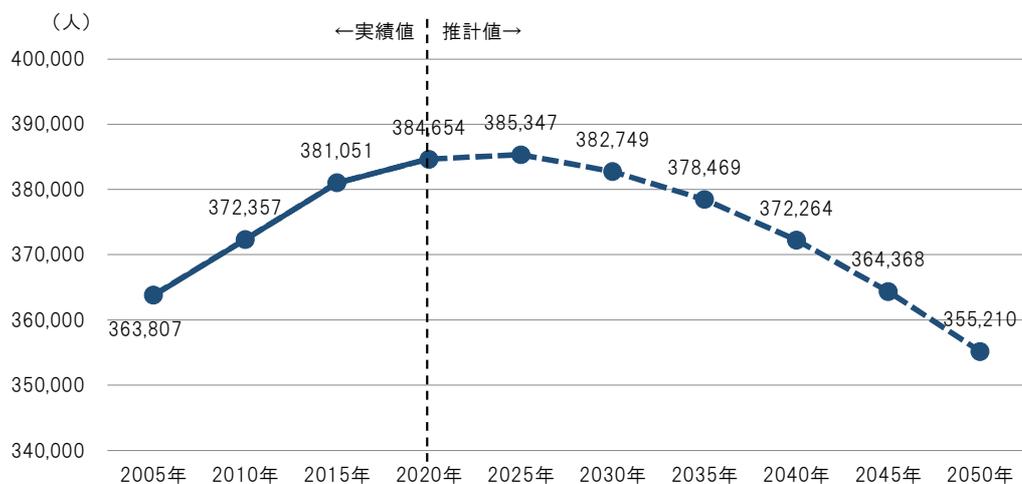
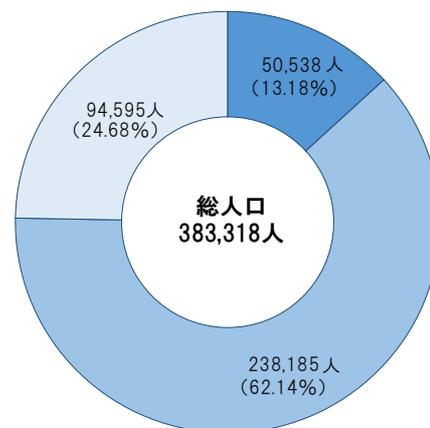


図1-2-5 将来推計人口(総人口)

②年齢別人口

令和6年8月の年齢別の構成比は、0～14歳の年少人口が50,538人(13.18%)、15～64歳の生産年齢人口が238,185人(62.14%)、65歳以上の老年人口が94,595人(24.68%)である。

国立社会保障・人口問題研究所が令和2年(2020)の国勢調査の結果を基準人口として推計した値によると、老年人口は増加を続ける一方で、年少人口は減少していくことが示されている。



■0-14歳 ■15-64歳 □65歳以上

図1-2-6 人口の年齢別構成
(令和6年(2024)8月1日現在)

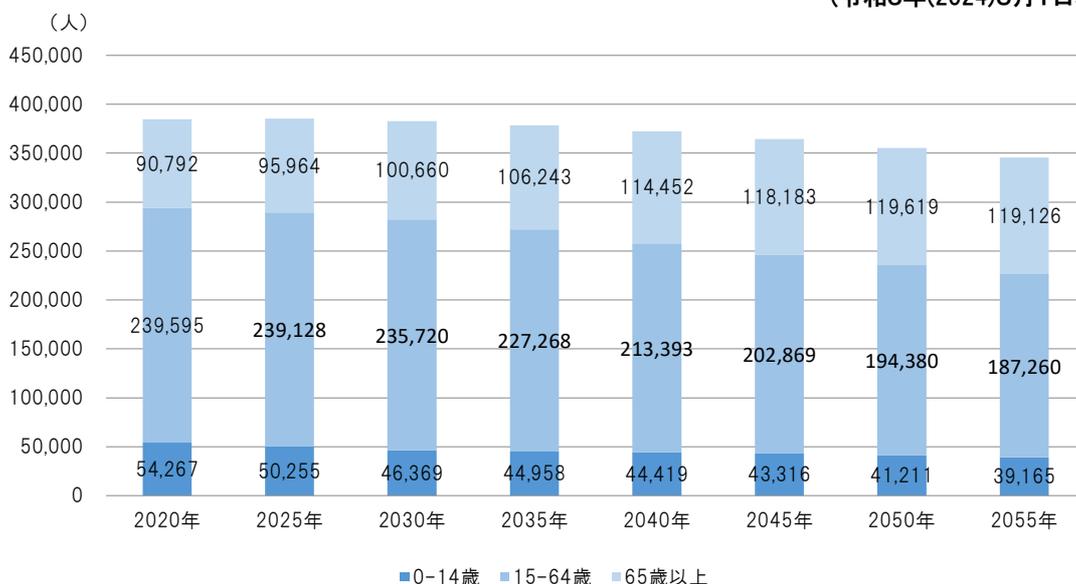


図1-2-7 将来推計人口(年齢3区分)

③世帯数

人口が増加するにしたがって世帯数も増えていくが、一世帯当り人員数は減少している。



図1-2-8 世帯数

(4)交通機関

東西には、東京都中央区日本橋を起点として大阪市へ至る国道1号が横断し、南北には、蒲がま郡市を起点として岐阜市へ至る国道248号と、蒲郡市を起点として牧之原市へ至る国道473号が縦貫している。これらを軸として、主要地方道岡崎環状線、主要地方道岡崎刈谷線等の県道で幹線道路網が形成されている。

広域交通網としては、東名高速道路が市域を東西に通り、昭和43年(1968)から岡崎インターチェンジが供用されている。また、平成28年(2016)からは、新東名高速道路が東名高速道路と並行して通り、岡崎東インターチェンジが供用されている。令和8年度(2026)には、(仮称)岡崎阿知和スマートインターチェンジが東名高速道路の岡崎インターチェンジと豊田ジャンクションの間に完成予定である。

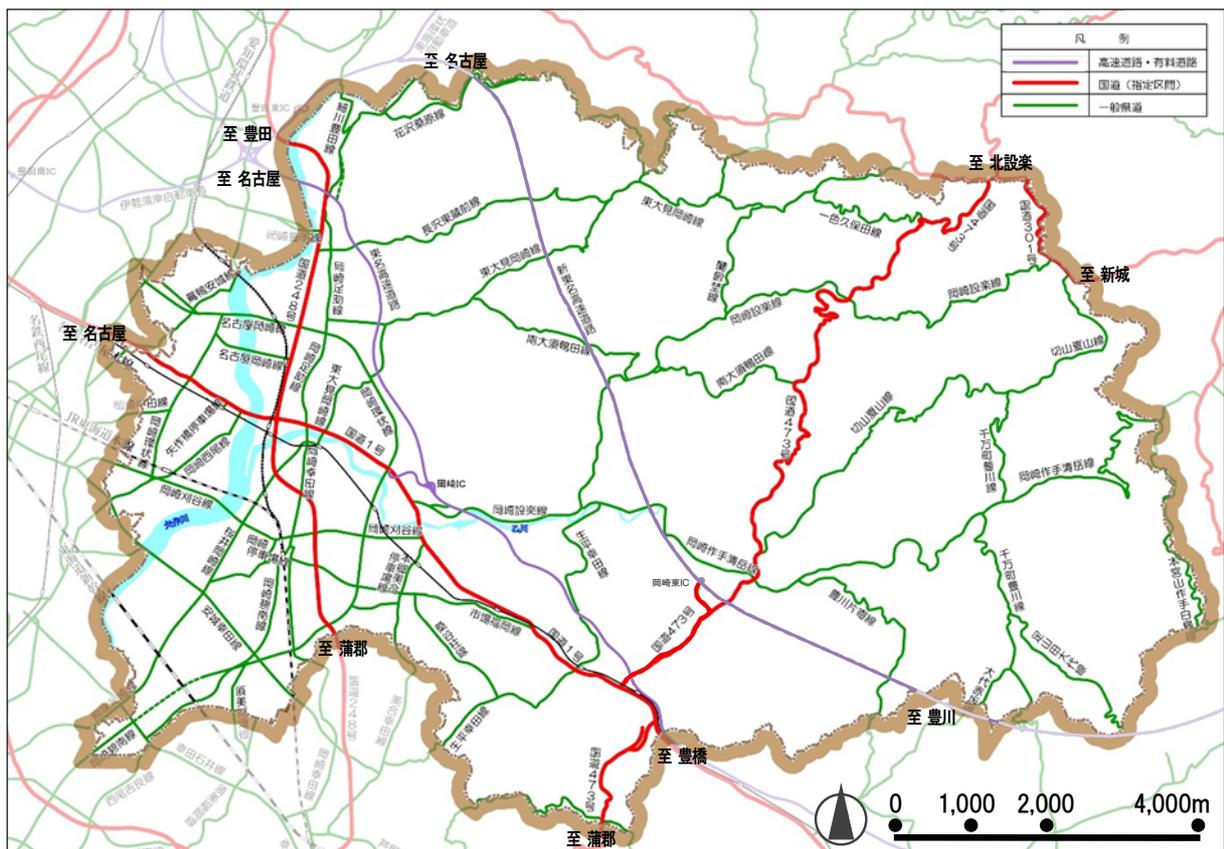


図1-2-9 道路網図

鉄道は、JR 東海道本線に 2 駅、名鉄名古屋本線に 9 駅、愛知環状鉄道(愛環)に 6 駅を有している。市街地を中心に名鉄が東西、JR が南西、愛環が南北を結んでいる。令和 5 年(2023)度の市内鉄道全駅乗客数合計は約 2,414 万人であり、新型コロナウイルス感染症による減少から回復傾向にある。

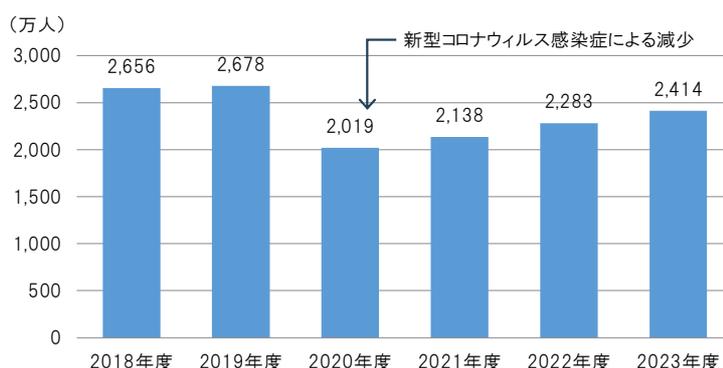


図1-2-10 市内鉄道利用者数(乗客数)

バス路線は、名鉄東岡崎駅、大樹寺、岡崎市民病院、JR 岡崎駅、名鉄美合駅等を起終点とし、それら拠点間を結ぶ基幹路線と日常の生活拠点を中心とした地域内交通のネットワークが形成されている。



岡崎の名の由来

岡崎には、丘の先という意味があるといわれている。15 世紀半ばに岡崎城が築かれた当時は、現在の菅生川(乙川)南岸の明大寺付近が岡崎と呼ばれていたが、享禄3年(1530)~4年(1531)に、松平清康が現在の場所に居城を移し、広い範囲が岡崎と呼ばれるようになった。

江戸時代末期の「三河国名所図会」によると、「岡崎は享禄(1528~1531)以来の名號にして、其以前は菅生郷なり」と記されており、この時期に岡崎という地名が定着していったと考えられている。



東海道とは

東海道は、律令時代(7世紀後半~10 世紀頃)、諸国の国府を結ぶものとして設けられた七道(東海道、東山道、北陸道、山陰道、山陽道、南海道、西海道)のうちの1つである。しかし、その後の時代においては、気候、地勢、旅程目的等により道筋は変化し、定まっていなかったようである。

慶長6年(1601)、徳川家康公により、交通と運輸の便宜を図るため進められた五街道(東海道、中山道、奥州道中、日光道中、甲州道中)の整備によって、日本橋(江戸)から三条大橋(京都)までを 53 か所の宿駅でつなぐ、総延長約 495.5 キロメートルの東海道が誕生する。

岡崎城下では、田中吉政(城主時代 1590~1600)の城下町整備を受け継ぎ、本多康重(藩主時代 1601~1611)の時代に進められた城下町整備において、これまで菅生川(乙川)の南を通っていた東海道を城下に引き入れるなど、度重なる変更により、現在確認できる旧東海道の道筋になった。「東海道二十七曲り」は、この頃に整備されたものである。

(5)産業

令和2年(2020)の国勢調査によると、令和2年(2020)10月1日現在の15歳以上就業者総数191,309人のうち、分類不能(5,456人)を除いた第1次産業就業者は2,484人(1.3%)、第2次産業就業者は72,551人(39.0%)、第3次産業就業者は110,818人(59.6%)である。第2次産業と第3次産業を合わせた就業者数は全体の98%以上を占めている。

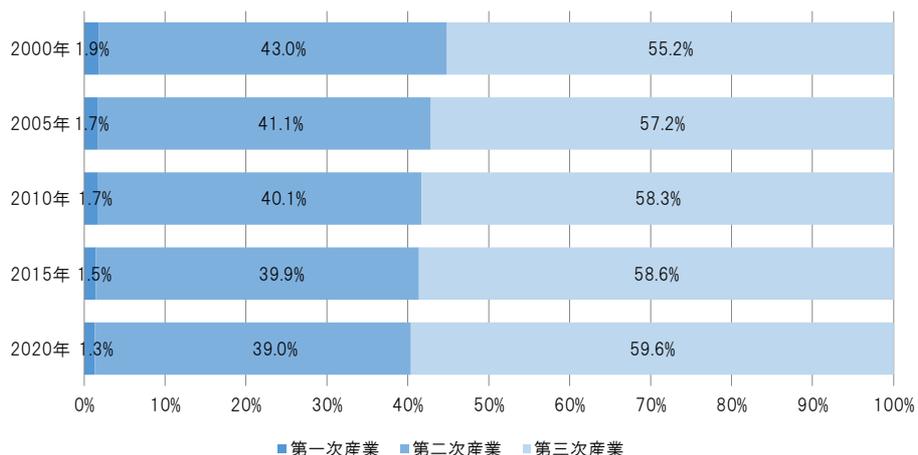


図1-2-11 産業別就業率(15歳以上) ※割合の合計は、四捨五入の関係で100%にならない場合がある。

①農業

温暖な気候、^{やはぎがわ}矢作川や乙川水系の豊富な水、肥沃な大地等の恵まれた風土を活かし、平野部では水稻、麦、大豆を主体とした土地利用型農業を中心に、いちご、なす、花き等の施設園芸が行われている。丘陵地では、ぶどう、柿等の果樹栽培、酪農、養豚、養鶏といった畜産業が行われている。



図1-2-12 ぶどう(岡崎市のブランド化推進品目)

②工業

戦前から繊維工業を中心として発展し、戦後は重化学工業が目覚ましく発達した。近年は、自動車を始めとする輸送用機械、生産用機械、金属製品等の製造業のほか、エレクトロニクス、メカトロニクス産業等の最先端産業も進出している。令和3年(2021)経済センサスによれば、同2年(2020)の製造品出荷額等は、約1兆8,297億円で県内4位である。



図1-2-13 岡崎東部工業団地(上衣文町衣文)

③商業

令和3年経済センサスによれば、同3年(2021)の年間商品販売額は約9,190億円で、名古屋市、豊田市、豊橋市に次ぐ県内第4位の規模である。近年では、百貨店の撤退とともに小売店も減少し、誘客力の低下がうかがわれる。その一方で、東岡崎駅やその周辺で開発が進み、駅を中心とした新規出店は増えつつある。また、本宿では、令和7年(2025)11月に大型アウトレットパークがオープンした。

(6)観光

岡崎城を始め、家康公ゆかりの寺社(大樹寺や伊賀八幡宮等)、宿場町等の歴史・文化的な資源や、桜や紅葉等の名所である自然的な資源等の多数の観光資源を有している。また、絢爛豪華な時代絵巻を展開する春の風物詩「家康公行列」を始め、夏の夜空を大輪の花火が彩る「岡崎城下家康公夏まつり」、三河路に春を告げる「瀧山寺鬼祭り」など、四季を通して様々な催しが行われている。

主要な観光施設等の入込客数を種類別に整理すると下図のとおりとなる。「その他」を除くと、「スポーツ・レクリエーション」が最も高く、全体の12.5%を占め、約135万人が訪れている。次いで「歴史・文化」が7.7%を占め、約83万人が訪れている。

なお、これらは、いずれも令和2年(2020)の新型コロナウイルス感染症の影響による入込客数の減少から、近年、徐々に回復しつつある値といえる。



図1-2-14 家康公行列



図1-2-15 瀧山寺鬼祭り

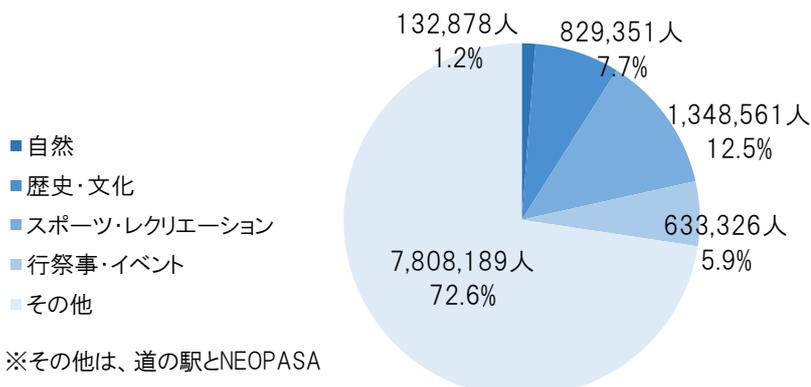


図1-2-16 主要観光施設等入込客数(種類別)(令和6年(2024))

※割合の合計は、四捨五入の関係で100%にならない場合がある。

表1-2-2 主要観光施設等入込客数(令和6年(2024))

※種類	施設など名称	令和元年度(2019)※(コロナ禍前)		令和6年度(2024)※	
		入込客数(人)	入込客数合計(人)	入込客数(人)	入込客数合計(人) (R6/R1(%))
自然	くらがり溪谷	111,296	129,026	117,959	132,878 (103%)
	男川やな	17,730		14,919	
歴史・文化	岡崎城	213,419	913,686	214,851	829,351 (90.8%)
	三河武士のやかた家康館	100,824		110,727	
	六所神社	42,500		43,000	
	岩津天満宮	350,000		319,000	
	八丁味噌蔵	206,943		141,773	
スポーツ・レクリエーション	岡崎城公園	431,000	1,516,476	622,200	1,348,561 (88.9%)
	東公園	298,660		303,760	
	南公園	422,754		0	
	駒立ぶどう狩り組合	84,183		56,954	
	岡崎カントリー倶楽部	50,913		63,004	
	岡崎地域文化広場	156,713		228,535	
	額田ゴルフ倶楽部	72,253		74,108	
行事・イベント	桜まつり	580,000	2,155,119	305,000	633,326 (29.4%)
	家康公行列	450,000		88,000	
	藤まつり	410,000		18,826	
	岡崎城下家康公秋まつり	125,000		25,000	
	岡崎城下家康公夏まつり	110,119		6,500	
	岡崎城下家康公夏まつり(花火大会)	480,000		190,000	
その他	道の駅藤川宿	1,177,774	7,393,858	1,142,853	7,808,189 (105.6%)
	NEOPASA 岡崎	6,216,084		6,665,336	

※「種類」は、「図1-2-16 主要観光施設入込客数」の「種類」に対応している。

令和6年度(2024)の岡崎城入場者数は214,851人である。新型コロナウイルス感染症の影響を受けた令和2年度(2020)の100,838人から回復した。なお、令和5年度(2023)は過去最高の入場者数となったが、これは大河ドラマ館が設置された影響が大きい。

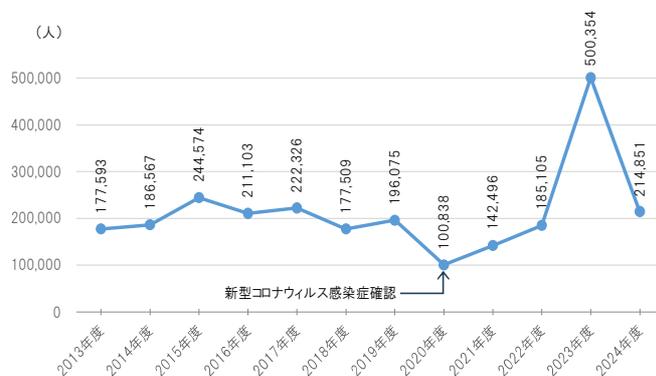


図1-2-17 岡崎城入場者数の推移

一方、外国人観光客は、岡崎城公園の外国人入込客数で見ると、新型コロナウイルス感染症の影響を受けた令和2年度(2020)と令和3年度(2021)は、旅行者数、ツアー数ともに0人(件)であった。しかし、令和5年(2023)2月から来訪が再開しており、新型コロナウイルス感染症影響前の平成30年度(2018)の年間旅行者数4,682人、ツアー数169件までは回復していないものの、年々増加し、令和6年度(2024)の旅行者数は1,415人、ツアー数は59件である。

なお、平成30年度(2018)で、旅行者数とツアー数が大幅に増加したのは、台湾からの大型団体旅行があったことが要因である。

また、延べ外国人宿泊者数は新型コロナウイルス感染症影響前と比べると、徐々に回復しつつあり、令和6年度(2024)の15,490人は、令和5年度(2023)と比べると約9,000人増加した。

表1-2-3 バスツアーによる岡崎城公園の外国人入込客数（岡崎市観光白書/岡崎城公園駐車場ヒアリングシート）

	平成19年度 (2017)	平成30年度 (2018)	令和元年度 (2019)	令和2年度 (2020)	令和3年度 (2021)	令和4年度 (2022)	令和5年度 (2023)	令和6年度 (2024)
旅行者数(人)	2,599	4,682	2,115	0	0	133	1,145	1,415
ツアー数(件)	101	169	80	0	0	6	43	59

表1-2-4 外国人宿泊者数（岡崎市観光白書/宿泊者統計から推計(令和3年度以降は各施設へ直接調査)）

	平成28年度(2016)～平成30年度(2018) の平均	令和2年度 (2020)	令和3年度 (2021)	令和4年度 (2022)	令和5年度 (2023)	令和6年度 (2024)
宿泊者数(人)	44,484	278	1,262	4,568	6,476	15,490

1-3.歴史的環境

(1)歴史

岡崎の歴史は後期旧石器時代に始まり、縄文、弥生及び古墳時代に栄えたとされる矢作川流域の文化を素地としている。その後、岡崎城や東海道を取り込んだ城下町等が骨格となり、度重なる市町村合併等により拡大、発展してきた。

岡崎では、鎌倉幕府を開いた源氏や室町幕府を開いた足利氏の重要拠点、そして徳川家康公生誕の地として発展した武家文化を始め、商人、町人等が創り、守り続けてきた伝統行事や祭礼、産業、食、信仰等が、戦災の猛火を乗り越えて、現在のまちのそこかしこに息づき、継承され続けてきた歴史を垣間見ることができる。

①原始 [岡崎の起源]

A.旧石器・縄文・弥生時代 ～矢作川流域における文化の発祥～

後期旧石器時代に生活の場として適していたと思われる中位段丘が、現在の康生町、伝馬通、鴨田町、岩津町等の集落や JR 岡崎駅周辺の市街地が分布する範囲に発達している。また、低位段丘面が乙川流域の兩岸の明大寺、菅生町、栄町、大平町等の市街地が形成されている範囲に広がっている。

乙川左岸の標高約 40 メートルの中位段丘上にある五本松遺跡(美合町)では、後期旧石器時代のナイフ形石器や細石刃等の石器類、縄文時代の石鏃や弥生時代の土器が見つかり、地域一帯が旧石器時代から弥生時代にかけて人々の生活に適した場であったことを推察させる。

また、乙川と合流する男川（おとがわ）の左岸緩斜面に広がる西牧野遺跡(檜山町、牧平町)では、旧石器時代の石器類が 4,400 点と多数出土しており、山間地の開けた場所で安定した暮らしが営まれていたことがうかがえる。

国指定の史跡の真宮遺跡(真宮町・六名 1 丁目)は、矢作川と乙川の合流点付近にあり、縄文時代晩期の平地式住居と土器棺墓群等からなる集落遺跡で、人々の生活は鎌倉時代に至るまで連綿と続いている。

矢作川河床遺跡は、天神橋上流の井戸状遺構(細川町)から美矢井橋下流の井戸状遺構(合歓木町)までの約 13 キロメートルにも渡る広範囲な遺跡で、縄文時代草創期から近世にいたる多数の遺物が採集されている。近世の築堤によって矢作川の流路が定められ、河床となってしまったが、「郡府」(あるいは「郡厨」)と墨で書かれた官衙で使われていたとみられる奈良時代



図1-3-1 真宮遺跡の平地式住居と土器棺墓(復元)

の土器等も見つかり、当時の人々の重要な生活の舞台であったことがわかる。これら多数の遺跡から、岡崎の文化の発祥は、河川沿岸の台地や丘陵地であったことが推察される。

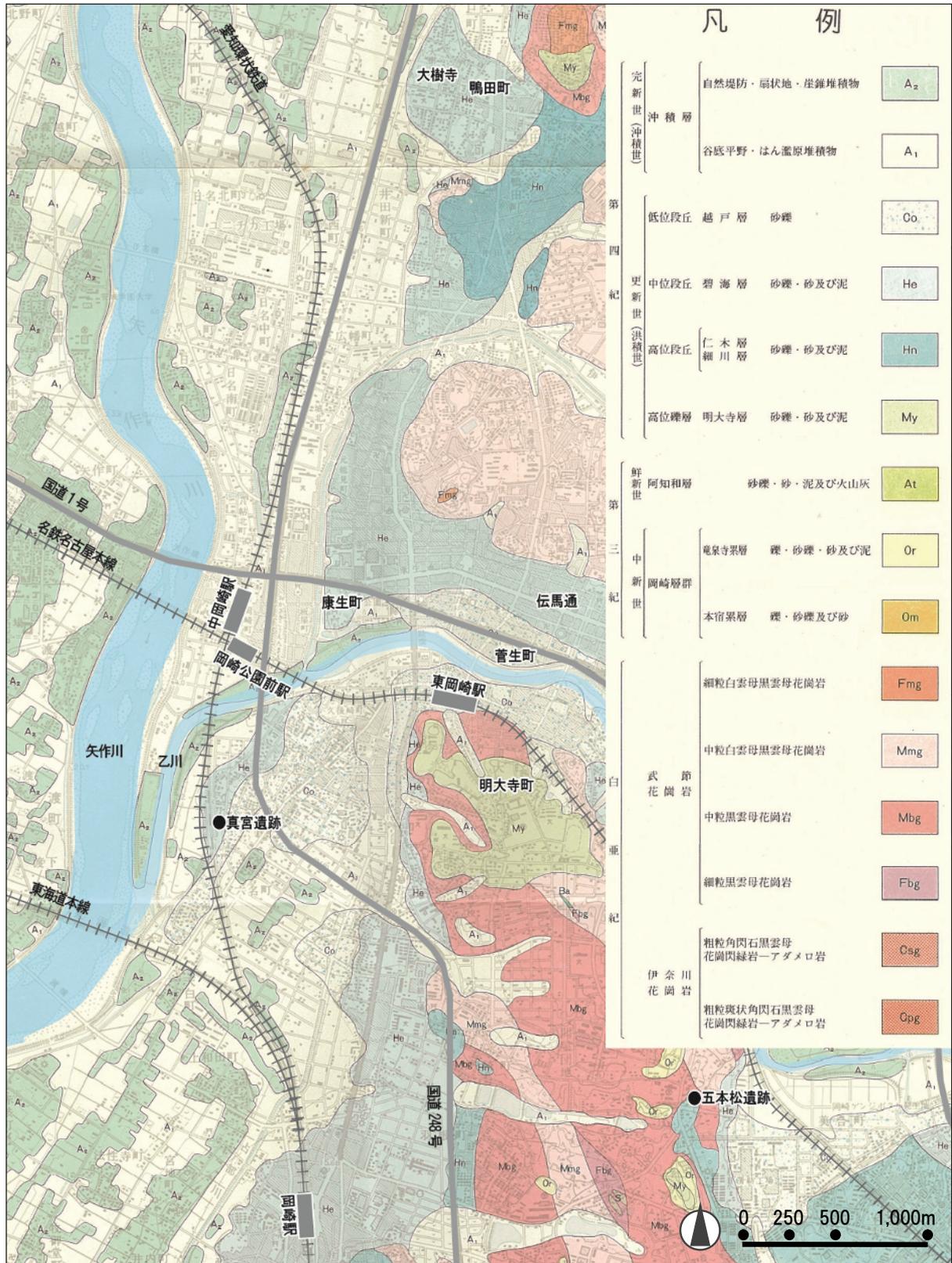


図1-3-2 矢作川・乙川流域の地形と現在の市街地等



図1-3-3 矢作川の様子(天神橋下流上空より)

Ⅰ.古墳時代 ～首長層の出現と古墳群の形成～

古墳時代に造営された墳墓である古墳は、いずれも矢作川や支流の乙川、巴川、北斗川、真福寺川、青木川に沿った場所に所在している。

古墳時代前期の4世紀後半から中期の5世紀初頭に造営された大型古墳の和志山古墳(全長約60メートルの前方後円墳、西本郷町)や甲山第1号墳(直径約60メートルの円墳、前方後円墳説もあり。六供町)は、その規模や立地等から地域を支配した首長の墓であると推察されており、当時、統治社会が形成されていたことを示している。なお、和志山古墳は、景行天皇¹の第10皇子五十狭城入彦の墓として陵墓に指定されており、宮内庁の管理地となっている。

古墳時代中期の5世紀中頃には、首長の墓はやや小型化し、人物埴輪等が出土した太夫塚古墳(直径36メートルの円墳、若松町)や馬具や圍形埴輪等が出土した経ヶ峰第1号墳(長さ約35メートルの帆立貝形古墳、丸山町)等は河川交通の要所に臨む場所に築かれた。

古墳時代後期の6世紀代以降に築造された古墳は群集墳を形成し、市内で約200基を数える。これらの古墳は、直径10～20メートル程度のも



図1-3-4 太夫塚古墳

¹ 第12代に数えられる天皇。名は大足彦尊(おおたらしひこのみこと)。垂仁天皇の第3皇子。『記紀』では紀元後51年に天皇になり、以後60年間即位し、日本武尊(やまとたけるのみこと)の父とされている。

のが多く、追葬が可能な横穴式石室を持つことが特徴である。首長墓の中には、神明宮第1号墳(石室長 11.6メートル、丸山町)、岩津第1号墳(石室長 10メートル、岩津町)等の西三河最大規模の横穴式石室をもつ円墳も現れる。先に示した当時の支配者の墓だけでなく、その地域の有力農民やその家族のものもあると推察されている。主な古墳群として、北部地区では巴川左岸から北斗川流域に所在する細川・仁木古墳群(11基)、岩津天満宮周辺の丘陵上に所在する岩津古墳群(6基)、東部地区では乙川中流域右岸に所在する丸山古墳群(5基)や経ヶ峰古墳群(3基)を包括する丸山古墳群、西部地区では碧海台地上に所在する小針古墳群(6基)・宇頭古墳群(16基)、中南部の明大寺丘陵部周辺に所在する外山古墳群(3基)・小豆坂古墳群(6基)等が挙げられる。

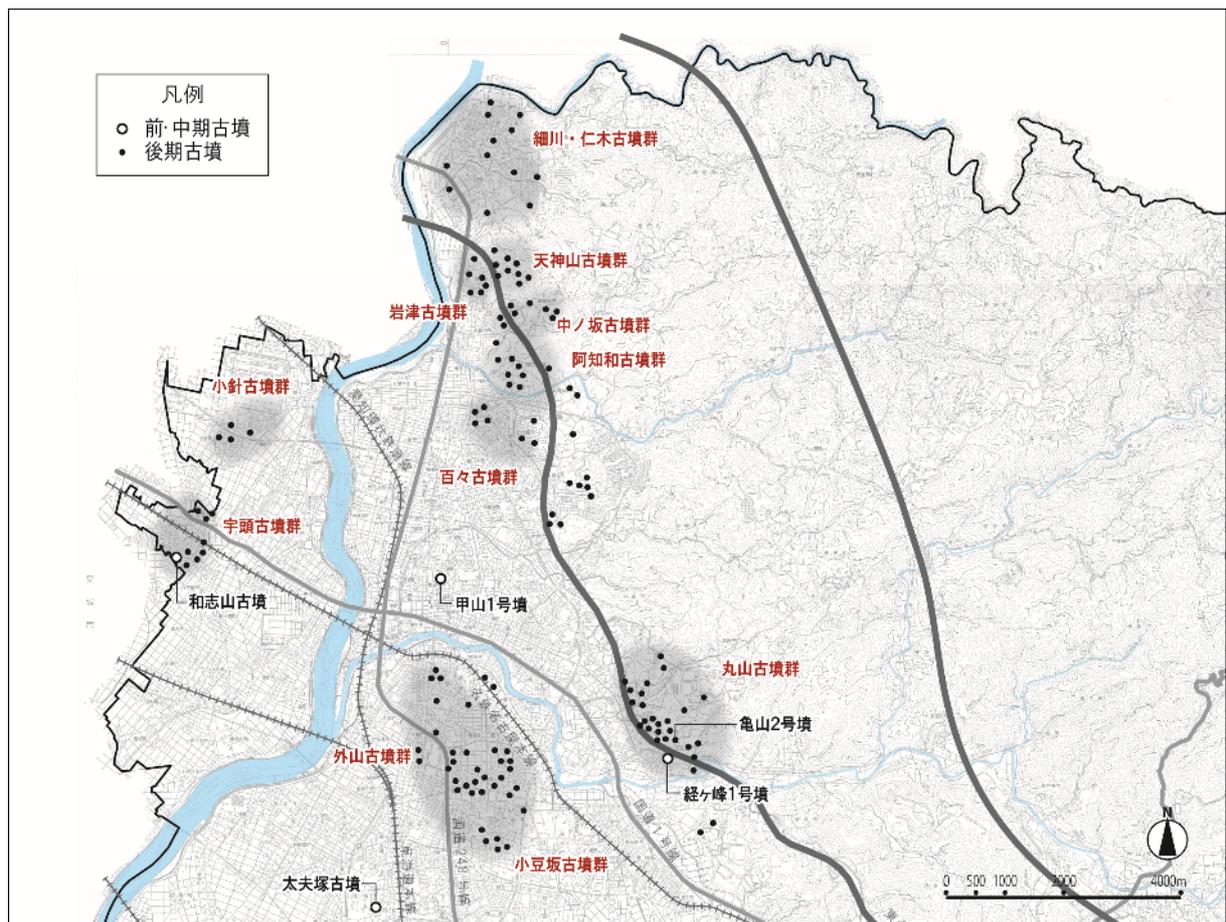


図1-3-5 古墳の分布

②古代 [三河国の成立]

ア.飛鳥時代 ～古代寺院の造営～

7世紀後期(飛鳥時代後期)になると律令制が実施され、律令国家は「国一郡一里(郷)」という行政区分によって全国を統一的に掌握するようになった。現在の岡崎市は古代三河国の額田郡と碧海郡の一部に含まれる地域にあたる。10世紀に編さんされた『和名抄』によると、額田郡の鴨田郷や位賀郷(謂我郷)のように現在までその名が町名として残っているとこるもあり、その郷の位置から矢作川沿いに多くの人々が住んでいたことがわかる。

仏教文化の伝来や律令国家による古墳づくりの規制により、古墳造営は7世紀半ばを過ぎると減少し、8世紀初めにはほとんど築造されなくなった。その後、寺院をつくるのが権力誇示の手段となり、7世紀後半に矢作川右岸の渡河点付近に北野麿寺(北野町)が建立された。北野麿寺は塔、金堂、講堂が一直線に並ぶ四天王寺式の壮大な伽藍を持つ西三河最古の寺で、その跡は国の史跡に指定されている。北野麿寺の瓦からは、矢作川流域から遠く長野県飯田まで広がり、周辺の仏教文化に影響を与えたことがうかがえる。北野麿寺と同じ型の瓦が使われた同時代の真福寺東谷遺跡(真福寺町)が対岸の山頂にある。

この時代、愛知県は尾張国造、三河国造、穂国造の勢力下で3つの地域に分かれていた。岡崎を含む西三河周辺は三河国造が支配し、最初の三河国造は『先代旧事本紀』に知波夜命と記されている。知波夜命は実在したか否かは判然としないが、祖先をたどると物部氏の祖先と結びついていることから、この地域と物部氏との結びつきは古くからあったと考えられている。また、三河には有力な豪族の私有民であった部曲がいた。特に西三河には物部氏の部曲である物部が多数存在し、物部連により管理されていたと考えられている。

なお、物部氏と三河の密接な結びつきは、古くから岡崎にある寺社にも見られる。東阿知和町にある謁播神社も知波夜命を祭神として祀っており、真福寺には物部真福により寺が創建されたという伝説も伝わっている。また『瀧山寺縁起』には物部のことが記されているなど、特に現在の市北西部は関係が深かったと考えられている。



図1-3-6 北野麿寺跡



図1-3-7 北野麿寺跡から出土した瓦

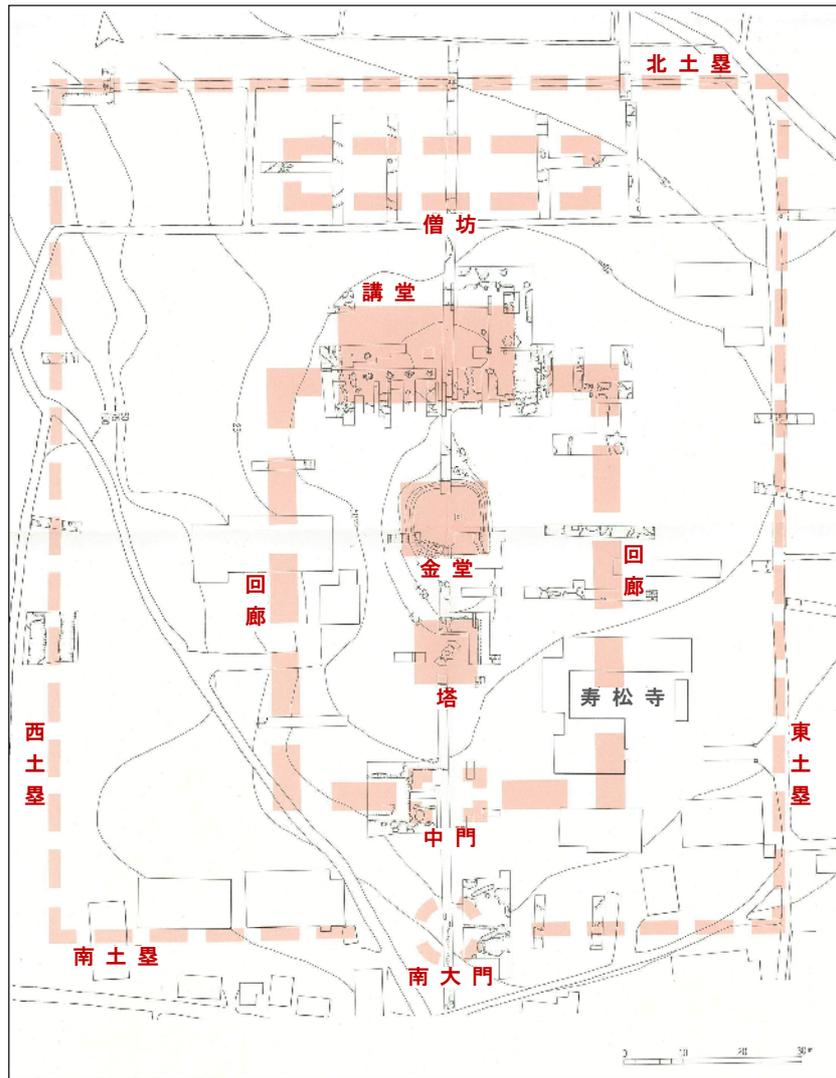


図1-3-8 北野廃寺跡の伽藍配置

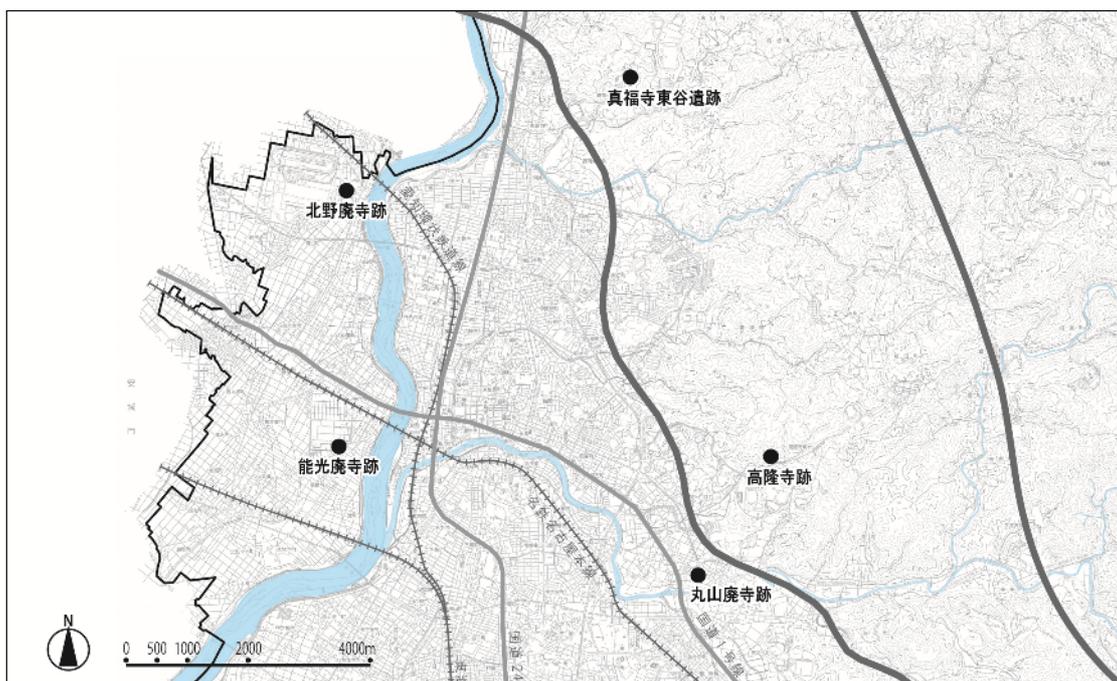


図1-3-9 古代寺院の分布

イ.奈良時代 ～律令国家による東海道の整備～

三河国には律令国家が整備した七道(東海道、東山道、北陸道、山陰道、山陽道、南海道、西海道)の一つである東海道が通っていた。要所には、駅制に基づく国の施設である駅家が設置され、中央に急を知らせる通信手段が確立されていた。駅家は、30里(約16キロメートル)に1駅の割合で設置され、いつでも使えるように駅馬を常備していた。

延長5年(927)の『延喜式』によれば、市内には碧海郡の鳥取(捕)駅家、額田郡の山綱駅家の2つの駅家の存在が考えられている。鳥取駅家は小針町付近にあった鷺取郷に隣接する宇頭町から矢作町のどこかに存在していたとされ、一方、山綱駅家は、山綱町にその地名を残していることから、山綱町を含むその周辺地域に存在していたと考えられている。

なお、『正倉院文書』により、天平勝宝2年(750)に物部氏が駅家の置かれた付近にいたと記され、山綱駅家に古代の軍事氏族であった物部氏が関係していたことから、古代の道は税を都に運ぶ道であるとともに、軍事的な役割を担っていたこともうかがえる。

ウ.平安時代 ～藤原氏による支配～

11世紀後半、三河国は藤原季兼が開発領主として市域の農地開発を行っていたと考えられている。藤原南家・武智麻呂の子孫にあたり、中国の学問を教える職(文章博士)について藤原実範の子である季兼は、自らの領地である三河国に居住し、「参川四郎大夫」とも号した。季兼は、農地開発した土地を国衙から認められた私領として郡規模に拡大したとされる。季兼は熱田大宮司尾張員職の娘、松御前と結婚し、晩年は尾張国の目代(国司の下級役人)も務めた。

季兼の子の季範は、幼少期は額田で成長したことから「額田冠者」と呼ばれた。季範は、12歳のときに季兼が亡くなり母方の祖父により養育され、後に熱田社(熱田神宮)の大宮司職の地位を譲り受けることとなる。さらに、季範は尾張国の目代にもなったことから、三河と尾張の2つの国に拠点を得ることとなり、藤原氏が大きく勢力を拡大し、これまでこれらの地を支配していた物部氏との勢力交替が起こった。



三河の名の由来

三河の名は、矢作川の尊称・美称として「御河(川)」や「美河(川)」と呼んだことから由来しているという説がある。『古事記』(和銅5年(712)編さん)において「三川」と記されているほか、奈良県明日香村石神遺跡から出土した7世紀後半と見られる木簡に、「三川穂評穂里穂部佐」(意味:「三河(国)穂評(ほのこおり)穂里(ほのさと)の穂部佐(ほべのたすく)」という人名であると解釈されている。)とあり、「三川」が記されている。また、他に「参河」の表記もあり、全て現在の三河を指し、三河の地を流れる豊川、矢作川、菅生川(乙川)の3つの河川に由来していると考えられ、他にも豊川、矢作川、境川の3川とする説などもあるが、いずれも通説には至っていない。

③中世 [武家文化の重要拠点]

ア.鎌倉時代

a.鎌倉街道矢作宿

東海道の矢作川の渡河点には、矢作の渡し場が東西にあり、平安時代に流行した催馬楽に「矢作の市に沓買ひにかむ」と歌われ、早くから市が形成されていた。鎌倉時代、東海道は京都御所と鎌倉幕府を結ぶ重要な道となった。中世には京都から数えて26番目の宿駅である矢作宿は、宿泊施設や日用品を生産・販売する職人や商人の店が建ち並ぶなど、東西交通の要衝として大いに賑わいを見せていた。政治、経済、文化の中心地であり、近世城下町とは異なる商業中心の町であったと考えられている。

当時の矢作宿は、矢作川を挟んで東西に位置していた。東側の矢作東宿は、現在の八帖町・八丁町、明大寺町、六名町付近と推定とされ、一方、西側の矢作西宿は現矢作町の辺りを中心に、あるいは渡町をも含んでいたと考えられている。

b.源氏・足利氏の三河支配

藤原季範の娘、由良御前と源義朝との間に生まれた三男で鎌倉幕府を開いた源頼朝は、全国支配のなかで三河国を政治的・軍事的に重要視し、三河国の守護・地頭には有力な御家人を任命した。そのため、東国武士の三河進出がめざましく、源氏と三河国の武士の結びつきは古くから強いものとなっていた。承久の乱(1221)の恩賞地として額田郡が足利義氏の領地となり、義氏は三河守護職、額田・設楽郡地頭職等に任ぜられた。『吾妻鏡』嘉禎4年(1238)の記述に、義氏の屋敷に4代将軍藤原頼経が宿泊したとあり、その一族や家臣たちの屋敷や額田郡公文所も矢作宿の辺りに並んでいたと考えられている。鎌倉時代を通じて、矢作川中下流域を中心に、この地域の土地の名を名字とした、一色氏、仁木氏、細川氏等の足利氏の一族や家臣が多く生まれ育っており、その一族が後の三河武士の源流となっていた。また、天恩寺を開創した永源寺2世弥

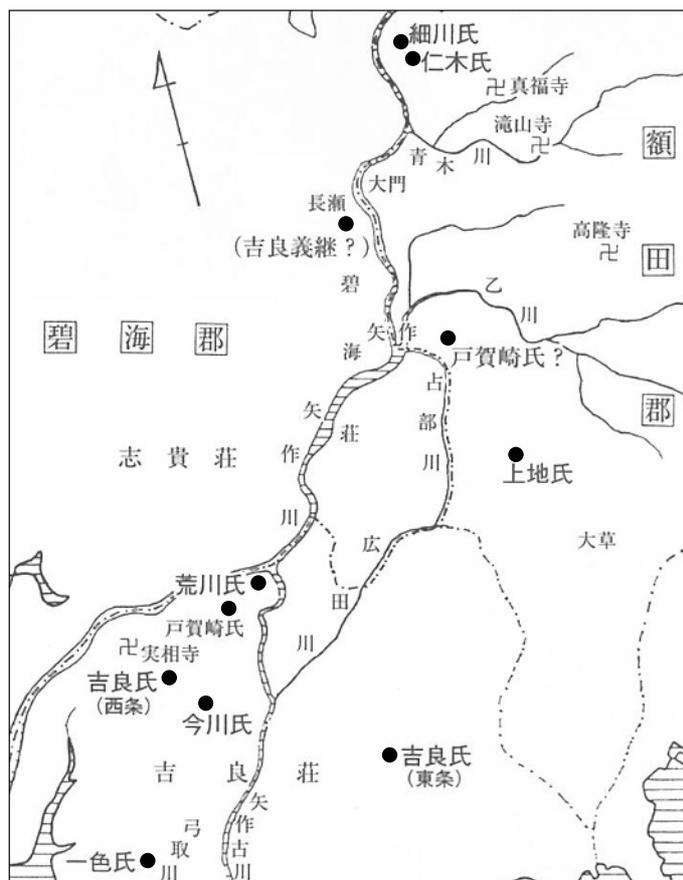


図1-3-10 矢作川中下流域に広がる足利一族

※位置をわかりやすくするため、下図(河川位置等)は、現在のものを用いている。

の屋敷に4代将軍藤原頼経が宿泊したとあり、その一族や家臣たちの屋敷や額田郡公文所も矢作宿の辺りに並んでいたと考えられている。鎌倉時代を通じて、矢作川中下流域を中心に、この地域の土地の名を名字とした、一色氏、仁木氏、細川氏等の足利氏の一族や家臣が多く生まれ育っており、その一族が後の三河武士の源流となっていた。また、天恩寺を開創した永源寺2世弥

天永 釈により、足利氏が帰依した臨濟宗が額田・作手(新城市)の三河山間部へ広まった。

足利義氏の子孫の尊氏が室町幕府を開くと、三河は幕府の直轄地として更に栄えた。源頼朝が大伽藍を建立し足利義氏が本堂を建立した滝山寺や、足利義満が建立した天恩寺等の寺院は、足利氏により寺領や堂舎・什物の寄進などを受け厚い庇護を受けた。なかでも滝山寺は中世から時々の権力者の庇護を受け再建されてきた寺院で、特に源氏・足利氏との関係が深い。

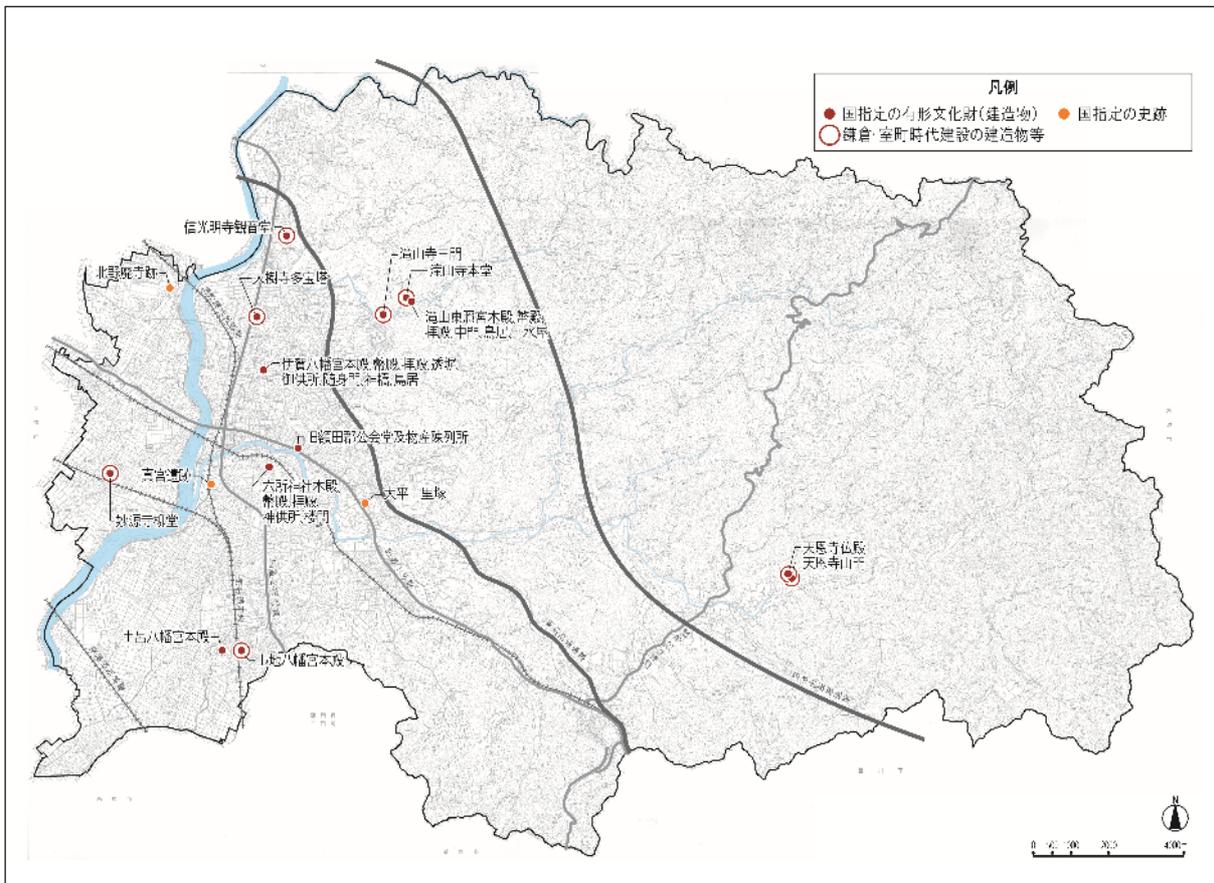


図1-3-11 国指定文化財(建築物、史跡)の一覧



源頼朝ゆかりの仏像

源頼朝の従兄であり、僧侶の寛伝は、頼朝の死に際してその菩提をとむらうため、三回忌にあたる正治3年(1201)に、滝山寺に惣持禅院を完成させ、頼朝と等身大の像をつくり、本尊とした。この像の胎内には、頼朝のあごひげと歯を形見として納めたと『瀧山寺縁起』に記されている。なお、滝山寺には、この像(聖観音)を含め、仏師運慶の作といわれている仏像(帝釈天、梵天)が合わせて3体(重要文化財)ある。

c.三河真宗のおこり

三河では、鎌倉時代後期までは真言宗、天台宗が正統仏教とされ、当時、現在の岡崎市域にあたる地域においても天台宗の勢力が強く、その代表的な寺院として真福寺、滝山寺、高隆寺等があげられる。

そうしたなか、建長8年(1256)、親鸞の弟子である顕智らが天台宗寺院の矢作薬師寺で浄土真宗を伝えている。浄土真宗の念仏(阿弥陀信仰)はもともと天台宗のものであり、天台宗の勢力が強い岡崎では浄土真宗の念仏を受け入れる土壌があった。

顕智は3年間三河に留まり、念仏に関心のある者たちに布教活動を行った。このとき集まった35人が顕智の弟子となり、道場を開いたことが、三河に真宗が広まるきっかけとなった。

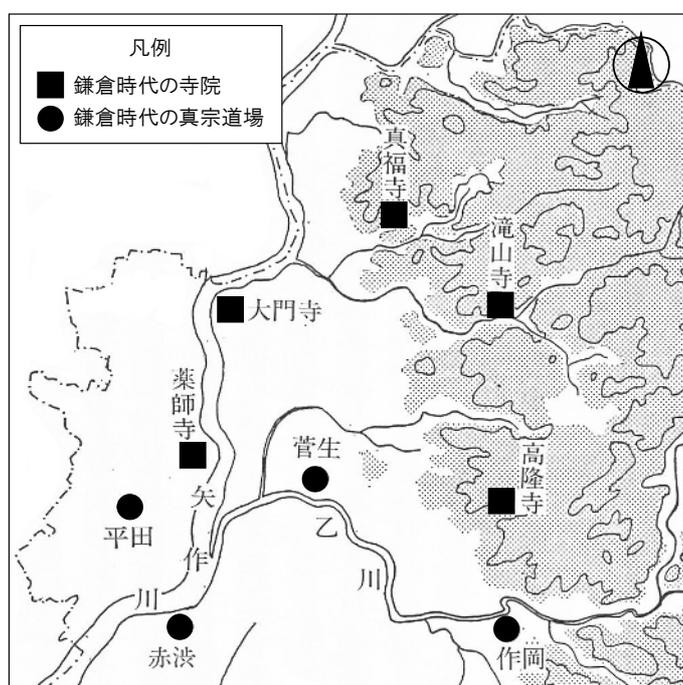


図1-3-12 鎌倉時代の寺院と真宗道場



浄瑠璃御前物語

岡崎には平安時代末期の矢作宿を舞台にした、『浄瑠璃御前物語』がある。

現在残されている室町時代末期以降の書写にかかる諸本の中の、赤木文庫本の『しやうり御せん物語』には、矢作宿の長者の娘浄瑠璃姫と源義経の悲恋物語がつづられ、寿永2年(1183)3月、叶わぬ恋のため、浄瑠璃姫は菅生川(乙川)に身を投げたと記されている。

『浄瑠璃御前物語』は、国文学研究においては創作物であるとするのが定説であるが、岡崎には、浄瑠璃姫の墓と称するものが矢作の誓願寺の境内にあり、明大寺の成就院には供養塔がある。『宗長手記』大永7年(1527)の条に「それよりやはぎのわたりして、妙大寺。むかしの浄瑠璃御前跡、松のみ残りて、東海道の名残、」とあり、当時より浄瑠璃姫の遺跡が世に知られていた。

イ.室町時代

a.南北朝の動乱と三河

元弘3年(1333)の後醍醐天皇の呼びかけに応じ、鎌倉幕府への反幕府勢力に加わった足利尊氏は、鎌倉を攻め落とした。建武2年(1335)に尊氏は北条氏の乱を鎮圧したが、帰京命令を無視して鎌倉に留まった。これに対して後醍醐天皇は、尊氏追討のため新田義貞を出陣させた。

後醍醐天皇側(南朝側)と足利尊氏側(北朝側)の両軍が対峙した矢作川の戦いでは、北朝側は矢作東宿に陣を張り、一方、南朝側は矢作西宿に陣を張った。南朝側は北朝側に中州から矢を射かけ、挑発された北朝側は矢作川を渡り始めたが、攻撃され敗退した。その後、勢力を盛り返した北朝側は各地で南朝側を撃破して室町幕府を開いた。一方、後醍醐天皇は吉野に脱出したため、「京都の北朝・吉野の南朝」と呼ばれる南北朝時代が始まった。

現在、後醍醐天皇側(南朝側)と足利尊氏側(北朝側)が戦った場である矢作川の右岸には、矢作川合戦の伝説を伝える矢作神社のうなり石が祀られている。

この頃、三河守護には足利家執事であった高師直一族が任命されるも、足利氏内争により滅亡した。文和4年(1355)に高師泰の娘で高師冬の妻の明阿は尊氏に一族の菩提所を建てることを願い出て、後の籠田総門南に総持尼寺を建立し菅生郷を寺に寄進した。その後、三河守護は尊氏の信任が厚かった仁木氏が任命されたが、尊氏没後、仁木氏も没落した。代わって大島氏が就き、長い在任期間により三河守護の安定時代となった。

b.守護と奉公衆

永和4年(1378)頃、三河守護は大島氏から足利一族の一色氏に交代し、範光以後4代60年にわたり、一色氏が三河を支配した。実際は、一色氏自身は京都で幕府要職に就いて将軍に直接仕えており、守護代や守護又代と呼ばれる、その土地に住む家臣が統治していた。

こうしたなか、一色氏は南北朝の混乱のなかで、守護の権限を強め、渥美郡や下和田郷を幕府の命令に従わず配下とし、三河国の支配を強化していた。将軍は、このような勢力を抑えるため奉公衆と呼ばれる直属の軍隊を持っていた。

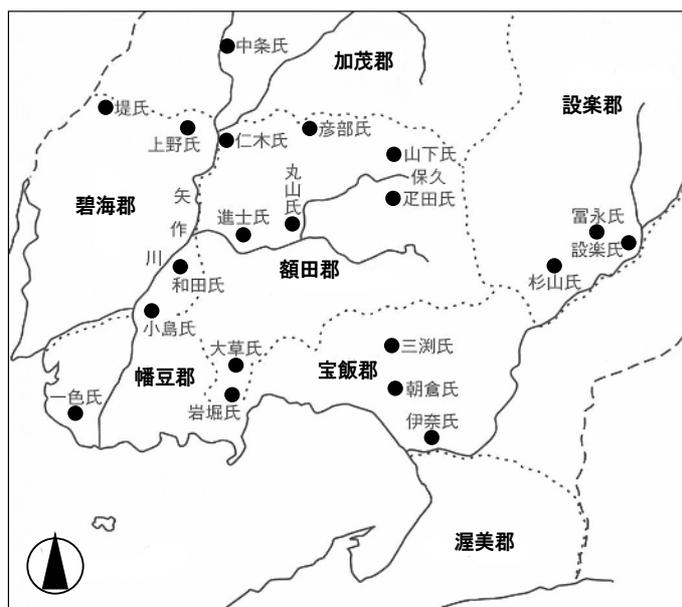


図1-3-13 三河に広がる奉公衆

約340家あったといわれる奉公衆のうち、三河地域には約40家が存在していた。三河に次

いで美濃^{みの}30家、近江^{おうみ}25家、尾張19家であったことから、この4か国で約110家となり、全体の3分の1を占めていたことになる。

奉公衆は、彦部^{ひこべ}氏のように鎌倉時代から足利氏の家臣だった者や、進士^{しんじ}氏のように鎌倉幕府の御家人だった者など、足利氏の一族に連なる者たちが多かった。



菅生川(乙川)の開削事業

現在、岡崎城の南側を西流する菅生川(乙川)は、かつては明大寺丘陵と六名の微高地の間を南流していた。室町幕府の命により、「六名堤」^{むつなつみ}が現在の久後崎町^{くごさき}地内に築かれ、岡崎城南側を開削し西流させる工事が行われ、現在の流路となったと考えられている。応永6年(1399)に、六名堤築造による影響で下和田郷の用水が不通となった記録があることから、六名堤の築堤はそれ以前に行われていたと推測できる。

六名堤の築造により矢作川から直接菅生や明大寺へ船で入れるようになり、まちの発展等に大きな影響を与えたとともに、西流する菅生川(乙川)は岡崎城南側の巨大な堀というべきものとなり、要害の地としての意味をもつこととなった。



中世の岡崎の城(岩津城、山中城)

市内には、岡崎城のほかに、中世の城館として重要な岩津城と山中城の2つの山城がある。

現在の岩津城跡は、南北200メートル、東西150メートルの大きさで、岩津町字東山の山頂にある。応永28年(1421)、松平泰親^{やすちか}は松平より岩津に進出、泰親の子信光^{のぶみつ}は勢力を拡大し、この頃までに岩津城が作られていたと思われるが、その規模・形態は不明である。

現在の山中城跡は、南北200メートル、東西400メートルの、山城としては愛知県下最大級の大きさで、舞木町字城山から羽栗町の通称岩尾山の頂上一帯にある。この城は、東海道や吉良道など交通の要衝にあるため、三河を支配する者にとって重要な城であった。

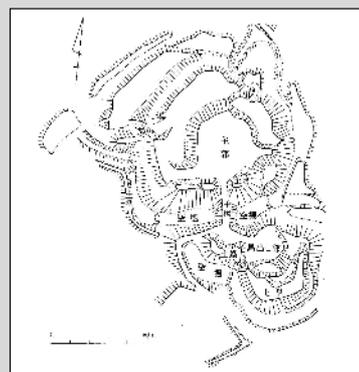


図1-3-14 岩津城

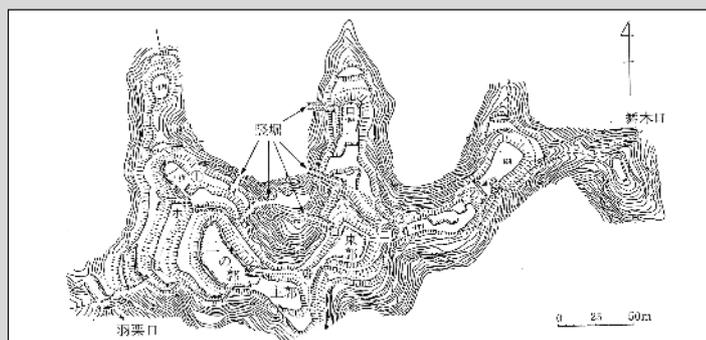


図1-3-15 山中城

ウ.戦国時代

a.応仁の乱と松平氏

応仁元年(1467)、将軍・管領家の後継ぎ問題に端を發し、天下を二分する応仁の乱が起こり、三河国内においても戦が行われた。

三河では、文明8年(1476)、三河守護代の東条氏が丹後・伊勢半国守護の一色氏と戦って敗北した。一色氏は三河の支配力を回復するため、三河守護の細川氏や三河国人領主の松平氏らと戦いを繰り返したものの敗北し、松平氏が三河の支配力を強めていった。

一方、西郷頼嗣(稠頼)は永享年間(1429～1441)に明大寺に屋敷城を築き、享徳元年(1452)～康正元年(1455)に菅生川(乙川)北岸の菅生郷内龍頭山(現在の岡崎城)に砦を築いた。しかし、松平信光に屈服し、信光は頼嗣と和を結び、子である光重を婿に送り込み、以後、光重が岡崎を支配するようになった。

享祿3年(1530)～4年(1531)に、家康公の祖父にあたる松平清康が明大寺の岡崎城から龍頭山の岡崎城に松平氏の本拠地を移した。

西三河において、松平庶家が、家督を相続した親長の他、岡崎の光重、安城の親忠、竹谷の守家、五井の忠景、形原の与副、長沢の親則等に分立し、その後、松平4代親忠、5代長親、6代信忠のときにも支配地に一族を配置し、松平の勢力を広げていった。

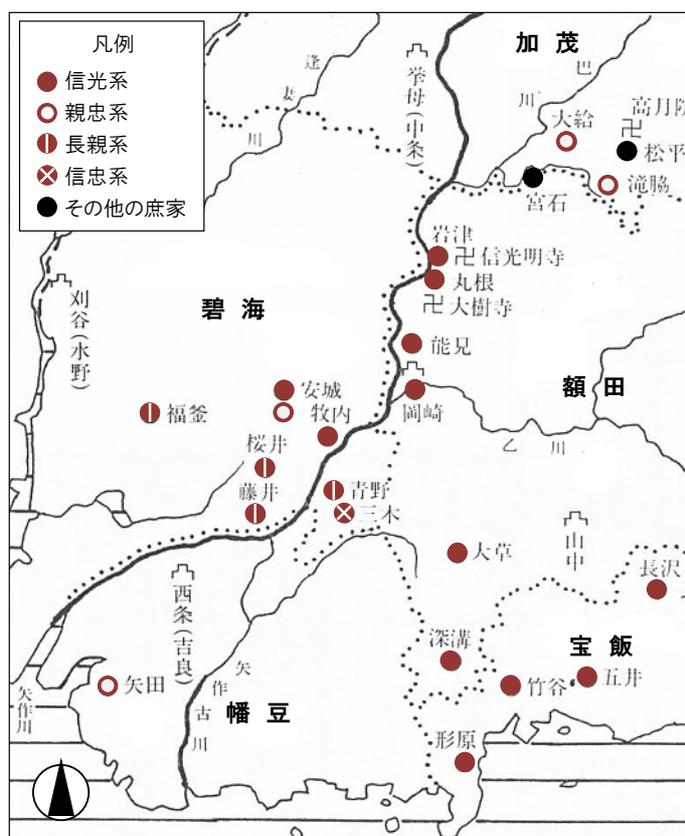


図1-3-16 松平諸家の分立図

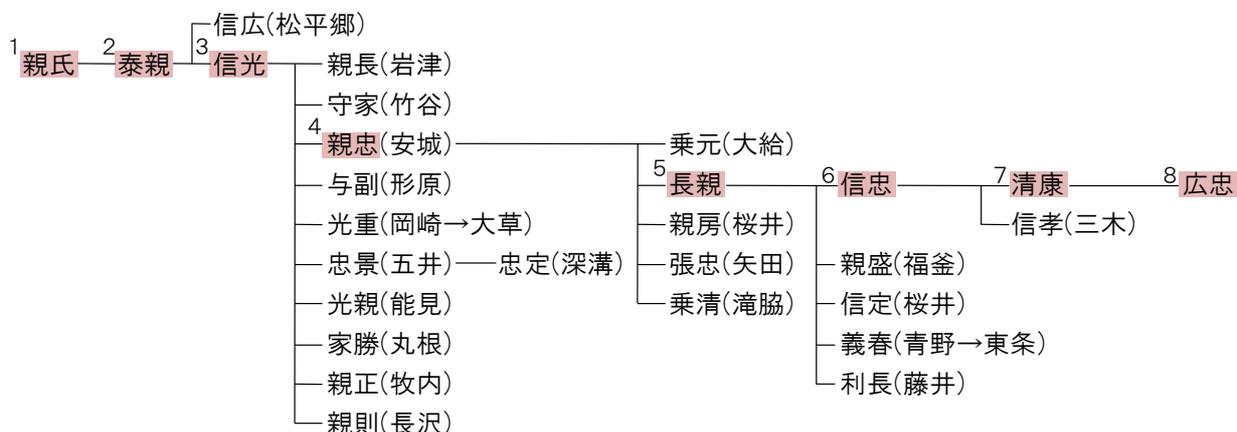


図1-3-17 松平8代系図

b.三河本願寺派の成立

15世紀後半、もともと三河には、関東の真宗寺院の影響が強かった5か寺(上宮寺、妙源寺、満性寺、勝鬘寺、本證寺)があり、それらの寺院が中心となって三河真宗を牽引していた。

こうしたなか、本願寺8世の蓮如は、三河を始め近江や北陸等の地方教団の中心寺院を本願寺派に引き入れることに力を注ぎ、三河真宗教団を分裂させて、三河三か寺と称される上宮寺、勝鬘寺、本證寺の中心寺院とその他の寺院を上宮寺5世・如光の協力により本願寺派に引き入れた。永正7年(1510)頃、土呂(福岡町)の本宗寺は本願寺9世実如の四男・実円が住持となり、一家衆寺院として信者をつなぐ役割を果たした。次第に寺内町が形成され、『土呂山畠今昔実録』(明和5年(1768)頃)に東西10町余、南北8町余の範囲に末寺・民家が1,200軒あったと記されるほど広がった。



図1-3-18 蓮如・如光連座絵像

c.松平氏による三河統一と三河譜代の成立

応仁元年(1467)、応仁の乱に伴う三河国内での合戦のなかで戦いに勝ち、三河における支配力を強めていったのが、家康公の先祖である松平氏である。三河での権力争いは15世紀前半に松平郷(豊田市)から岩津に進出した松平2代泰親、3代信光の時代に始まり、以後、6代信忠までの間に西三河を中心に繰り広げられて支配を進め、家康公の祖父7代清康が岡崎城に入城している。

こうしたなか、松平氏の歴代の家臣は「譜代」といわれ、近世においても重要な役割を果たした。なかでも三河譜代といわれる家臣団は、広くは家康公の岡崎在城時代までに、狭くは清康の代までに服属した者を指し、後に四天王(酒井忠次、本多忠勝、榊原康政、井伊直政)、十六将と呼ばれる者もいた。これら三河譜代は幕府成立後も、譜代大名や旗本となり、幕府の政治の中核を担っていくこととなる。江戸幕府において三河出身の親藩・譜代大名は279藩のうち123藩、直参旗本では840家のうち295家を数えるなど、全国に渡った三河武士たちが日本の国造りの礎を築き、支えていたことになる。



図1-3-19 四天王(左から、酒井忠次、本多忠勝、榊原康政、井伊直政)

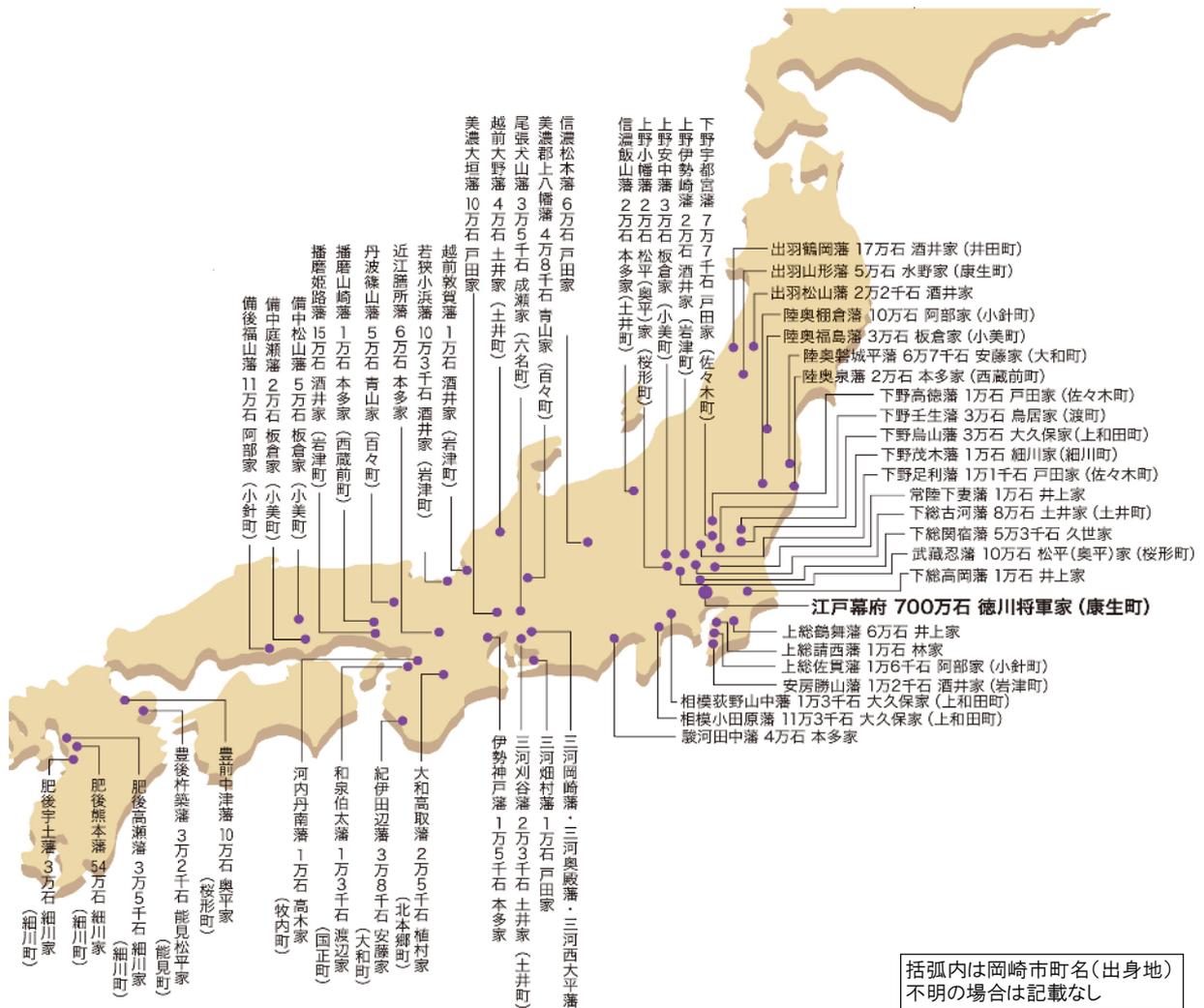


図1-3-20 岡崎市出身の大名(幕末期)



岡崎三奉行

『藩翰譜』※1によれば、永禄8年(1565)、三河を統一した家康公は、三河の地を治めるために、「岡崎三奉行」あるいは「三河三奉行」といわれる民政・訴訟等を担当する職をつくり、高力清長、本多(作左衛門)重次、天野(三郎兵衛)康景の3名をこれにあたらせたと伝えられている。

家康公の、三人三様、異なる性格を持った者たちを抜擢し、適材適所に配置した人事面の評価に対して、当時、「仏高力、鬼作左、どちへんなし」※2の天野三兵」という歌が流行したといわれている。

なお、「岡崎三奉行」については、成立年が永禄10年(1567)ではないか、また高力を始めとした3名以外にも奉行職にあたった者がいたのではないかとする異説もある。

※1:江戸時代の家伝・系譜書。元禄13年(1700)、甲府藩主徳川綱豊の命により、儒者の新井白石が編さんしたものであり、慶長5年(1600)から延宝8年(1680)までの内容が収録されている。

※2:「どちらにもかたよらない」、「公平な」という意味。

d. 松平氏・徳川家の勢力拡大と浄土宗の発展

松平氏はその勢力拡大とともに各地に寺院を建立したため、家康公生誕地である岡崎市には特に松平氏、徳川家が創建に関わった寺社が多く存在している。松平3代信光建立の萬松寺、信光明寺、妙心寺、松平4代親忠建立の大樹寺(松平宗家の菩提寺)、伊賀八幡宮、松平7代清康建立の六所神社、龍海院、家康公建立の松應寺、隨念寺等である。これらの寺社には松平氏、徳川家による寄進物も多く、彼らの勢力伸張とともにその寺格を高め、勅願寺となる寺院もあった。また松平氏建立寺院の多くは浄土宗であり、特に信光明寺と大樹寺の建立によって、三河の地に浄土宗が広く普及し、その発展につながった。

e. 松平氏の衰退と徳川家康公の誕生

天文4年(1535)、「守山崩れ」により松平清康を失った松平一族では対立と分裂が起こる。天文9年(1540)、尾張の織田信秀は三河への進出を本格化させ、安城城を攻め落として矢作川以西の大部分を奪った。

このような状況のなか、天文11年(1542)に岡崎城内で竹千代(家康公)が誕生した。この時期、松平家では、内外ともに争いが相次いだ。同年の第一次小豆坂の戦いで織田氏が勝利すると内部分裂が更に激しくなり、三木の松平信孝を退かせる動きがあった。また、天文16年(1547)、織田信秀が松平信孝と共に岡崎を攻撃するという動きが見られ、松平広忠は、今川氏に嫡男竹千代を人質に出して加勢を求めた。天文17年(1548)第二次小豆坂の戦いでは、今川氏は西三河に大軍を派遣し、織田信秀に勝利した。同年、松平信孝は岡崎城の松平広忠を攻めるも返り討ちに合って戦死し、翌天文18年(1549)には、広忠も刺客により殺害され、松平家には後継ぎが不在となった。



図1-3-21 小豆坂古戦場跡



図1-3-22 家康公産湯の井戸

f. 今川支配下の三河と家康公の自立

天文15年(1546)、今川義元の吉田城(豊橋市)攻撃により、三河の今川領国化が始まった。以前より三河の国人たちと緩やかな主従関係を持っていた今川氏は、三河に大きな影響力を及ぼすことになった。

松平広忠が殺害された天文18年(1549)、松平領国は今川氏の支配下に入り、以後、三河に

おける最高権力者は今川義元となった。岡崎城代には今川氏の有力な家臣が入り、永禄3年(1560)の桶狭間の戦いまでの約10年間は今川氏が西三河を支配した。

一方、天文18年(1549)、8歳の竹千代は義元の命により人質として駿府に送られた。その後、竹千代は14歳で元服して元信と名乗り、弘治3年(1557)、義元の姪にあたる瀬名姫(築山殿)をめとり、元康と改名した。

永禄3年(1560)、桶狭間の戦いで義元が織田信長の急襲を受けて戦死すると、元康は岡崎に逃げ帰って大樹寺に入ったのち、今川勢が岡崎城から撤退すると帰城した。元康は、その直後から旧領地を支配下におき、松平家臣団の再編成に努める。永禄4年(1561)、松平と織田との和睦が成立すると、元康は今川氏からの完全独立と三河国統一を目指し、西三河南部をほぼ自らの支配下とした。翌永禄5年(1562)、元康は清須城で信長と会見し、同盟を結んで東三河への進出を始めた。永禄6年(1563)、義元の「元」の字を与えられて名乗っていた元康は家康に改名し、今川氏からの完全自立を図った。



守山崩れ(松平清康の暗殺)

岡崎城主松平清康の家臣阿部定吉が織田信秀と内通し、謀反を企んでいるという噂があるなか、天文4年(1535)12月5日の早朝、三河国岡崎城主松平清康の陣中(尾張国春日井郡森山(現在の名古屋市守山区))において、清康が定吉の嫡男正豊によって暗殺されたことをいう。

実は、この謀反の噂に対し定吉は正豊に、もし自分が濡れ衣で殺されることがあったら、これを殿に見せるよう誓書を手渡し、自らの潔白を示していた。ところが12月5日早暁、清康の本陣で起こった放れ馬の騒ぎを、正豊は清康により父定吉が誅殺されたためと勘違いし、清康を背後から殺してしまったということが伝わっている。これにより、三河をほぼ統一した名将である清康を失うこととなった松平家は、その嫡男広忠が家督を継ぐものの、広忠は若年であったことから、織田信秀の侵攻を抑えられなくなり、松平氏は衰退していった。



徳川改姓

永禄九年(1566)、家康公は「松平」を改めて「徳川」姓とすることを正親町天皇から許され、あわせて三河守に任ぜられている。これには、家康公自身が三河一国の支配者であることを、天皇による改姓の承認によって国内外に明確化しようとする政治的意図があったと考えられている。

このとき家康公が名乗った徳川姓については、提出された系図において松平氏を藤原氏系統と位置づけており、徳川氏も藤原氏系統であると説明されていた。

その後、約40年を経て関ヶ原の戦いに勝利し、天下を掌握した家康公は、征夷大將軍に就任するにあたり、將軍職は清和源氏の流れを汲む者が就くべきであるという伝統的な慣例を重視し、徳川氏を源氏系統の後裔とする新たな系譜を公式に採用した。これは姓を改めたものではなく、將軍就任の正統性を確保するために、祖先系譜の説明を変更したものである。

g.三河一向一揆と家康公の三河平定

永禄6年(1563)、^{みかたがほら}三方ヶ原の戦い、伊賀越えと並び、家康公の三大危機とされるできごとが起こった。家康公の家臣が^{いっこうしゅう}一向宗(真宗本願寺派)寺院の外部権力の使者の立ち入りを拒否することができる「^{ふにゅうけん}不入の権」を無視し、^{ひょうろうまい}兵糧米を徴収しようとしたことに反発した一向宗門徒(土呂本宗寺、三河三か寺といわれた^{ささきじょうぐうじ}佐々木上宮寺、^{はりさきしょうまんじ}針崎勝鬘寺、^{のてらほんしょうじ}野寺本證寺)が、^{かわいっこういっ}三河一向一揆を起こした。これは、三河では古くから浄土真宗信仰が盛んで、15世紀後半には蓮如上人の布教により本願寺派教団がすでに成立し、一向宗の勢力地盤であったことが大きく影響している。家康公の家臣の中にも一向宗側の者がおり、攻め入られた家康公は、窮地に立ったものの、永禄7年(1564)、^{ぼとうがほら}馬頭原の戦いにおける勝利により^{じょうしゅいん}浄珠院(岡崎市上和田町)での和議に持ち込み、一揆の解体を行った。これにより天正11年(1583)までの19年間は、三河は真宗禁制の地となった。

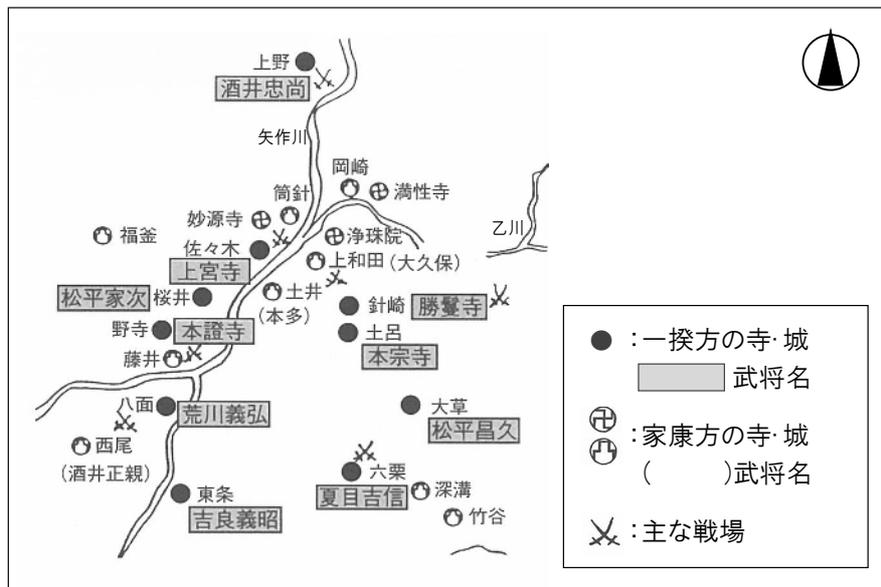


図1-3-23 一向一揆関係図

④近世 [岡崎藩の成立と幕府領による支配]

ア.安土桃山時代

a.豊臣家臣田中吉政による城下町整備

天正18年(1590)の家康公関東移封後は豊臣重臣の^{たなかよしまさ}田中吉政が岡崎城主となった。江戸時代初めに^{やすしげ}本多康重が任ぜられてからの城主は代々譜代大名が務め、本多家4代(前本多家)、水野家7代、松平家1代、さらに本多家6代(後本多家)の計19名が岡崎城主となり、279年間、岡崎を治めた。特に、田中吉政は大土木事業を行い、岡崎城の城郭(総構え・総曲輪)の整備を進め、東海道を城下へ引き入れた。城下町では、武士を城の近くに住ませる侍町の整備や生活必需品と戦に必要な商品などを扱う商人や職人の住む町の整備を行い、それを堀と^ど土塁で囲む総構えとし、近世の大城郭の基礎を築いた。

イ.江戸時代前期

a.前本多家の城下町整備

関ヶ原の戦い後の慶長6年(1601)に藩主となった本多康重を始め、その後3代にわたる城主は田中吉政による城下町整備を引き継ぐとともに、^{やぎぼし}矢作橋や東海道の整備、町人たちの大規模な移住等を行った。特に、慶長6年(1601)の伝馬制の制定と矢作橋の完成により、岡崎城下へ引き入れられた東海道に対して、馬出しや白山曲輪を整備することで城郭防衛が進められた。東海道は、その後更に変更が重ねられ、慶長14年(1609)以降、まちの防衛と街道筋の伸長のために曲がりくねり、『東海道巡見記』^{とうかいどうじゆんけんき}(延享2年(1745))に「廿七曲りと云ふ」と記され、「東海道岡崎城下二十七曲り」^{にじゅうななまが}と呼ばれる街道となった。現在もその道筋のほとんどをたどることができる。

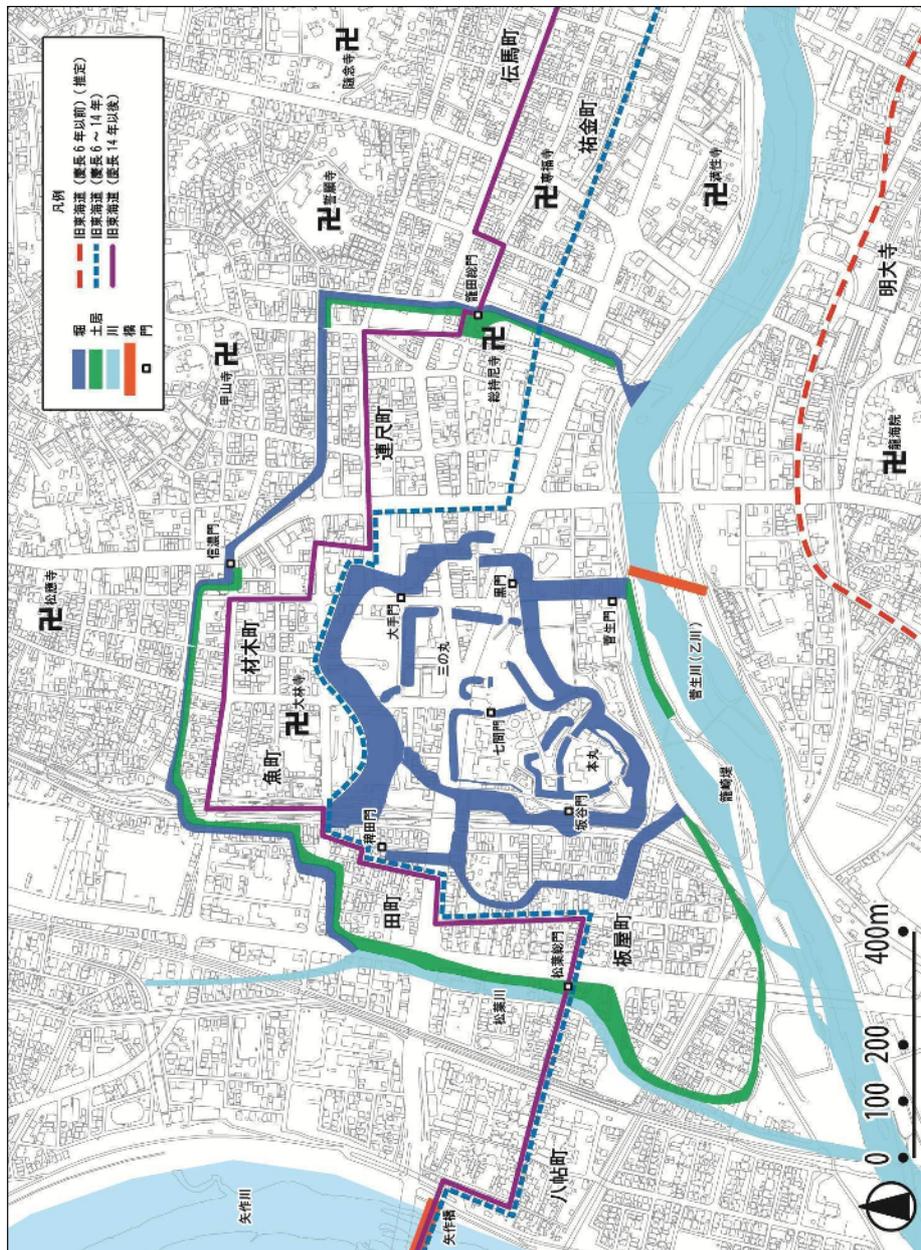


図1-3-24 東海道の位置の変遷

また、「お城下まで舟が着く」と歌われたように、矢作川と菅生川(乙川)では舟が行き交い、さらに、東海道により物資・文化が往来して城下町・宿場町として繁栄した。正保2年(1645)、本多忠利の頃までには、東海道が城下に入る出入口の東に籠田総門、西に松葉総門が、さらに北方の塩の道へ通じる足助街道の起終点となる出入口に信濃門が設けられた。

こうした整備により岡崎城は家康公の生誕城として、5万石の石高に比しては大規模な城郭となった。近年の発掘調査により日本国内で五指に入る規模の城の遺構が明らかとなってきている。

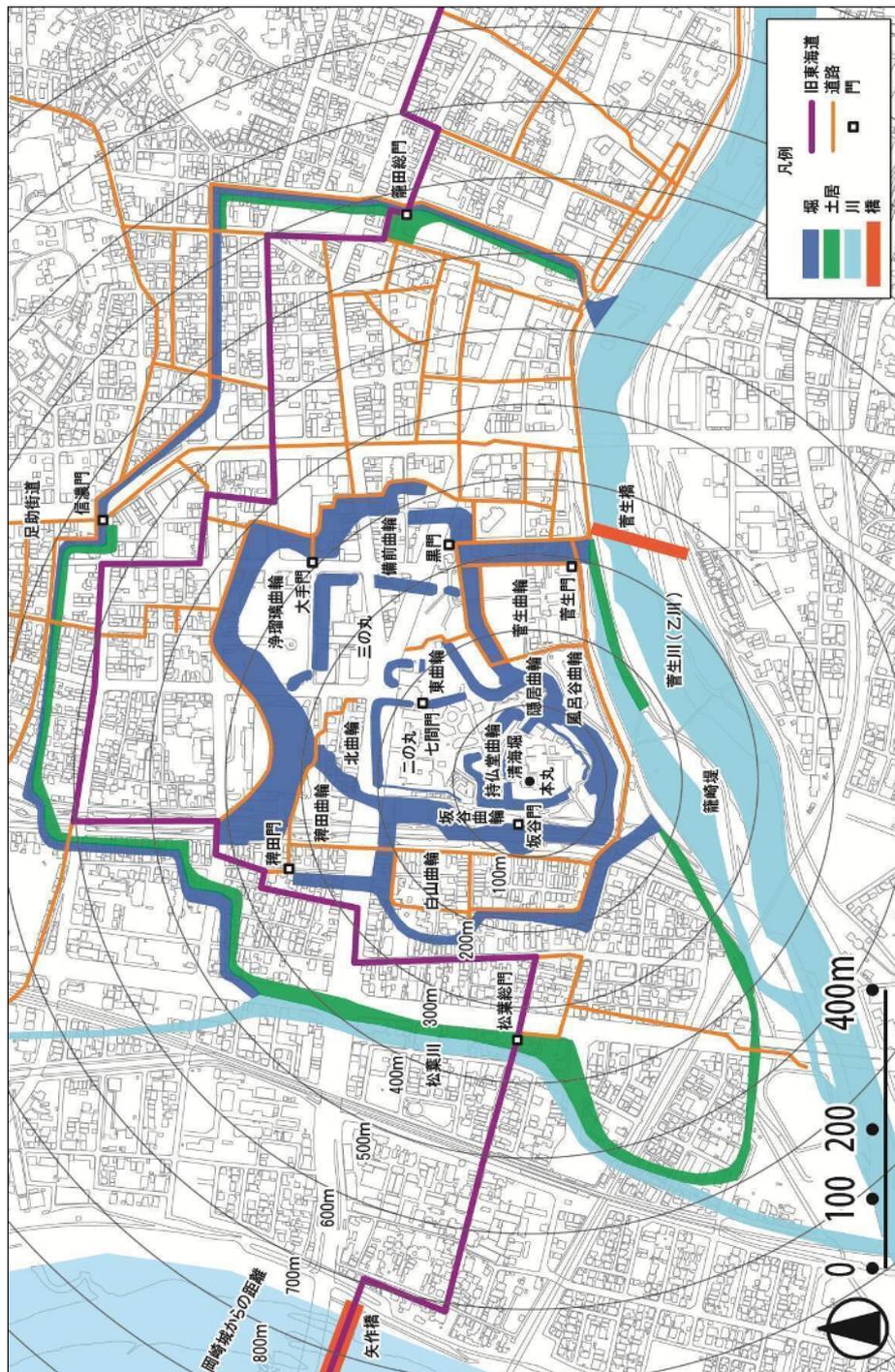


図1-3-25 岡崎城郭

b.水野忠善の城下町整備

正保2年(1645)、岡崎藩主になった水野忠善は、田中吉政時代に始まり前本多家に受け継がれた城下町整備を更に進め、完成させた。

堀で守られた総構え内の町人が住んでいた町家を総堀近くに移し、空いた場所に家臣が住む侍屋敷を作り、その戸数を増やした。また、それまで根石原、欠村、六名村の総堀の外に分散していた足軽が住む組屋敷を、材木町、連尺町の総堀の北側や明大寺村に移して城郭の周囲を取り巻くように配置した。

こうした城下町の総堀や東海道沿いには、町家も多数作られ、特に東海道沿いには19の町があり、「岡崎城下町廻り」又は「岡崎宿廻り 19 か町」と呼ばれ、その様子は明治維新まで変わることがなかった。

表1-3-1 岡崎歴代藩主(城主)と在籍期間等

歴代岡崎城主	在任期間	できごとなど
さいごうよりつぐ 西郷頼嗣	不明	文明年間の初め松平信光の攻撃を受けて敗北、信光の子光重を婿養子に迎え、額田郡大草(幸田町)へ隠棲したとされる。
まつだいらみつしげ 松平光重	不明	松平信光の五男で、西郷頼嗣の跡を継いで岡崎松平氏の初代となった。紀伊守を名乗る。明応2年(1493)、妙(明)大寺の彦左衛門尉に光林寺屋敷の替地を与えた。
まつだいらのぶさだ 松平信貞	不明	額田郡山中に要害をかまえ、安城松平氏の清康と対立したので、大永4年(1524)清康によって山中城を攻め落とされ、ついで岡崎城も清康に譲り、額田郡大草に隠棲した。
まつだいらきよやす 松平清康	1524~1535	当時の居城は菅生川南岸明大寺にあったが、狭隘で軍事的にも不十分であったために龍頭山の砦(現在の岡崎城)を拡張・整備して同所に移った。
まつだいらひろただ 松平広忠	1535~1549	松平家の内紛により桜井松平家の信定によって岡崎城から追われ、伊勢・遠江を流浪した。天文6年(1537)に今川義元の援助で岡崎城に復帰した。
とくがわいえやす 徳川家康	1560~1570	今川義元が桶狭間の戦いで亡くなると岡崎城に復帰、三河平定に乗り出す。三河一向一揆を鎮圧し、永禄8年(1565)には三河一国を支配下においた。
とくがわのぶやす 徳川信康	1570~1579	元亀元年(1570)に家康公が浜松城に居城を移すと岡崎城主となった。織田信長から武田氏に内通したとの嫌疑を受け、天正7年(1579)に遠江二俣城で切腹した。
いしかわかずまさ 石川数正(城代)	1579~1585	天正7年(1579)に信康が切腹すると岡崎城代となる。家康公の片腕として活躍したが、天正12年(1584)小牧・長久手の戦いの後に徳川家を出奔して豊臣秀吉に臣従した。
ほんだしげつぐ 本多重次(城代)	1585~1590	家康公上洛の人質である大政所宿所の周りに薪を高く積み上げ、万に一つ、主君家康公が秀吉に捕らえられるようなことがあれば、薪に火をつけ大政所を焼き殺すと誓した。
たなかよしまさ 田中吉政	1590~1600	天正18年(1590)、徳川家康公が関東に領地替えになった後に岡崎領主となる。城下町建設や矢作川築堤を行い、近世岡崎の基礎をつくる。
ほんだやすしげ 本多康重(前本多)	1601~1611	岡崎藩本多家初代藩主。家康公の家臣として、小牧・長久手の戦いで活躍。関ヶ原の戦い後の岡崎藩主に任命された。
ほんだやすのり 本多康紀(前本多)	1611~1623	大坂冬の陣・夏の陣で活躍し、その後も大坂に残って城門の警備を行った。岡崎城の大改築を行い、天守を再建した。
ほんだただとし 本多忠利(前本多)	1623~1645	大坂夏の陣で父と共に活躍し、家康公に褒められた。城改修工事を進め、土塁を石垣にし、堀に菅生川の水を引き入れた。
ほんだとしなが 本多利長(前本多)	1645~1645	10歳で岡崎藩主になった。藩主になった1か月後に、遠江国横須賀藩に領地をかえられた。久能山東照宮の修造工事をを行った。

みずのただよし 水野忠善	1645~1676	三河国吉田藩(豊橋市)から領地替えて岡崎藩主となる。手永制で農村を支配した。家臣団の強化に力を入れた。
みずのただはる 水野忠春	1676~1692	無駄な出費を抑えて苦しい財政を立て直しを図った。年貢率を引き下げようとして検見引や木綿何割引(もめんなんわりびき) ² を行った。
みずのただみつ 水野忠盈	1692~1699	矢作橋修造や大樹寺修営を行った。三河国絵図作成の責任者として絵図を元禄12年(1699)に作り、將軍に献上した。
みずのただゆき 水野忠之	1699~1730	幕府の老中となり、享保の改革の中心人物として活躍した。しかし、藩の支出は増え続け、財政悪化が急速に進んだ。
みずのただてる 水野忠輝	1730~1737	享保の大飢饉のときに、領内から一人も餓死者を出さなかったため、8代將軍吉宗からお褒めの言葉を受けた。
みずのただとき 水野忠辰	1737~1752	若手の人材を採用して藩政の改革を図った。重臣の反抗で改革は失敗したが、一般家臣や領民からは名君といわれた。
みずのただとう 水野忠任	1752~1762	10年間岡崎藩主を務めた後、肥前国唐津藩主になった。村役人や町役人は領地替えの中止を願ったが、かなわなかった。
まつだいらやすよし 松平康福	1762~1769	下総国古河藩から岡崎藩主となった。幕府の老中も務めた。藩が財政難であったため、幕府に領地替えを願い出て、石見国浜田藩主となった。
ほんだただとし 本多忠肅(後本多)	1769~1777	石見国浜田藩から領地替えて岡崎藩主となった。財政を立て直しのために家臣の禄高を減らしたが、上手くいかなかった。
ほんだただのね 本多忠典(後本多)	1777~1790	藩財政が苦しいために、老中に領地替えを願い出たが、認められなかった。その代わりに御番所火の番などが免除された。
ほんだただあき 本多忠顕(後本多)	1790~1821	財政を立て直すために、31か条の儉約令を出して改革を図った。当初は改革に熱心だったが、上手くいかず熱意を失った。
ほんだただなか 本多忠考(後本多)	1821~1835	前藩主の財政改革の失敗により、再び藩士の禄高を減らしたが、上手くいかなかった。幕府から7,000両の借金を許される。
ほんだただもと 本多忠民(後本多)	1835~1869	安政の財政改革を行った。幕府の老中となり、幕末の難局を処理した。大政奉還後は、新政府に協力する立場をとった。
ほんだただなお 本多忠直(後本多)	1869~1871	明治2年(1869)2月、忠民隠居に伴い家督を継いで岡崎藩主となり、6月、版籍奉還により岡崎藩知事となる。



正調岡崎五万石

古く江戸時代から歌い継がれてきた歌に「^{せいちょうおかざき ごまんごく}正調岡崎五万石」がある。

江戸時代に岡崎のお城下を巡る矢作川のきれいな川面を、大きな白帆を張ってのんびりと上り下りした舟の船頭衆が、「五万石でも岡崎様はお城下まで舟がつく」と歌った舟唄から始まったと伝えられる「五万石」は、祭礼時の長持ち歌や木遣り歌、味噌仕込み歌等として取り入れられ、またお座敷唄、お座敷踊りとして芸能界に定着していった。

現在、「岡崎五万石」は、「正調」と「民謡」に分かれ、「正調」はお座敷唄、お座敷踊りとして歌われている。また「民謡」は、盆踊りなどで歌われている。

² 江戸時代から明治期にかけて用いられた年貢や課税の際の木綿布の換算基準の呼び方である。特に、農民が年貢の一部を木綿(布地)で納める場合や、木綿を貨幣や米に換算して取引する場合に使われた。

c. 寺社領や旗本領の多い岡崎

本市には多数の寺社があるが、これらの多くは家康公等が与えた「朱印状」を持つ寺社であった。朱印状(領地朱印状)とは、将軍の代替わりに公家や武家等の所領を確定する際に発給したもので、岡崎では、特に松平氏や徳川家にゆかりのある寺社に朱印状が与えられ、幕府公認の領地を持った寺社が多数みられた。岡崎城下では、徳川家先祖の菩提寺である大樹寺を始め、滝山寺、真福寺、甲山寺等がある。また、城下町中心部近辺にも多数の寺社があり、周辺は門前町として栄えていた。

これらの寺社は、家康公が将軍になったことにより一層寺格や社格が高められ、幕府によって修理、援助を受けるという特別扱いを受けた。特に大樹寺は別格の扱いとなっている。

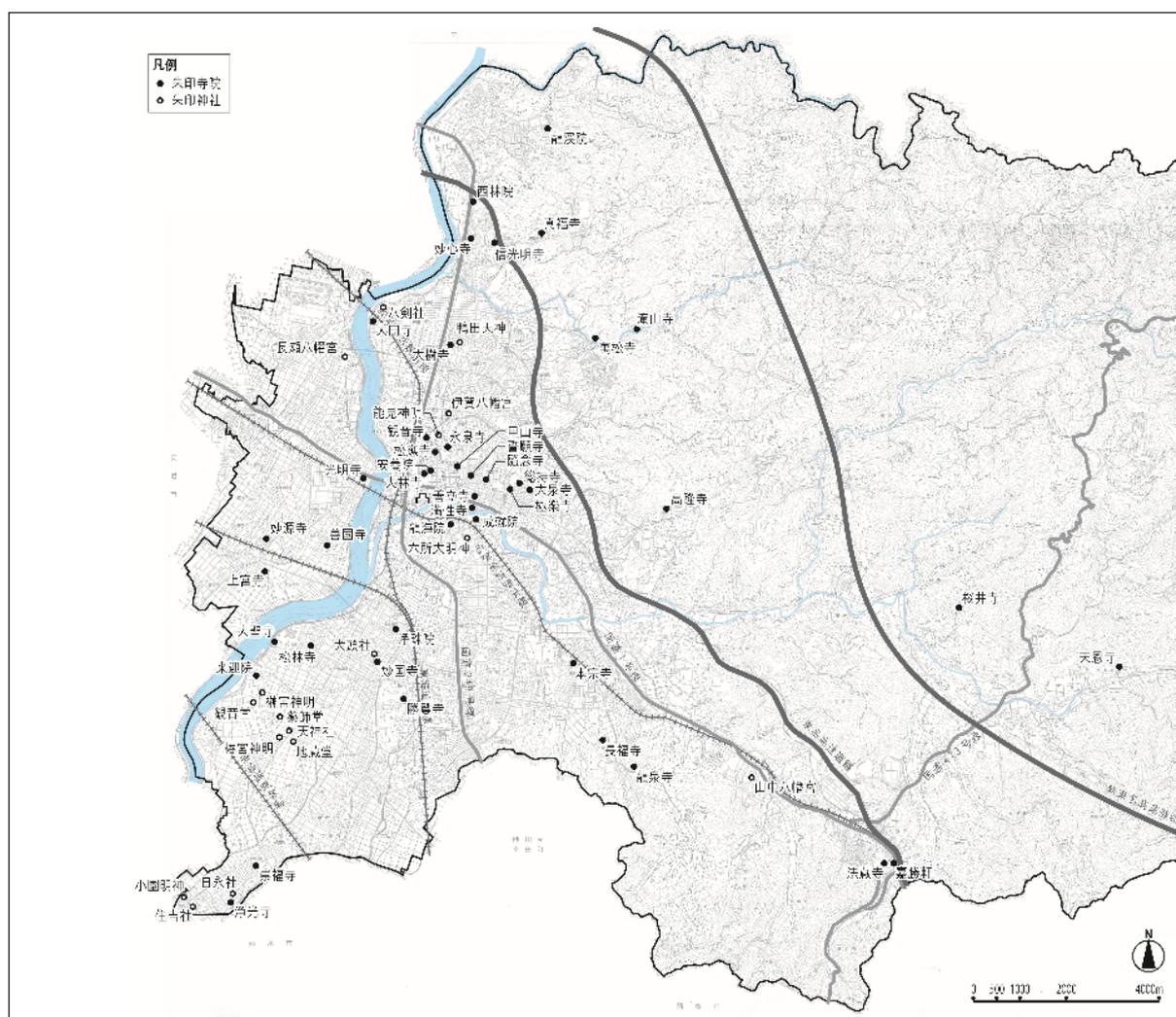


図1-3-26 江戸幕府より朱印状が与えられた寺社

さらに、徳川3代将軍家光は祖父家康公に対する畏敬の念が厚く、自らも滝山東照宮を建立するとともに、松平氏・徳川家ゆかりの寺社を大造営している。現在まで近世前期の優れた建築物が多いのはそのためである。

表1-3-2 家康公朱印拝領の寺社

寺社	朱印状発行年月日	山号	寺名・社名	宗派	朱印高	寺社所在地	
寺院	慶長7年 6月 2日	成道山	大樹寺	浄土	616石余	鴨田	
	6月14日	能見山	松應寺	浄土	100石	能見	
	6月16日	崇徳山	善国寺	浄土	24石	渡	
	〃	大沢山	龍溪院	曹洞	20石	桑原	
	〃	御所山	西林院	浄土	7石	岩津	
	〃	廬安山	崇福寺	浄土	30石	中島	
	〃	広沢山	天恩寺	臨濟	79石余	片寄	
	6月22日	弥勒山	信光明寺	浄土	120石余	岩津	
	慶長8年 8月18日	長輝山	甲山寺	天台	250石	岡崎	
	8月20日	仏現山	隨念寺	浄土	50石	岡崎	
	〃	法性山	妙心寺	浄土	101石余	岩津	
	8月22日	万燈山	長円寺	曹洞	10石	中島	
	8月26日	本寿山	妙国寺	日蓮	15石余	宮地	
	〃	多宝山	高隆寺	天台	35石	高隆寺	
	〃	海運山	長福寺	日蓮	15石余	尾尻	
	〃	仁王山	萬松寺	曹洞	20石	滝	
	〃	清光山	浄珠院	浄土	20石	上和田	
	〃	靈鷲山	真福寺	天台	354石	真福寺	
	8月28日	瑞生山	総持寺	曹洞	100石	菅生	
	9月11日	満珠山	龍海院	曹洞	四至(35石)	明大寺	
	〃	拾王山	大林寺	浄土	100石	八町	
	〃	桑子山	妙源寺	高田	30石	桑子	
	〃	二村山	嘉勝軒	浄土	12石	本宿	
	9月15日	鏡立山	光明寺	時宗	8石	矢作	
			花園山	桜井寺	真言	27石余	桜井寺
	神社	慶長7年 6月22日	—	小園神明	—	10石	中島
6月26日		—	六所大明神	—	62石	明大寺	
8月 4日		—	伊賀八幡	—	228石	伊賀	
慶長8年 8月22日		—	日永社	—	10石	中島	
8月26日		—	山中八幡	—	150石	舞木	
8月28日		—	犬頭大明神	—	43石	宮地	

表1-3-3 家光朱印拝領の寺社

寺社	朱印状発行年月日	山号	寺名・社名	宗派	朱印高	寺社所在地
寺院	寛永13年11月9日	田生山	満性寺	高田	50石	菅生
	〃	大雲山	極楽寺	曹洞	2石余	岡崎
	寛永18年9月27日	吉祥山	滝山寺	天台	412石	滝
	寛永19年9月24日	二村山	法蔵寺	浄土	82石余	本宿
	慶安元年2月14日	見松山	観音寺	曹洞	5石	能見
	2月24日	無道山	大聖寺	浄土	23石余	中之郷
	〃	諏訪山	誓願寺	浄土	11石余	岡崎
	〃	大光山	善立寺	日蓮	10石	菅生
	2月27日	向上山	大円寺	浄土	5石余	大門
	7月11日	照光山	安養院	浄土	10石	岡崎
	8月17日	聖衆山	来迎院	浄土	5石	上青野
	〃	浄行山	松林寺	浄土	5石	赤渋
	〃	仏日山	大日堂	曹洞	5石	岡崎
	〃	東林山	大泉寺	曹洞	5石	岡崎
	〃	瑠璃山	成就院	曹洞	5石余	明大寺
	〃	七池山	本宗寺	一向	13石	平地
〃		龍泉寺	日蓮	3石余	竜泉寺	
〃	9月17日	良永山	浄光寺	一向	3石余	中島
神社	慶安元年	—	神明	—	5石	能見
	〃	—	八劔神明	—	29石余	大門
	〃	—	天神	—	3石	鴨田
	〃	—	住吉神明	—	3石余	中島
	〃	—	椿宮神明領他	—	3石他	下青野
	〃	—	神明領他	—	2石他	上青野



奥殿藩、西大平藩及び旗本領

江戸時代、大名、旗本、寺社は幕府から領地を与えられていた。現在の岡崎市内は、岡崎藩(5万石)の1藩で支配されていたわけではなく、岡崎藩以外にも奥殿藩(1万6千石)、西大平藩(1万石)があり、それぞれの領地を支配していた。

また、岡崎市及びその周辺には、松平氏・徳川家ゆかりの寺社も多く、家康公等により与えられた「朱印状」(証明書)によって幕府公認の領地を持つ寺院もあった。

このように、現在の岡崎市内は、複数の藩及び「朱印状」を持った寺院による領地によって治められていた。

一方、家康公は、関ヶ原の戦いで味方についた大名の手がらと、家康公側につかなかった大名を区別し、大規模な領地替えを行った。その結果、岡崎藩領は額田、碧海、幡豆、加茂の4郡内に決められた。しかし、現在の市域の全てを岡崎藩は支配しておらず、岡崎藩以外の領地も多数あった。

こうしたなか、大坂夏の陣の活躍により、松平真次は幕府より祖先の土地である大給を領地として与えられ、真次の子、乗次が1万石加増されて大給藩初代藩主となり、大給藩として奥殿周辺を支配した。大給藩第4代乗真は、幕府に願い出て、正徳元年(1711)に陣屋を大給から三河国額田郡奥殿に移し、奥殿藩が成立した。この奥殿藩からは著名人が輩出している。7代乗友の五男栄五郎は、裏千家第10世認得齋宗室の養子となり、その後第11世玄々齋宗室となっている。玄々齋宗室は、第1回京都博覧会の際に立ったままお茶をたてる立礼式の茶室を発表し、近代茶道の基礎を築いた。奥殿藩8代藩主で龍岡藩初代の藩主となった松平乗謨は文久3年(1863)に奥殿から田野口村(長野県佐久市)へ藩庁を移し、星型稜堡をもつ擬洋式城郭の龍岡城を建造した。大給恒と改名し、明治10年(1877)勃発の西南戦争の際、後に日本赤十字社となる博愛社を創立した。

三河国内には旗本領も多くあった。水野忠善(藩主時代1645~1676)から数えて3代後の水野忠之(藩主時代1699~1730)の時代である享保10年(1725)には、三河国内に86家、現在の岡崎市域内に14家の知行地(幕府から旗本に与えられた領地)を持つ旗本がいた。

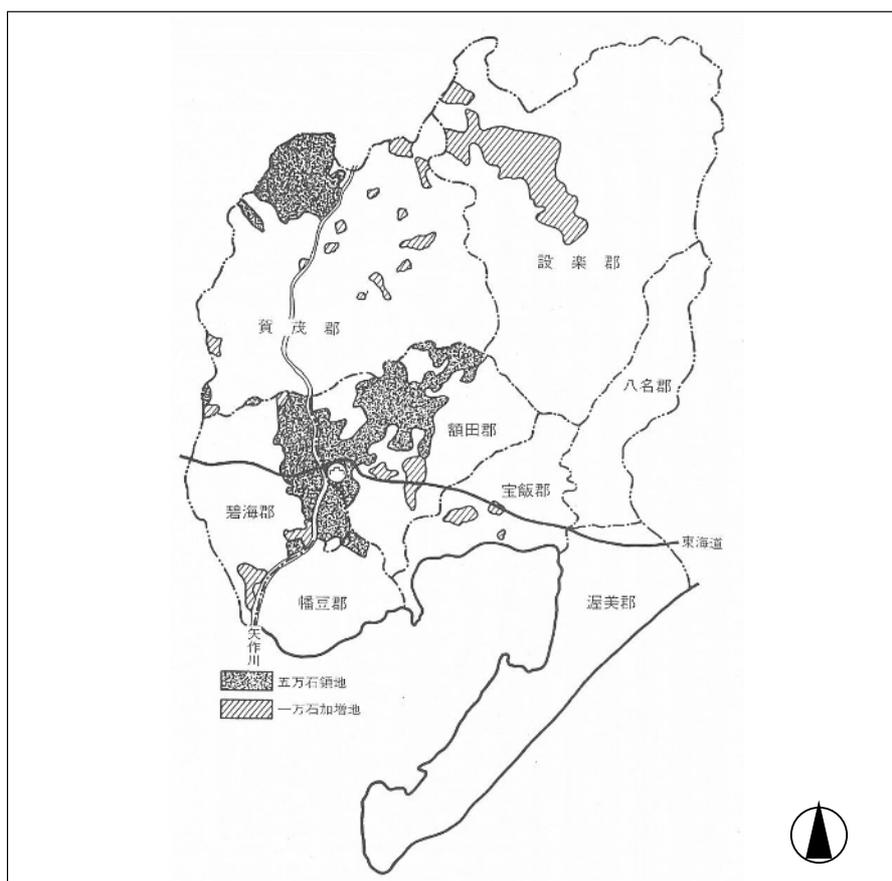


図1-3-27 水野氏時代(正保2年(1645)~宝暦12年(1762))の岡崎藩領

d.水陸交通の発展と東海道有数の宿場町の形成

慶長6年(1601)、家康公は東海道に宿駅を置き、各駅に参勤交代等の公用旅行者に対する伝馬を用意することを義務づけた。これにより東海道の利用や宿駅を中心としたまちの賑わいが増した。

当初、岡崎には榎町(現在の祐金町)に宿駅があったが、本多康重(藩主時代 1601~1611)により、伝馬町が新設され、それ以降、伝馬町が岡崎の宿駅として発展した。伝馬町では、享和元年(1801)に、本陣2軒、旅籠屋115軒、木賃宿26軒があったとされ、天保14年(1843)には、本陣が3軒、脇本陣が3軒に増えている。本陣、脇本陣合せて6軒というのは、東海道では小田原の8軒、箱根の7軒に次いで3番目の規模であった。また、旅籠屋の数も宮、桑名に次いで3番目であり、岡崎の宿場町は東海道屈指の規模を誇っていた。

東海道を中心にまちが賑わい発展するとともに、市内を流れる矢作川でも人々の暮らしに大きな発展と変化をもたらした。河川は大量の物資を運搬する最も有効な手段として利用され、岡崎は矢作新川の河口である鷺塚(碧南市)や平坂(西尾市)と上流の足助や信州飯田につながる信州中馬あるいは三州中馬の陸運と結びついて発展した。

岡崎城下では、信州への中継地の一つとして、物資の陸揚げや積み出しが行われた。こうした物資の陸揚げ等を行う場所を土場といい、市域の矢作川沿いでは合歓木、佐々木、赤渋、福島新田、八町、矢作(天王)、上ノ里、岩津の8つの土場があり、賑わった。また、矢作川の支流である菅生川沿いには、御用土場、桜馬場土場、満性寺土場の3つがあり、岡崎の特産品である石、味噌、大豆、綿作の肥料等が運ばれた。



図1-3-28 岡崎市内の土場

ウ.江戸時代中期・後期

a.岡崎城下町の産業の発展

西三河を北から南へ流れる矢作川は、大量の物資を安い費用で運ぶ最も有力な経済の道であり、城下を通る東海道は参勤交代等のための政治の道であったため、その中継地となる岡崎の産業は大いに発展していった。城下町には、田中吉政により整備された町の地名が現在まで多数残っている。それらの多くは、材木町(鍛冶屋、大工等の職人町)、魚町(魚問屋)、田町(塩、海産物等を扱う商人町)のように、職業と密接に関係する名称がつけられている。こうしたなか、近世を通じて城下町の中心となった町に、城の大手門近くが開かれた市場をもとに形成された連尺町がある。行商人の「背負子」が名称のもとになったといわれる連尺町は、酒、油、穀物等の日常品を扱う大きな商家が軒を連ねていたとされている。

田中吉政は城郭や城下町整備の際に多くの石工を大坂の河内や和泉から呼び寄せた。城郭整備等が一段落すると、石工たちは岡崎の良質な花崗石を用いて鳥居や灯籠等の石材加工を行うようになり、これらを諸国大名等がこぞって求めたことで全国に岡崎の名が広まった。

また、家康公が早くから銃火器に着目していたこともあり、稲富伊賀守直家が鉄砲隊の指導として持ち込んだ稲富流火術により煙火師が多く育った。開幕後、火薬の生産と貯蔵は家康公の生誕の地である三河に限定されるなかで、豊作を願う農民の間にも取り入れられて、祭礼の花火として打ち上げられたのが、三河花火の始まりとされている。2代将軍の秀忠が観賞用として許可してから盛んになり、祭礼の献上用として発展した。

さらに、戦国時代、簡単に栄養を補給できて保存がきく携行食として重宝された味噌は、江戸時代初期に八町村(八帖町・八丁町)で本格的に生産された。この辺りは矢作大豆という優良な大豆が産出され、矢作川の伏流水によって豊富な水が得られたため生産に非常に適しており、矢作川の舟運により原料や製品の運搬も便利であった。その地名を取り八丁味噌という名がついたとされ、三河の譜代大名や旗本等により全国的に広められた。



図1-3-29 石屋町界隈(昭和14年(1939))



図1-3-30 三河花火工場(大正期)



図1-3-31 八丁味噌 カクキュー合資会社(大正期)

その他、岡崎では綿作を行う者が多く、全ての畑に対する綿の作付率が50%を占めるほどであった。これは、綿作が稲作のように田植えや稲刈りの時期に大量の労働力を必要としなかったことがある。また、稲作よりも綿作の方が収益が良かったことと、矢作川周辺では、頻繁に起こる矢作川の洪水により田に大量に流れ込んで積もった土砂を取り除かずに畑とし、稲作から綿作に切り替えた農家が多かったことも一因にあげられる。岡崎の綿作は全国有数の地位を占めるようになり、江戸市場では三河木綿としての名が定着した。



何度も架け替えられた矢作橋

矢作橋の架橋工事は、慶長3年(1598)、家康公の家臣牧野康成から命じられた岡崎城主田中吉政により始められ、慶長6年(1601)に長さ約135メートルの表面に土をかぶせた土橋が完成した。

しかし、矢作橋は矢作川の洪水により幾度となく流失し、その度に架け替えられた。寛永11年(1634)に架けられた矢作橋は、これまでの土橋から板橋となり、欄干、擬宝珠を備えた長さ208間(約378メートル)の壮麗な反り橋であったといわれている。



図1-3-32 歌川広重 東海道五十三次之内岡崎

表1-3-4 矢作橋の架橋

年号	架替	内容
慶長 6	1601	土橋架設
元和 9	1623	土橋架設
寛永 11	1634	1回目 板橋架設
寛文 10	1670	8月火災落失
延宝 元	1673	2回目 架設開始、完成延宝2年
正徳 元	1711	洪水流失
正徳 3	1713	3回目 架設開始、完成正徳5年
—		老朽化
延享 2	1745	4回目 架設開始、完成延享3年
—		洪水老朽化
宝暦 11	1761	5回目 架設開始、完成宝暦12年
安永 9	1780	洪水流失
安永 9	1780	6回目 架設開始、完成天明元年
寛政 8	1796	洪水流失
寛政 10	1798	7回目 架設開始、完成寛政12年
文化 13	1816	洪水流失
文化 14	1817	8回目 架設開始、完成同年
天保 8	1837	洪水流失
天保 10	1839	9回目 架設開始、完成天保11年
安政 2	1855	7月29日洪水流失
—		渡船通行
明治 元	1868	舟橋仮橋
明治 4	1871	仮橋完成
明治 10	1877	10回目 新橋完成
明治 23	1890	11回目 新橋完成
大正 2	1913	12回目 鉄橋完成



伊勢信仰と秋葉信仰

市内には、神明宮や神明社、また百姓の神様である御鋤社などの伊勢信仰に関係する神社と、火事を防ぐ神様である遠江(静岡県)の秋葉信仰に関係する常夜燈が多く見られる。

伊勢信仰が広まったのは、江戸中期以降、内宮・外宮の御師によるものといわれる。御師は、割り当てられた担当地域の各家に御札や伊勢曆、また青のり、白粉、薬等を配って回り、米や麦を初穂料としてもらう檀那廻りや、檀那の伊勢参詣の際は屋敷を参詣宿として提供していた。

一方、秋葉信仰は、寛政年間(1789~1801)に広まったといわれている。秋葉信仰のシンボルともいえる常夜燈が、寛政2年(1790)の両町のもの筆頭に、東海道の辻や村の入口等に多数建立されている。

b. 岡崎城下町の文化の開花

江戸時代中期から後期になると、岡崎には石材加工、八丁味噌、綿作(三河木綿)等の代表的な産業が定着するとともに、^{はたごや}旅籠屋、^{かじや}鍛冶屋、^{おけや}桶屋、^{あらものや}荒物屋、^{さしものや}指物屋、^{こくや}穀屋、^{たばこや}煙草屋、大工、左官、道具屋、茶屋など様々な商売を営む者があふれ、まちが大きくなっていった。

こうした農業や商工業が飛躍的に発展することで、まちには賑わいが増し、様々な文化が花開いていった。

c. 幕末の政治の動き

文人、俳人、画家等による様々な文化が花開いた江戸時代末期であったが、その一方で、14代将軍徳川家茂^{いねもち}の死後、15代将軍となった慶喜^{よしのぶ}は慶応3年(1867)に大政奉還^{たいせいほうかん}した。ところが、翌4年(1868)、旧幕府軍と新政府軍による戊辰戦争^{ぼしんせんそう}が始まった。

岡崎藩は、表面的には旧幕府支持の態度をとりつつも、内部には旧幕府軍と新政府軍のそれぞれを支持する意見があった。しかし、藩主忠民^{ただもと}により藩意は新政府軍支持となり、その結果、藩士30数名は脱藩し、両軍に分かれて戦うことになった。

明治2年(1869)5月、約1年5か月続いた戊辰戦争が終わり、新しい時代が始まることとなる。



龍海院の別名「是の字寺」

龍海院は、別名「^ぜ是の字寺」と呼ばれる。

家康公の祖父の松平清康が、あるとき、自らの手に「是」の字を握るという夢を見た。これに対し、龍溪院8世の模外惟俊^{もがい いしゆん}が、「『是』は、『日の下の人』と読めることから、子孫が天下を取るという意味である。」と説いた。それを聞いた清康は喜んで、模外のために寺を建てた。その寺が龍海院といわれている。

⑤近代 [都市岡崎の成立]

ア.明治期

a.額田県の成立と廃止

明治4年(1871)7月、明治政府による^{はいはん}廃藩^{ちけん}置県により、これまでの岡崎藩は岡崎県となった。また、同年(1871)11月には、三河各県と尾張^{ちたぐん}知多郡が統合されて額田県となり、県庁が旧岡崎城内に置かれた。庁舎は、江戸時代の二の丸御殿を使用していた。県名が額田県というのは、県庁が置かれた郡の名前を県名にするという廃藩置県のルールに則ったからである。しかし、明治5年(1872)11月には、愛知県に統合され、額田県はわずか1年ほどで廃止された。

この愛知県への統合を不服とする声が多く、三河を愛知県から分離して単独の県にしようとする「三河分県運動」が展開された。しかし、その願いや行動は実ることはなかった。

こうしたなか、明治維新が進むと、新しい時代には不用とされた城郭が、明治6年(1873)～7年(1874)にかけて取り壊された。明治8年(1875)、旧藩士たちによる保存運動が起き、県の許可を受けて本丸・二の丸跡は城址公園となった。城址公園部分は、明治28年(1895)に再び本多家に所有が戻った後、大正7年(1918)に寄附を受け、市有となった。翌8年(1919)以降、公園改修5カ年計画により、公園としての整備がなされ、現在の岡崎城公園となっている。

なお、堀と石垣のみが残され、往時の岡崎の象徴であった天守がないままではしのびないという市民の声により、昭和34年(1959)に鉄筋コンクリート造の天守が再建された。



図1-3-34 旧岡崎城天守(明治5年(1872)、南東方向より)

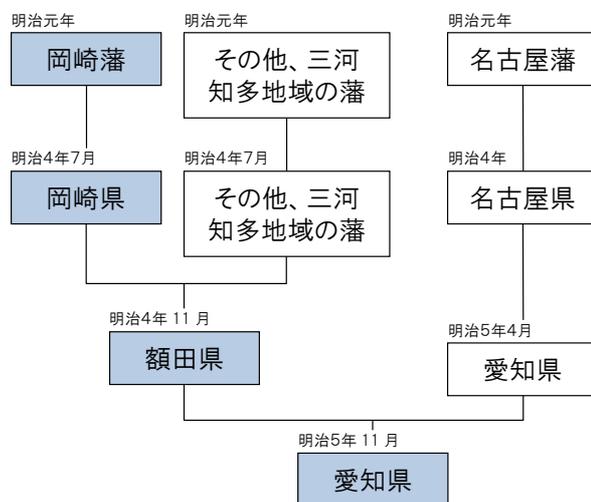


図1-3-33 額田県の成立と廃止

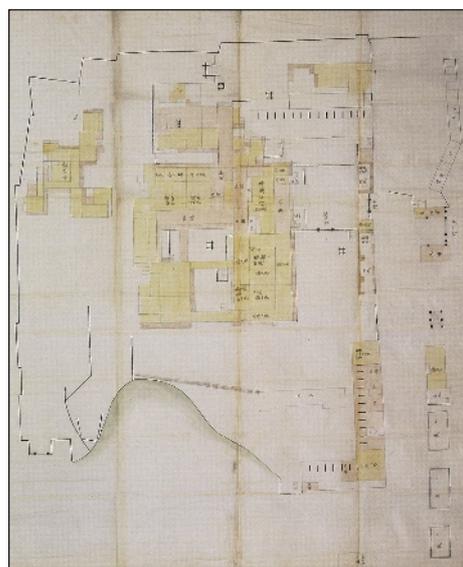


図1-3-35 三河国岡崎城内県庁図(明治初頭)

b. 殖産興業と鉄道整備

明治初めの岡崎は、東海道沿いということもあり、西三河の物産が集まる地域であったが、周辺町村との合併により更に広い地域との連携強化を図り、産業及び商業の一層の拡大と安定を目指した。大正3年(1914)の広幡町ひろはたとの合併後、広幡町内を通り、岡崎と東加茂郡足助町あすけの山間部を結ぶ唯一の道路である足助街道を拡幅したことで、輸送量が東海道を上回るほどになり、岡崎町と広幡町の商業地域が拡大し、産業基盤が安定したといわれている。

こうしたなか、江戸時代から綿の生産地として有名であった岡崎では、明治期になって発明された水車等を動力とする「ガラ紡」という紡績機ぼうせきが、この地域の流れの速い川で利用できたため普及した。それと並行して明治政府が殖産興業しよくさんこうぎょうの政策として、「官営愛知紡績所」(現在の大平町)を設置したことから紡績業が発達し、繊維の町となった。

一方、こうした産業の発展には、鉄道輸送が大きく影響している。特に明治21年(1888)に東海道本線岡崎駅が開業してからは、岡崎の物資が鉄道を利用して運ばれるようになった。

しかし、郊外にある岡崎駅が不便であることから、明治31年(1898)、岡崎駅(岡崎停車場)と市街地とのばし(殿橋)を結ぶ岡崎馬車鉄道が開通する。また、明治44年(1911)には西尾と岡崎を結ぶ西三軌道株式会社せいさんきどうが開業し、岡崎・西尾方面への重要な交通機関となった。なお、岡崎馬車鉄道は、利用者の増加と馬の糞尿問題から大正元年(1912)に電車化され、岡崎電気軌道に変わった。

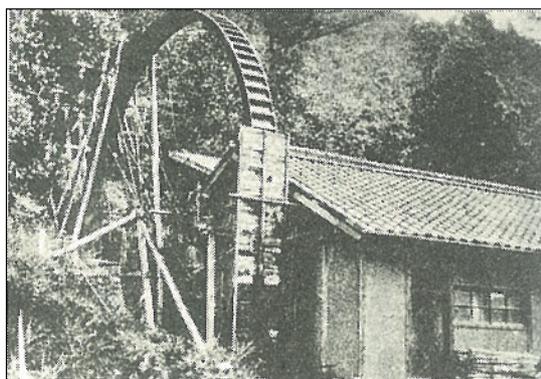


図1-3-36 ガラ紡水車(滝町)

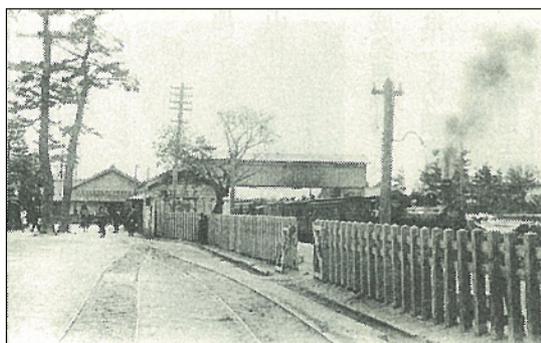


図1-3-37 岡崎停車場



官営愛知紡績所と日本製の紡績機(ガラ紡)

明治政府は、欧州の先進諸国にならって洋式機械を導入し、我が国の産業発展のための模範工場にしようと、官営紡績所が広島と岡崎の2か所に建設された。広島の方は開業前に民間に払い下げられたため、国内唯一の「官営紡績所」となった。操業わずか5年8か月で民間に払い下げられるが、その間に技術伝習生の受け入れや技術指導を通して、その後の日本の綿糸紡績業の発展に寄与したといわれている。しかし、導入された外国製の紡績機は非常に高価であった。

こうしたなか、臥雲辰致がうんたつちは、14歳の時に、遊びからヒントを得てガラ紡績の仕組みを発明した。明治10年(1877)、第1回内国勸業博覧会にこのガラ紡機が出品され、最高賞を得たことが評判となり、また外国製紡績機に比べて安価であったことから、全国に普及していった。

イ.大正・昭和(戦前)期

a.町村合併と産業基盤の拡大

明治22年(1889)の町村制施行により岡崎町が誕生したのちも、明治35年(1902)、同39年(1906)、大正3年(1914)、昭和3年(1928)と町村合併を繰り返し、行政区と人口を拡大してきた。

そうしたなか、大正末期には、愛知電気鉄道(後の名古屋鉄道)の開通や岡崎電気軌道(路面電車)の軌道延長など公共交通が充実するとともに、これまで成長を見せていた紡績業(ガラ紡)から製糸業への転換、農村部から都市部への人口流入等により、康生町を中心とする町の様相が大きく変化した。

康生町付近には西洋風の建物が並び、これまでなかった電気器具、万年筆、自転車等の新しい商品を扱う店舗が登場した。また、岡崎城は市が公園として整備し、同時に市立図書館も建てられて近代的な公園となった。さらに、県立の岡崎病院と東病院、市立梅園病院が公的な病院として整備され医療面でも充実した。

市内では、大正末期から昭和初期にかけて自動車が普及し始めたことから、道路網の整備が進められた。市内を通る国道1号は、改修前は幅員(康生～大平区間)が4.5～7.2メートルと狭く、曲がり角が多い不便な道路であったが、昭和8年(1933)には幅員21.6メートルの幹線道路に変わり、社会基盤が整っていった。



図1-3-38 岡崎市内線(岡崎電気軌道(民営))
(県道39号(殿橋通り))

b.都市岡崎の成立「市制施行」

明治末期、町村合併を繰り返してきた岡崎町では人口が20,000人を超え、当時愛知県内で人口が最も大きな町となっていた。

大正5年(1916)7月1日、岡崎町は岡崎市となり、愛知県では名古屋、豊橋に次いで3番目、全国では67番目の市制施行となった。当時の市域面積は19.68平方キロメートル、人口は37,639人であった。

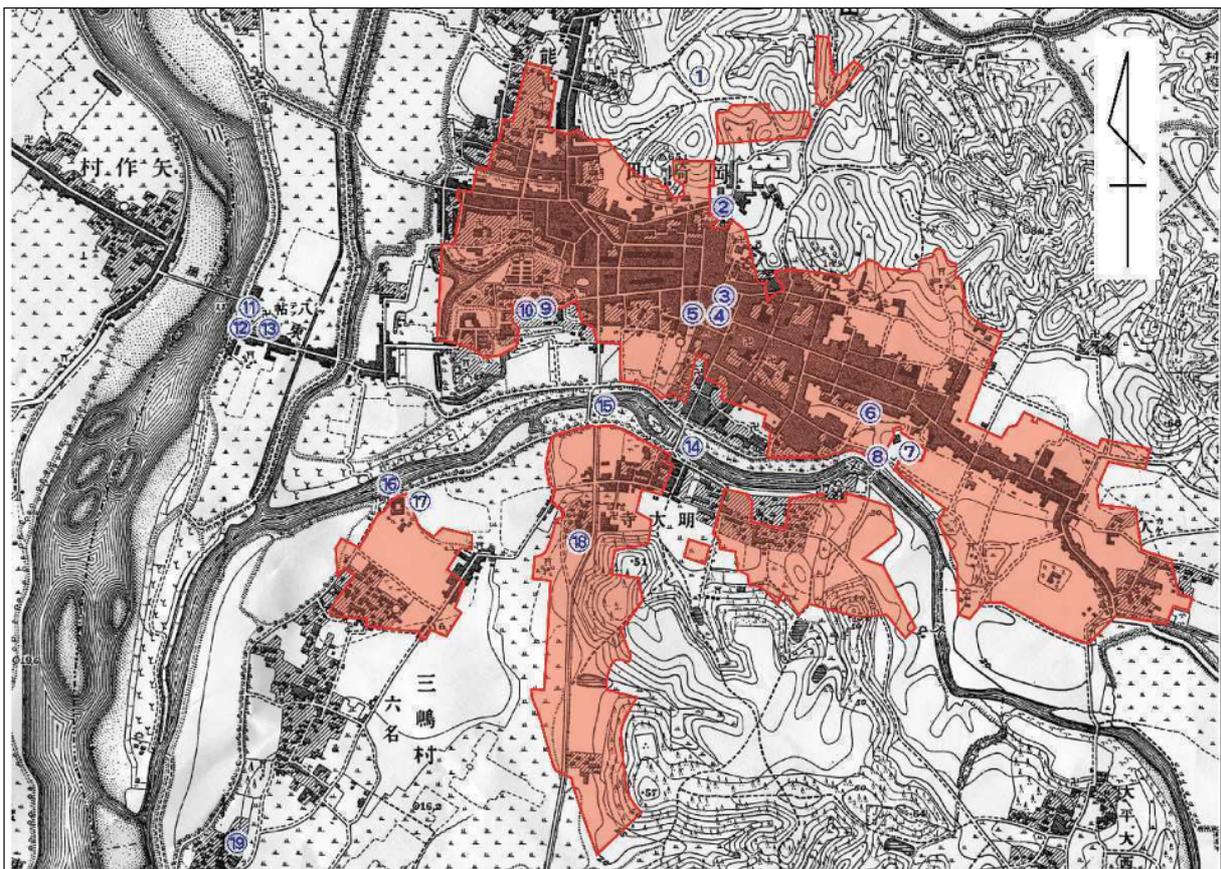
c. 空襲により焦土となった岡崎

昭和16年(1941)12月8日、日本のハワイ真珠湾攻撃により太平洋戦争が始まった。昭和17年(1942)を境に戦況は悪化し、昭和19年(1944)には本土決戦の掛け声も聞かれるようになった。

こうしたなか、昭和20年(1945)7月19日から20日にかけて、アメリカ軍のB29爆撃機約80機により焼夷弾を中心とする12,000発以上の爆撃が行われ、連尺町、康生町等の市中心部を焼き、近世以来続いた城下町を一瞬にして焦土とした。このときの被害は、全焼7,312戸、半焼230戸とされ、当時の市内全戸数20,000戸のうち3分の1以上の建物が焼失した。



図1-3-39 焦土と化した岡崎市街



図中番号

- ①六供浄水場ポンプ室・配水塔
- ④永田屋精肉店
- ⑦旧額田郡公会堂・物産陳列所
- ⑩吉田市五良家住宅
- ⑬八丁味噌本社事務所・蔵
- ⑯名鉄鉄橋
- ⑰斎藤保家住宅

- ②旧石原東十郎家住宅
- ⑤岡崎信用金庫資料館
- ⑧鈴木克明家住宅
- ⑪板倉正家住宅
- ⑭明代橋
- ⑰田口公也家住宅

- ③大黒屋漢方薬店
- ⑥三浦彦男家住宅
- ⑨吉田正平家住宅
- ⑫木藤孝一家住宅
- ⑮殿橋
- ⑱林楨夫家住宅

図1-3-40 戦災範囲と歴史的建造物の位置

⑥現代 [復興した岡崎の発展]

ア.昭和(戦後)期

a.戦災復興

昭和21年(1946)9月、本市は、名古屋市、豊橋市、一宮市とともに戦災都市として国の指定を受け、戦災復興事業を進めることとなった。

主に、狭く曲がりくねった城下町時代の町割りを近代的なものにするために、土地区画整理事業が進められた。当時の不安定な社会経済状況のあおりを受け、度重なる計画見直しを経て、碁盤目状の道路網整備や籠田公園を含む7つの公園の整備・拡張が、昭和32年(1958)に完了した。現在の本市における中心市街地の原型が、この事業により形作られた。

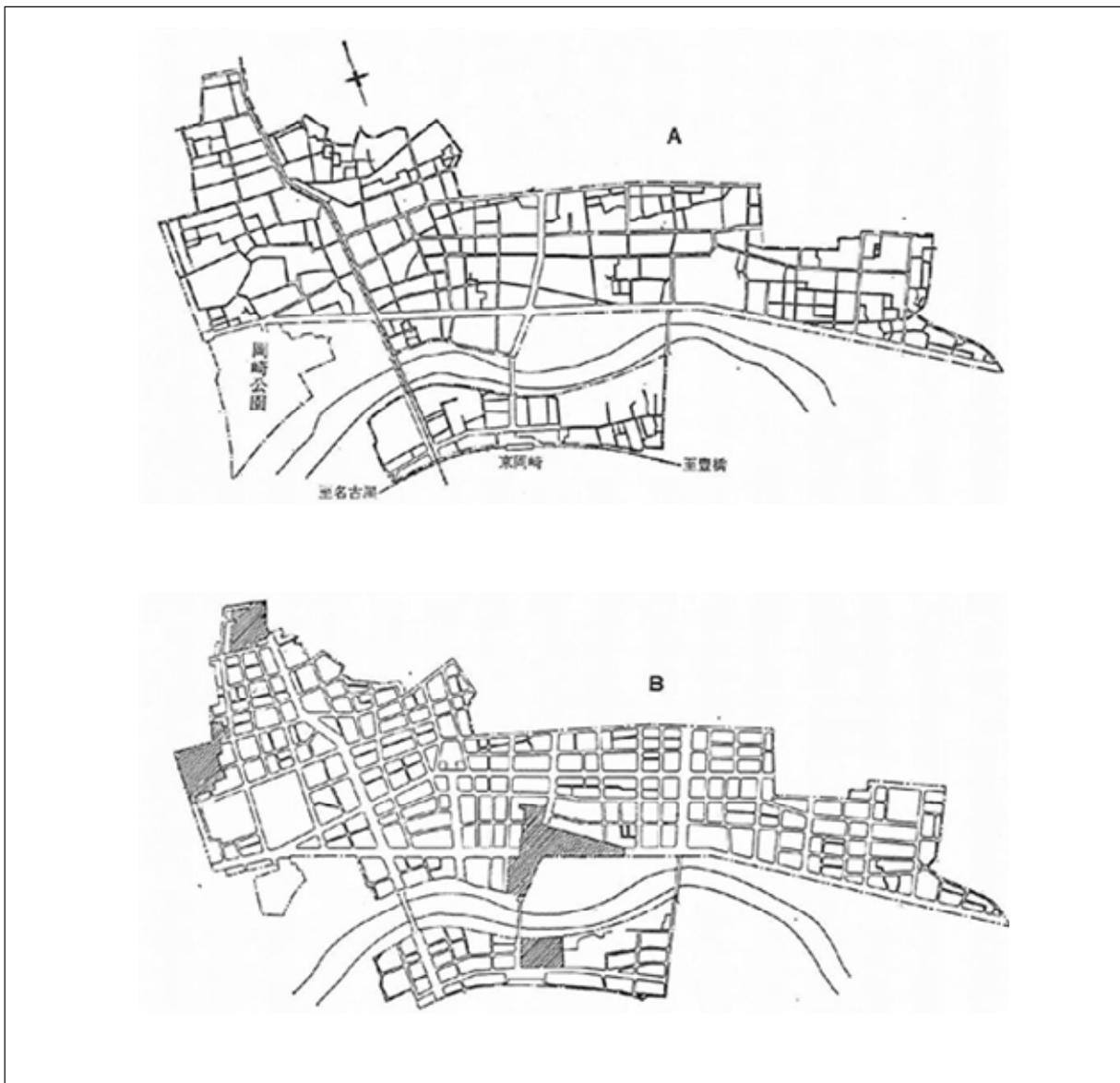


図1-3-41 岡崎市戦災復興土地区画整理事業の施行前後の比較(A:施行前、B:施行後(網掛部は対象外区域))

b. 町村合併による近代都市の成立

昭和30年(1955)、町村合併促進法を受けて、岡崎市は矢作町及び額田郡2町6村(岩津町、福岡町、もとじゅく本宿村、山中村、藤川村、りゅうがい龍谷村、河合村、ときわ常磐村)を編入し、昭和37年(1962)には六ツ美町を編入した。これらの合併により市域面積を合併前の約4倍の226.97平方キロメートル、人口を約1.8倍の185,959人に増大させた。

この時代の合併とその後の経済成長は、一度は戦火により失われた岡崎城下町の繁栄を蘇らせるとともに、戦後の西三河の中心地としての岡崎市の地位を確立させた。

イ. 平成・令和期

a. 中核市への移行

昭和30年(1956)頃から昭和48年(1973)まで続いた高度経済成長期のなかで、自然と産業と市民生活の調和のとれた都市づくりを目指し、各種都市基盤の整備を進めてきた本市は、平成15年(2003)4月1日に全国で31番目に中核市に移行した。人口は348,049人、市域面積が愛知県内で3番目となった。

b. 平成の大合併、そして市制施行100周年を迎えて

愛知県内では、平成15年(2003)8月から平成23年(2011)4月までの間に市町村合併が繰り返され、50の市町村が15の市町に集約された。

そうしたなか、平成18年1月1日、岡崎市は額田町と合併し、面積387.24平方キロメートル(平成27年(2015)現在は、387.20平方キロメートル)、人口367,518人、世帯数138,137世帯の新しい岡崎市が誕生した。

平成28年(2016)には市制施行100周年を迎え、現在に至る。



額田地区

明治4年(1871)、廃藩置県により、すでに岡崎県となっていた旧岡崎藩は、その他三河知多地域の藩と統合して額田県となり、県庁を岡崎城の中に置いた。しかし、翌年、額田県は愛知県と合併して愛知県となり、現在の額田は愛知県に包含されることとなり、現在に至っている。

奈良・平安時代、合併以前の額田町に相当する地域は、三河国の額田郡に属し、額田八郷と呼ばれ、新城、鴨田、位賀、額田、麻津、六名、大野、おとがわ 駒家の八つの郷に分かれていたといわれている。そのいずれの郷も、乙川や男川、またその支流の近くに位置していたと推測され、古来よりその下流にあたる岡崎との関係は深かったと考えられている。

額田地区は、山深い地域であることなどから、河川を中心とした流域単位での文化が継承され、現在でも、万足平の猪垣、まんぞくだいら 千万町の神楽、ぜまんちよう 当(頭)屋祭祀等の、暮らし、信仰、祭礼儀式等に関する地域固有の特徴的な伝統や歴史文化資産が多数残されている。

表1-3-5 岡崎市年表(主なできごと) (徳川家康公に関する部分は下線表示)

時代	西暦(元号)	できごと	
		岡崎市	全国
旧石器	紀元前 14000	・仁木八幡宮遺跡・五本松遺跡でナイフ形石器や細石器を使う	・ナイフ形石器や細石器が発達 ・磨製石器が発達
縄文	10000 (縄文早期) 3000 (縄文中期) 1000 (縄文晩期)	・村上遺跡で押型文土器をつくり、屋外に炉を築いて生活する ・村上遺跡で炉を設けた竪穴住居をつくって定住生活をする ・真宮遺跡で大規模な集落が営まれ、土器棺墓が盛んにつくられる。また、土偶を祀る	
弥生	300 (弥生前期) 100 (弥生中期) 紀元後 200 (弥生後期)	・味噌粕岩遺跡に人が住み始める ・高木遺跡で方形周溝墓への埋葬が行われる ・東郷遺跡で集落の周囲に壕をめぐらす	・稲作農耕が西日本東日本まで広がる ・倭国大乱 ・卑弥呼が魏に使者派遣(239)
古墳	300 (古墳前期) 400 (古墳中期) 500 (古墳後期)	・和志山古墳・甲山第1号墳が築かれる ・生平遺跡など市内各地で大規模な集落が営まれる ・経ヶ峰第1号墳が築かれる ・岩津第1号墳・神明宮第1号墳が築かれる。横穴式石室をもつ小円墳ができる	・巨大前方後円墳築かれる ・前方後円墳衰退 ・群集墳がつけられる
飛鳥	645 (大化 1) 701 (大宝 1)	・このころ、北野廃寺が建立される ・真福寺創建の説がある	・聖徳太子、摂政となる(593) ・大化の改新(645) ・大宝律令(701) ・平城京に遷都(710)
奈良	792 (延暦 11)	・矢作川河床遺跡から、このころの墨書土器が出土する	・平安京へ遷都(794)
平安	807 (大同 2)	・北野廃寺が焼失という説がある	・藤原道長、摂政となる(1016) ・平清盛、太政大臣となる(1167) ・頼朝、熱田で生まれる(1147)
鎌倉	1184 (応徳 1) 1238 (暦仁 1)	・源範頼が三河守となる ・このころ足利義氏が三河守護となり、矢作宿に三河国守護と額田郡公文所を置く ・このころから矢作西・東宿にぎわう	・頼朝、鎌倉幕府を開く(1192) ・建武の新政(1333) ・南北朝開く(1336)
室町	1336 (建武 2) 1380 (康暦 2) 1452 (享徳 1) 1471 (文明 3) 1475 (// 7) 1530 (享禄 3) 1542 (天文 11) 1547 (// 16)	・矢作川の戦いで足利尊氏方が敗退する ・このころ、菅生川(乙川)の西流化工事が行われる ・三河守護代西郷稠頼が龍頭山に砦(岡崎城)を築く ・松平信光が安城城を手に入れ、安城に移る ・松平親忠、大樹寺を創建する ・松平清康が龍頭山に岡崎城を移す <u>(家康 1歳) 家康公生誕。幼名は竹千代</u> <u>(家康 6歳) 今川氏の人質として駿府へ護送中、戸田氏の裏切りで、織田氏の人質となる</u>	・足利尊氏、室町幕府開く(1338) ・応仁の乱(1467) ・鉄砲伝来(1543)

戦国	1549 (天文 18)	(家康 8歳) 今川氏が織田氏との人質交換により竹千代を 取り戻す	・キリスト教伝来(1549)
	1555 (" 24)	(家康 14歳) 元服し松平次郎三郎元信と名乗る	
	1557 (弘治 3)	(家康 16歳) 関口親永の娘瀬名(築山殿)と結婚	
	1558 (永禄 1)	(家康 17歳) 尾張大高城への兵糧入れを成功させる	
	1560 (" 3)	織田信長が今川を桶狭間で破る 今川義元討死 大高城を逃れ大樹寺に入る。岡崎城に帰る	
	1561 (" 4)	(家康 20歳) 西三河を平定。織田信長と和睦をする	
	1562 (" 5)	(家康 21歳) 織田信長と清洲同盟を結ぶ 人質交換で今川より妻子を取り戻す	
	1563 (" 6)	・西三河に一向一揆勃発。翌年終結	
	1563 (" 6)	(家康 22歳) 家康と改名	
	1565 (" 8)	(家康 24歳) 三河三奉行を制度化する	
1566 (" 9)	(家康 25歳) 徳川への復姓を勅許され、三河守に叙任		
安土桃山	1570 (元亀 1)	(家康 29歳) 姉川で織田・徳川軍が浅井・朝倉軍を破る 浜松に城を築き岡崎城より移る	・織田信長入京(1568)
	1572 (" 3)	(家康 31歳) 三方ヶ原の戦いで武田信玄に惨敗する	・幕府滅亡(1573)
	1575 (天正 3)	(家康 34歳) 織田信長と共に長篠の戦いで武田軍に大勝	
	1582 (" 10)	(家康 41歳) 本能寺の変の際に伊賀越えて岡崎に帰還する	・本能寺の変
	1590 (" 18)	(家康 49歳) 豊臣秀吉と小田原北条氏を攻略。関東移封に	・豊臣秀吉、天下統一
	1590 (" 18)	・岡崎城には田中吉政が入る	
	1591 (" 19)	・田中吉政による城下町建設が進む	・豊臣秀吉、朝鮮出兵
	1594 (文禄 3)	・豊臣秀吉が田中吉政に矢作川の築堤を命じる	
	1598 (慶長 3)	・矢作橋の架橋工事が始まる	・豊臣秀吉没
	1600 (" 5)	(家康 59歳) 関ヶ原の合戦。多くの豊臣武将が味方する	・関ヶ原の戦い
江戸	1601 (" 6)	・本多康重、岡崎藩主となる(前本多)	
	1603 (" 8)	(家康 62歳) 征夷大將軍に叙任される	・江戸幕府成立
	1605 (" 10)	(家康 64歳) 将軍職を徳川秀忠に譲り、時代は安定へ	
	1607 (" 12)	(家康 66歳) 駿府城に移り、大御所と呼ばれる	
	1611 (" 16)	(家康 70歳) 伊賀八幡宮本殿などを修復する	
	1614 (" 19)	(家康 73歳) 大坂冬の陣	
	1615 (" 20)	(家康 74歳) 大坂夏の陣	・武家諸法度
	1616 (元和 2)	(家康 75歳) 駿府城で永眠	
	1617 (" 3)	・岡崎藩主本多康紀、岡崎城天守を再建する	
	1634 (寛永 11)	・矢作橋第1回かけ替え(初めて板橋となる)	・参勤交代制度(1635)
1636 (" 13)	・徳川家光、伊賀八幡宮・六所神社・大樹寺の築造を命じる (奉行は藩主本多忠利)	・鎖国(1639)	
1645 (正保 2)	・滝山東照宮の造営を開始する	・享保の大飢饉(1732)	
1767 (明和 4)	・三河でお鍛冶りが流行する		
1770 (" 7)	・藩主水野忠肅、六手永制を採用する		
1786 (天明 6)	・この年、三河大飢饉となる	・天明の大飢饉 (1783~1787)	
1789 (寛政 1)	・「岡崎藩萬書上」によると、藩領 200 か村、石高 60,383 余 石、人口 39,531 人とある		
1790 (" 2)	・このころ、秋葉信仰が広まり、各地に常夜燈が建てられ、秋 葉講がはやる		
1801 (享和 1)	・「享和の書上」によると、岡崎城下町廻り 19 か町、総戸数 1,845 軒とある		
1822 (文政 5)	・このころ、菅生天王社祭礼に鉾船が出て、花火を奉納する		

明治	1836 (天保 7)	・加茂一揆がおこる(岡崎藩出兵し鎮圧)	<ul style="list-style-type: none"> ・ペリー来航(1853) ・日米和親条約 ・日米修好通商条約(1858) ・大政奉還 ・五箇条の御誓文 ・廃藩置県 ・徴兵令、地租改正令(1873) ・西南戦争(1877) ・大日本帝国憲法発布 ・日清戦争(1894) ・日英同盟(1902) ・日露戦争(1904) ・関東大震災 ・普通選挙法(1925) ・金融恐慌 ・世界恐慌(1929) ・満州事変(1931) ・日中戦争(1937)
	1850 (嘉永 3)	・矢作川大洪水で被害。翌年にかけて、岡崎藩総力をあげて堤防を直す	
	1854 (安政 1)	・安政の大地震、大きな被害がでる	
	1855 (" 2)	・大樹寺の本堂、書院、庫裏などを全焼する	
	1857 (" 4)	・大樹寺の本堂、大方丈の障壁画が完成する	
	1867 (慶応 3)	・藤川宿でお札降り、ええじゃないか運動が起きる	
	1868 (明治 1)	・三河県が設置される	
	1871 (" 4)	・岡崎藩など藩制改革始まる ・廃藩置県、岡崎県・西大平県が設置される ・三河の諸県が統合されて、額田県となり県庁が置かれる	
	1872 (" 5)	・額田県が廃止され、愛知県に合併される	
	1881 (" 14)	・官営愛知紡績所が操業を開始する	
	1886 (" 19)	・官営愛知紡績所が民間に払い下げられる	
	1888 (" 21)	・東海道線浜松一大府間が開通し、岡崎駅が開業する	
	1889 (" 22)	・愛知県が町村合併を実施。30 町村が合併して岡崎町が誕生	
	1890 (" 23)	・岡崎銀行が設立される	
大正	1896 (" 29)	・岡崎製糸株式会社ができる	
	1897 (" 30)	・岡崎電燈合資会社が開業する	
	1898 (" 31)	・岡崎馬車鉄道の岡崎停車場一殿橋間が開通 ・男川製糸場ができる	
	1903 (" 36)	・岡崎町役場庁舎が完成する	
	1906 (" 39)	・大平紡績場が愛知紡績所跡地に創業する ・愛知県で大規模な町村合併が行われる	
	1909 (" 42)	・岡崎繭糸株式会社設立	
	1910 (" 43)	・菅生川(乙川)・伊賀川堤防に桜・楓 5,000 本植える	
	1911 (" 44)	・西三軌道株式会社設立。岡崎新駅～西尾間の営業開始(西尾軽便鉄道)	
	1912 (大正 1)	・岡崎馬車鉄道から岡崎電気軌道に社名変更 ・西三軌道から西尾鉄道に社名変更 ・岡崎電気軌道が電化による電車運行開始	
	1915 (" 4)	・家康公薨去 300 年祭	
	1916 (" 5)	・岡崎市制施行(7月1日)	
	1923 (" 12)	・岡崎市立図書館ができる ・愛知電気鉄道、新知立～東岡崎間が開通	
	1924 (" 13)	・岡崎電気軌道、殿橋～細川門立間が開通	
	昭和	1926 (昭和 1)	・日清紡績が帝国紡績を買収し、日清紡績戸崎工場となる
1927 (" 2)		・愛知電気鉄道、神宮前～豊橋間全通する	
1928 (" 3)		・岡崎村・男川村・美合村・常磐村箱柳と合併する	
1933 (" 8)		・国道1号の開通式	
1934 (" 9)		・愛電自動車、本宿～蒲郡間にバス開通	

			<ul style="list-style-type: none"> ・第二次世界大戦(1939) ・太平洋戦争(1941)
	1945 (" 20)	<ul style="list-style-type: none"> ・三河地震(M6.8)、大きな被害がでる ・岡崎空襲、多大な被害がでる 	<ul style="list-style-type: none"> ・広島、長崎原爆投下 ・無条件降伏
	1946 (" 21)	<ul style="list-style-type: none"> ・岡崎戦災復興事務所が設置される ・八幡町にバラック店約 200 軒でき、闇市と呼ばれ、にぎわう 	<ul style="list-style-type: none"> ・日本国憲法公布 ・六三制実施(1947) ・朝鮮戦争
	1950 (" 25)	<ul style="list-style-type: none"> ・東岡崎駅前整備工事が完了する 	
	1951 (" 26)	<ul style="list-style-type: none"> ・名鉄市内線が福岡町まで延長する 	
	1954 (" 29)	<ul style="list-style-type: none"> ・県立愛知病院(結核療養所)ができる 	<ul style="list-style-type: none"> ・日米安全保障条約発効(1952)
	1955 (" 30)	<ul style="list-style-type: none"> ・福岡町・龍谷村・藤川村・山中村・本宿村・河合村・常磐村・岩津町の8町村が岡崎市に合併する ・矢作町が岡崎市に合併する 	
	1956 (" 31)	<ul style="list-style-type: none"> ・形埜村・宮崎村・豊富村・下山村の一部が合併し額田町になる 	
	1959 (" 34)	<ul style="list-style-type: none"> ・岡崎城天守復元工事完了し、一般公開される ・伊勢湾台風で大きな被害が出る 	
	1962 (" 37)	<ul style="list-style-type: none"> ・六ツ美町が岡崎市へ合併する ・名鉄市内線が廃止され、バス輸送となる 	
	1964 (" 39)	<ul style="list-style-type: none"> ・石田茂作氏による北野廃寺跡の発掘調査 	<ul style="list-style-type: none"> ・東京オリンピック
	1965 (" 40)	<ul style="list-style-type: none"> ・家康公薨去 350 年祭 	<ul style="list-style-type: none"> ・ベトナム戦争
	1966 (" 41)	<ul style="list-style-type: none"> ・市立図書館が康生町の元警察署跡へ移転する 	
	1967 (" 42)	<ul style="list-style-type: none"> ・岡崎石工団地が上佐々木町に完成する 	<ul style="list-style-type: none"> ・総人口1億人突破
	1968 (" 43)	<ul style="list-style-type: none"> ・東名高速道路の岡崎インターが開通する 	
	1969 (" 44)	<ul style="list-style-type: none"> ・岡崎市郷土館が開館する 	
	1970 (" 45)	<ul style="list-style-type: none"> ・国道1号、騒音の実態調査が行われる ・岡多線、岡崎～北野柝塚間が開通する ・岡崎市が市街化区域・市街化調整区域を決定する 	<ul style="list-style-type: none"> ・大阪万博
	1971 (" 46)	<ul style="list-style-type: none"> ・市立図書館が明大寺町に移転する 	<ul style="list-style-type: none"> ・沖縄復帰
	1973 (" 48)	<ul style="list-style-type: none"> ・名鉄挙母線が廃止され、バス輸送となる ・六名町の区画整理工事中に真宮遺跡発見される 	<ul style="list-style-type: none"> ・第一次石油ショック
	1976 (" 51)	<ul style="list-style-type: none"> ・岡多線、岡崎～新豊田間が営業を始める ・岡崎石製品工場団地が小呂町にできる 	
	1982 (" 57)	<ul style="list-style-type: none"> ・三河武士のやかた家康館ができる 	<ul style="list-style-type: none"> ・第二次石油ショック(1979)
	1985 (" 60)	<ul style="list-style-type: none"> ・奥殿陣屋復元工事が完成する 	
	1987 (" 62)	<ul style="list-style-type: none"> ・市制 70 周年記念博「葵博」が開かれる 	<ul style="list-style-type: none"> ・国鉄分割、民営化
	1988 (" 63)	<ul style="list-style-type: none"> ・JR岡多線が愛知環状鉄道となる ・JR東海道線西岡崎駅ができる 	
平成	1989 (平成 1)	<ul style="list-style-type: none"> ・東岡崎駅地下駅化工事が完成する ・JR岡崎駅橋上駅化工事が完成する 	<ul style="list-style-type: none"> ・消費税3%導入
	1996 (" 8)	<ul style="list-style-type: none"> ・岡崎市美術博物館が開館する 	<ul style="list-style-type: none"> ・阪神淡路大震災(1995)
	2000 (" 12)	<ul style="list-style-type: none"> ・東海豪雨により床上・床下浸水住家などが多数発生する 	<ul style="list-style-type: none"> ・愛知万博(2005)
	2006 (" 18)	<ul style="list-style-type: none"> ・額田郡額田町が岡崎市に編入合併する 	
	2008 (" 20)	<ul style="list-style-type: none"> ・平成 20 年8月末豪雨が発生 	<ul style="list-style-type: none"> ・東日本大震災(2011)
	2015 (" 27)	<ul style="list-style-type: none"> ・家康公薨去 400 年祭 	
	2016 (" 28)	<ul style="list-style-type: none"> ・新東名高速道路が開通する 	
令和	2019 (令和 1)	<ul style="list-style-type: none"> ・市制施行 100 周年 ・東岡崎駅ペDESTリアンデッキ供用開始。家康公像が完成する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・新型コロナウイルス感染症流行(2020) ・東京オリンピック(2021)

※参考：『ふるさとの歴史 岡崎(平成12年発行)』を基に作成。

(2)関わりのある人物

岡崎の歴史及び歴史的風致と関わりのある主な人物を以下に整理する。

藤原季兼(ふじわらの すえかね・としかね)

天喜3年(1055)～康和4年(1102)

藤原南家・武智麻呂の子孫にあたり、中国の学問を教える職(文章博士)についての藤原実範の子として生まれる。文章博士等を多数輩出している家系であるが、中下級貴族の出身で父や兄弟を超える栄達の道がほとんど閉ざされていた。季兼は、都市貴族として都に住まわず、祖父の弟保相と異母兄弟の季綱の2人が三河守を歴任した際に築いた富や領地の一部を譲り受けて、三河国の私領主として自立する方向に活路を見出したと考えられている。



図1-3-42 熱田神宮

こうしたなか、尾張国愛知郡に鎮座する熱田社(熱田神宮)の祀祭者の最高位大宮司職を世襲していた国造の末裔尾張氏は、この頃急速に衰退していた熱田神宮の神格を、藤原氏を通じて高めようと、季兼を大宮司尾張員職の娘、松御前と結婚させた。2人の間には、後に熱田大宮司となる藤原季範が生まれる。晩年、季兼は尾張国目代となった。

藤原季範(ふじわらの すえのり・としのり)

寛治4年(1090)～久寿2年(1155)

藤原南家・藤原季兼と熱田大宮司尾張員職の娘、松御前との間に生まれる。「額田冠者」と呼ばれる。季範12歳のとき、父季兼が亡くなったため、母方の祖父の下で養育された。母松御前の実家である尾張氏は、代々熱田大宮司を務めていたが、これを季範に譲ったことから、季範は尾張国の目代にもなり、三河と尾張の2つの拠点を得て勢力を拡大していった。



図1-3-43 熱田神宮

なお、季範の長男範忠は、大宮司職を継ぎ、その他にも額田郡の私領等を継いでいる。また、範忠の代に滝山寺の寺域の確定や本堂の移築造営が行われており、滝山寺に対する強力な援助や保護が行われていたことがうかがわれる。

源頼朝(みなもとの よりとも)

久安3年(1147)~建久10年(1199)

源義朝の三男として熱田で生まれる。母は熱田大宮司藤原季範の娘、由良御前である。鎌倉幕府初代将軍。平治の乱で伊豆に流された後、平家を滅ぼして征夷大將軍に補任される。全国支配を進めるなかで早くから三河国を重視し、元暦元年(1184)に弟の範頼を三河守に推挙して知行国の一つに加えた。また、三河最初の守護に、側近として信任する安達盛長を補任した。

滝山寺の住職であった従兄寛伝は、頼朝が没するとその菩提を弔うため滝山寺山内に惣持禅院の建立を開始し、頼朝三回忌に追善供養を行った。



図1-3-44 源頼朝像

源範頼(みなもとの のりより)

久安6年(1150)~建久4年(1193)

源義朝の六男として生まれる。源頼朝の異母弟、源義経の異母兄である。治承・寿永の乱において、頼朝の代官として源義仲・平氏追討に赴き、義経と共にこれらを討ち滅ぼした。その後も源氏一門として、鎌倉幕府において重きをなすが、頼朝に謀反の疑いをかけられ、誅殺された。

元暦元年(1184)、兄の頼朝から三河守に推挙され知行国を与えられている。



図1-3-45 源範頼像

足利義氏(あしかが よしうじ)

文治5年(1189)~建長6年(1254)

鎌倉中期の武士。三河国守護職を務めた。貞応元年(1222)滝山寺の3度目の本堂を造立し、大いに庇護した。また、守護所を矢作宿において国内統治の要所とし、一族や被官を地頭代・郷司に取り立てて所領を支配させた。亡くなった翌年滝山寺に法華堂が菩提所として建てられた。



図1-3-46 足利義氏像

足利尊氏(あしかが たかうじ)

嘉元3年(1305)～延文3年(1358)

室町幕府初代将軍。建武新政下では参議・武蔵守となり、後醍醐天皇の諱の一字を賜って高氏から尊氏と改名した。三河守護に執事の近親者である高師兼ら高一族を補任するなど三河の政治的・軍事的位置を重視した。三河で育った一門・被官の支持を基盤に、彼らの軍事力で内乱を戦い抜いた。



図1-3-47 足利尊氏像

足利義満(あしかが よしみつ)

延文3年(1358)～応永15年(1408)

室町幕府3代将軍。南北朝の合一を果たし、有力守護大名の勢力を抑えて幕府権力を確立させた。また勘合を用いた日明貿易を始めたり、鹿苑寺(金閣)を建立し、北山文化を开花させたりした。足利尊氏の遺言により天恩寺を建立し、足利一族の祈願所とした。



図1-3-48 足利義満像

松平親氏(まつだいら ちかうじ)

生没年不詳

家康公の父祖松平8代の初代。江戸時代前期には書かれていた『松平氏由緒書』によれば、親氏は遍歴する旅の者で、三河国松平郷に寄った際、催されていた連歌の会に参加した。その際の作法や筆跡が見事であったことから、加茂郡松平郷の松平太郎左衛門信重のもとに逗留し、その後、信重の娘婿になったといわれている。



図1-3-49 松平親氏像

松平泰親(まつだいら やすちか)

生没年不詳

松平8代の2代目。初代親氏の子説と弟説があり、没年は永和2年(1376)から文明4年(1472)までの9説がある。岩津町若一王子神社蔵の棟札銘等写によれば、応永33年(1426)に若一王子社を建立したとあり、泰親の存在と応永33年以前の岩津移転が確認された。



図1-3-50 若一王子神社

松平信光(まつだいら のぶみつ)

応永11年(1404)～長享2年(1488)

松平8代の3代目。親氏子説と泰親子説がある。三河版
 応仁・文明の乱に乗じて岡崎・安城の2城を入手し、西三
 河の有力な国人領主としての地位を確立した。御料所(足
 利将軍領)であった額田郡の政所職と深い関係があった
 とも推定されている。永享11年(1439)に万松寺を創建し、
 宝徳3年(1451)に信光明寺を建立、さらに、寛正2年
 (1461)に岩津に妙心寺を開創した。



図1-3-51 松平信光像

蓮如(れんにょ)

応永22年(1415)～明応8年(1499)

本願寺中興の祖と呼ばれる。本願寺7世存如の長男で、
 長祿元年(1457)に本願寺8世を継職して以降、精力的な
 教線拡大を行うなか、三河布教により三河真宗の中心だ
 った五か寺のうち、上宮寺、勝鬘寺、本證寺を本願寺派
 に組み入れ、他の三河教団も分裂させて大部分を本願寺派
 にしていった。近江、越前のほか、近畿・中国地方の国も
 組織化し、今日の東西本願寺派の基礎を築いた。地方教団
 の中心寺院を本願寺派に引き入れた初の成功例が三河で
 あった。



図1-3-52 蓮如像

松平親忠(まつだいら ちかただ)

永享3年(1431)～文亀元年(1501)

松平8代の4代目。文明初年までに鴨田郷に分立してい
 たらしいが、安城城を譲られて移転し、安城松平家初代と
 なった。文明2年(1470)松平の氏神として社を三重県の
 伊賀より移し伊賀八幡宮を建立し、文明7年(1475)に鴨田
 の旧館址に勢誉愚底を開山として菩提寺大樹寺を創建し
 た。



図1-3-53 伊賀八幡宮

松平長忠(まつだいら ながただ)

文明5年(1473)~天文13年(1544)

松平8代の5代目(安城松平家の2代目)。永正3年(1506)今川氏の三河侵入のとき、安城城より出撃し矢作川を越えて井田野で今川軍と対戦し、激戦の末これを退去させた。同6年(1509)まで続いた永正大乱の過程で、松平氏惣領の岩津家が滅び、安城家が惣領となったと思われる。

なお、「長忠」は「長親」とも表す。



図1-3-54 松平8代の墓

松平信忠(まつだいら のぶただ)

文明18年(1486)~享禄4年(1531)

松平8代の6代目(安城松平家の3代目)。従来安城家の支配圏外であった大浜(碧南市)・坂崎(幸田町)・滝・岩津の寺院に禁制や寄進状を出していることから、信忠は安城松平家の勢力を大きく伸ばしたと考えられている。これは永正3年(1506)三河に侵攻した駿河の今川氏との戦いによって惣領の岩津松平家や長沢松平家が衰退し、代わって安城松平家が惣領となったためと推察される。



図1-3-55 松平信忠像

松平清康(まつだいら きよやす)

永正8年(1511)~天文4年(1535)

松平8代の7代目(安城松平家の4代目)。大永4年(1524)岡崎松平家の山中城を攻め落とし、岡崎松平家3代信貞の婿となり岡崎城に移転した。松平一門の結束を成し遂げた清康は、以後三河統一の戦いを始めた。龍頭山への城移転と城下町形成、大樹寺修造と勅願寺化、岡崎五人衆一代官一小代官体制の形成、源姓世良田氏呼称等も一連の政策であった。また岡崎入城後、六所神社を加茂郡六所山から岡崎に勧請し、享禄3年(1530)龍海院を創建した。



図1-3-56 松平清康像

松平広忠(まつだいら ひろただ)

大永6年(1526)~天文18年(1549)

松平8代の8代目。徳川家康公の父。父の清康が亡くなったとき、わずか10歳という若さのため、今川氏に従属せざるを得ず、織田氏らが岡崎に攻め入る際、自力で対抗できなかったため、家康公(竹千代)を人質に出して今川氏の加勢を求めた。



図1-3-57 甲山寺本堂(護摩堂)

酒井忠次(さかい ただつぐ)

大永7年(1527)~慶長元年(1596)

家康公の家臣。徳川四天王の1人。天文18年(1549)に家康公(竹千代)が駿府に人質として送られる際付き従う。弘治2年(1556)加茂郡宇機賀井(福谷)城で織田氏と戦ったのを始めとし、家康公の武将として歴戦した。永禄8年(1565)吉田の城主となり、三備(東三河衆、西三河衆、直轄の旗本)の軍制では東三河諸士の旗頭になった。



図1-3-58 酒井忠次像

徳川家康(とくがわ いえやす)

天文11年(1542)~元和2年(1616)

江戸幕府初代将軍。岡崎城内で誕生。幼名竹千代。初名元信・元康、永禄6年(1563)7月頃家康と改名。幼少期を人質として尾張・駿府にて過ごし、桶狭間の戦いで今川義元が敗れると岡崎城に入る。その後三河統一、天下統一を果たし、慶長8年(1603)に江戸幕府を開設した。以後265年間、世界でも稀な泰平の世を築き、独自の日本文化が花開いた。江戸を居城とする際に多数の三河武士とその家族が関東に移り住み、譜代大名やその上級家臣、旗本等の中核を形成した。遺言に従って遺骸は駿河久能山に一旦埋葬され、江戸増上寺で葬儀が行われ、大樹寺に位牌が納められた。



図1-3-59 徳川家康像

本多忠勝(ほんだ ただかつ)

天文 17 年(1548)~慶長 15 年(1610)

家康公の家臣。徳川四天王の 1 人。永禄 6 年(1563)の三河一向一揆の際は改宗して家康公に従い、同 9 年(1566)家康公より騎馬の士 50 余人を付属され先手役の武将とされた。その後武田勢と戦い、小牧・長久手の戦いにも参加した。徳川四天王随一の勇将として知られ、57 回出陣して 1 度も負傷したことがなかったと伝わる。



図1-3-60 本多忠勝像

榊原康政(さかきばら やすまさ)

天文 17 年(1548)~慶長 11 年(1606)

家康公の家臣。徳川四天王の 1 人。永禄 6 年(1563)に元服し、家康公の 1 字を賜り康政と称した。翌年吉田城攻めの先手となり、それ以後、旗本先手役の武将として戦功をあげ、武略と剛勇をもって家康公の四天王の 1 人に数えられた。とりわけ小牧・長久手の戦いでは、秀吉方の先陣三好秀次の軍を破り、名を挙げた。2 代将軍秀忠の後見人となった。



図1-3-61 榊原康政像

田中吉政(たなか よしまさ)

天文 17 年(1548)~慶長 14 年(1609)

安土桃山時代の武将、岡崎城主。徳川家康公の関東移封後、豊臣家臣田中吉政が岡崎城主となり、近世の大城郭の基礎を築いた。岡崎城の造営、城下町建設、兵農・商農分離、矢作川築堤、太閤検地の実施、寺社領改め等の政策を実施した。関ヶ原の戦いでは東軍徳川方につき、石田三成を捕縛した。



図1-3-62 田中吉政像

本多康重(ほんだ やすしげ)

天文 23 年(1554)~ 慶長 16 年(1611)

本多豊後守広孝の長男として碧海郡土井郷で生まれる。永禄 5 年(1562)に家康公により片諱を与えられ、康重と称した。天正 5 年(1577)家督を相続。遠江高天神の戦い、小牧・長久手の戦い等で戦功を立て、天正 18 年(1590)に家康公が関東移封された際には上野国白井 2 万石を拝領。



図1-3-63 本多康重像

文禄元年(1592)家康公名護屋出陣の際は関東の留守役を務めた。同4年(1595)に従五位下、豊後守叙任。慶長5年(1600)関ヶ原の戦いに参陣、翌年(1601)2月に3万石の加増を受けて岡崎に転封。

徳川信康(とくがわ のぶやす)

永禄2年(1559)~天正7年(1579)

家康公の長男として生まれる。母は関口親永の娘で今川義元の姪の築山殿である。家康公が元亀元年(1570)、浜松城に居城を移すと岡崎城主となった。天正3年(1575)の長篠の戦いでは徳川軍の先手の大将として参加した。天正7年(1579)、織田信長から武田氏に内通したとの嫌疑をかけられ、家康公の命により遠江二俣城で切腹をした。



図1-3-64 徳川信康像

井伊直政(いい なおまさ)

永禄4年(1561)~慶長7年(1602)

家康公の家臣。徳川四天王の1人。直政の部隊の軍装は赤で統一していたため、「井伊の赤備え」と呼ばれ、戦国屈指の精鋭部隊として恐れられた。関ヶ原の戦い後は江戸幕府の組織づくりなど政治と外交に手腕を発揮し、家康公は文武両面で厚く信頼していたといわれる。



図1-3-65 井伊直政像

本多康紀(ほんだ やすのり)

天正7年(1579)~元和9年(1623)

本多康重の長男として田原で生まれる。天正19年(1591)家康公より片諱を与えられ、康紀と称した。慶長6年(1601)に従五位下、伊勢守叙任。同16年(1611)家督を相続し、のち豊後守に改める。同19年(1614)、大坂冬の陣では備前島に出陣して功をあげ、講和後も大坂城に留まって城門を警備するとともに惣堀を埋めた。慶長20年(1615)、大坂夏の陣では大手千貫櫓で大野主馬助治房の軍と戦い武功をおさめた。同3年(1617)岡崎城天守を再建。



図1-3-66 本多康紀像

稲富直家(いなとみ なおいえ)

生没年不詳

戦国時代から江戸時代初期にかけての武将、砲術家。江戸初期に、稲富流砲術いなとみりゅうほうじゆつから稲留流いなとみりゅうという三河花火の一流派を開き、主として西三河に広がった。これは、兵法の稲富流砲術が、島原の乱以後、人々の娯楽に転用され、花火が五穀豊穡の祈願と豊作の喜びをこめて神社の祭礼に献上されたためである。幕末から明治にかけて三河地方に生まれた花火の各流派は、稲留流から派生したものが多い。砲術にある「流星」と稲留流打上げ花火「流星」は構造がよく似ている。



図1-3-67 岡崎花火

本多忠利(ほんだ ただとし)

慶長5年(1600)～ 正保2年(1645)

本多康紀の長男として生まれる。慶長 18 年(1613)に將軍秀忠の片諱を与えられて忠利ただとしと改め、伊勢守と称した。慶長 20 年(1615)、大坂夏の陣に初陣して功名をあげる。元和 9 年(1623)11 月に家督を相続する。寛永元年(1624)、家中向けに 32 か条の条目を出す。同 11 年(1634)、3 代將軍家光上洛の途次、岡崎城にて饗応し、帰途に 5 千石の加増を受ける。



図1-3-68 本多忠利像

徳川家光(とくがわ いえみつ)

慶長9年(1604)～慶安4年(1651)

江戸幕府 3 代將軍。2 代將軍秀忠の次男として生まれる。母は浅井長政あざいながまさの娘で織田信長おだのぶながの姪ごうの江である。乳母は春日局かすがのつぼね。東照大権現として祀られた祖父の家康公を尊崇し、家光は日光社参を生涯のうちに 10 回行っている。寛永 13 年(1636)、家康公鎮座 20 年である 21 年神忌しんきに向けた日光東照宮の社殿の大造営に着手する。現在、見ることができる社殿群のほとんどが、このときの造営によるものである。また、家光は岡崎市内の大樹寺を寛永 13 年(1636)から大造営し、同年に六所神社、伊賀八幡宮を改築している。



図1-3-69 徳川家光像

水野忠善(みずの ただよし)

慶長 17 年(1612)～ 延宝4年(1676)

水野忠元みずの ただもとの長男として江戸藩邸で生まれる。元和 6 年(1620)、家督を継いで下総国山川藩しもさきのくにやまかわ 3 万 5 千石を領有したが、幼少のために井上正就いのうえまさなりが後見人となった。寛永 7 年(1630)に従五位下監物じゅごいげんもつに叙任。同 12 年(1635)駿河国田中藩するがのくに 4 万 5 千石に加増転封、同 19 年(1642)三河国吉田藩みかわのくにに転封となった。正保 2 年(1645)、岡崎藩 5 万石に入封となり、滝山東照宮たきさんとうしやうぐうに石鳥居・石灯籠を献じた。寛文 4 年(1664)、弟忠久ただひさに碧海郡の新墾田あらきだ 5 千石を分け与える。



図1-3-70 水野忠善像

同 5 年(1665)、家中に宗門改めの条目を出す。同 9 年(1669)、歩当番所普請かちとうばんしょふしん。同 10 年(1670)、武断派の忠善ぶだんはただよしと文治派の長男忠春ぶんちはただはるの対立から忠春を 1 万石の捨扶持すてぶちを与えて廢嫡とする。

松尾芭蕉(まつお ばしょう)

寛永 21 年(1644)～元禄7年(1694)

江戸時代前期の俳諧師はいかいし。旅を繰り返す、『おくのほそ道』など、多くの俳句・紀行文を残した。当時、藤川宿ふじかわしゆく 一帯では紫色に染まる麦が作られていたことから、「愛も三河こゝむらさき麦の かきつはた」句が詠まれ、藤川宿の西端にある十王堂じゅうおうどうの境内には松尾芭蕉の句碑がある。



図1-3-71 十王堂境内の句碑

水野忠之(みずの ただゆき)

寛文9年(1669)～享保 16 年(1731)

水野忠春の四男として生まれる。元禄 12 年(1699)、実兄の岡崎藩主水野忠盈ただみつの養子となり、忠盈の没後に家督相続して岡崎藩主水野家 4 代となる。享保 2 年(1717)に老中となり將軍徳川吉宗の「享保の改革」を支え、同 7 年(1722)、財政責任者としての功により 1 万石を加増されたが、米価急落や負担増による世の不評をかった。同 15 年(1730)、老中職を辞し、次男の忠輝に家督を譲って隠居した。



図1-3-723 岡崎城

大岡忠相(おおおか ただすけ)

延宝5年(1677)～宝暦元年(1751)

にしおひらはん
西大平藩初代藩主。享保2年(1717)に江戸町奉行に昇任し、のとかみ えちぜんのかみ
能登守から越前守に改称した。優れた実務官僚としてまちぶぎょう
江戸町奉行を19年間務め、8代しょうぐんよしむね
将軍吉宗の信任が特に厚かった。寛延元年(1748)、寺社奉行兼奏者番となつた際に官俸にかえ、三河国額田郡2か村等を拝領して正式に1万石となり、額田郡西大平村に陣屋を設置して西大平藩が成立した。初代藩主となつたときの忠相は72歳でふだいみょう
府大名であった。



図1-3-73 西大平藩陣屋跡

松平康福(まつだいら やすよし)

享保4年(1719)～寛政元年(1789)

いわみ はまだ はんしゅ やすとよ
石見国浜田藩主松平康豊の長男として生まれる。元文元年(1736)家督を継ぎ、じゅごいげすおうのかみ
従五位下周防守に叙任。寛延2年(1749)奏者番就任、宝暦9年(1759)には寺社奉行を兼務。同9年(1759)しもうさのくにこが
下総国古河藩に転封した。同10年(1760)大坂城代となり、じゅししいげ
従四位下に昇位。同12年(1762)岡崎に転封。同年(1762)西の丸老中に昇進して、じじゅう
侍従に任ぜられる。同13年(1763)本丸の老中職も兼務。明和元年(1764)正式に本丸老中に就任。同6年(1769)旧領浜田へ転封。天明8年(1788)老中職を辞す。

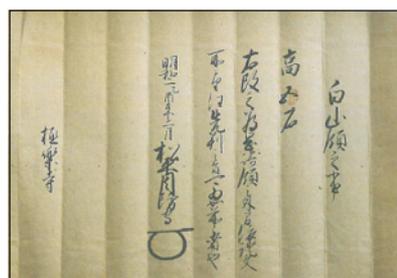


図1-3-74 松平康福除地安堵状

康福が、極楽寺に、5石を白山社の特別な土地として与えることを認めた書状。極楽寺は白山社を管理する立場にあった。

月僊(げっせん)

元文6年(1741)～文化6年(1809)

江戸時代中期の画家、まるやまおうきよ よ さぶぞん
丸山応挙と与謝蕪村、また室町時代のせつしゅう
雪舟の影響を受け、画風を取り入れたといわれる。

元文6年(1741)尾張国名古屋の味噌商の家に生まれた。7歳でとくど げんずい
得度し、玄瑞の名で浄土宗の僧侶となり、安永3年(1774)、伊勢寂照寺の住職となった。

市内には門前町ずいねん じ い が ちょうしょうこうりつ じ
隨念寺、伊賀町昌光律寺等に、月僊の絵画作品が多数残されている。



図1-3-75 瞽者図

菅江真澄(すがえ ますみ)

宝暦4年(1754)～文政12年(1829)

江戸時代後期の民俗学の先駆者であり、優れた紀行家として知られる。出生地は岡崎(伝馬町)と伝えられるが確定していない。若くして名古屋の国学者田中道麻呂のもとに通い、また岡崎城下を代表する文化人国分伯機ら多くの文化人が訪れる学芸サロンとして利用されていた書齋「市隠亭」に出入りし、蔵書の利用や文人との交流を通じて多方面の知識を深めた。

29歳で信州へ旅立って以後、約50年間にわたって北海道や東北各地を巡り、庶民生活や風俗を学問的視点で観察した。旅日記、随筆、地誌、図絵集など著作は200冊を超え、民俗学・歴史学・考古学の分野で高く評価されている。文化7年(1810)頃から「菅江真澄」と号し、文政12年(1829)角館町(秋田県仙北市)で没した。



図1-3-76 菅江真澄

鶴田卓池(つるた たくち)

明和5年(1768)～弘化3年(1846)

菅生の満性寺門前で染物業を営む鶴田光雅の子として生まれた俳人である。俳号には卓池のほか、柏声社、青々処、藍叟、青々卓池を用いていた。

天明4年(1784)、17歳で名古屋の俳人加藤暁台に入門し、寛政4年(1792)暁台没後は、それを継いだ井上士朗に師事した。享和元年(1801)、江戸から信州へ旅する途中の小林一茶をはじめとする信濃の俳人たちと同行し、その時の旅の成果を『鶴芝』にまとめた。

天保8年(1837)には古希を祝う盛大な宴が催され、全国の門人・友人から寄せられた、475句を収めた賀集『竹春集』がつくられた。弘化3年(1846)、79歳で亡くなるまで多数の門人を抱え、この地方の俳諧を牽引した。

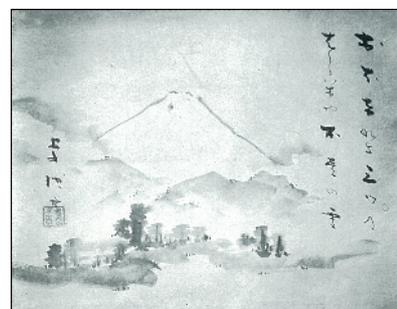


図1-3-77 富士画賛(卓池筆)

石川貫河堂(いしかわ かんがどう)

天明元年(1781)～安政6年(1859)

三河で生まれる。京都で岸駒がんくに学び、後に岡崎城下の祐金町ゆうきんちやうに住み、寺社・旧跡を描いた挿絵作者として知られている。

市内に残る貫河堂の作には、中島町龍泉寺なかにまちょうりゆうせんじ所蔵の仏涅槃図ぶつね等がある。また門人に、俳人の鶴田卓池つるたたくわいがおり、貫河堂が描いた挿絵に卓池らが俳句を詠んだ作品もある。



図1-3-78 仏涅槃図

桜間青厓(さくらま せいがい)

天明6年(1786)～嘉永4年(1851)

片桐桐隠かたぎりとういんに学び、三河国田原藩の藩士・画家であった渡辺崋山わたなべかざんとも交流があった画家である。

岡崎藩主本多忠頭ただあきの家臣桜間出右衛門能保でえもんよしやすの次男として江戸本郷の本多家下屋敷に生まれた。

岡崎城主本多氏に仕える岡崎藩士であった青厓は、江戸時代の文人画家として活躍し、市内には文政8年(1825)の作である『青緑山水図』、文政6年(1823)の作である『林和靖閑居図』等が残されている。



図1-3-79 青緑散水図

玄々齋精中(げんげんさいせいちゆう)

文化7年(1810)～明治10年(1877)

三河国奥殿藩おくとのはん4代藩主松平乗友のりともの五男として生まれる。文政2年(1819)、10歳のとき、裏千家10代認得齋宗室家にんとくさいそうしつの養子縁組が組まれてその長女と結婚し、文政9年(1826)、17歳のとき、認得齋が亡くなり、裏千家11代家元を継承した。幕末から明治にかけての日本文化疲弊の時期に、茶道を通じて日本文化の復興に尽力し、数多くの功績を残した。明治5年(1872)、京都博覧会に際し、明治維



図1-3-80 玄々齋精中像

新後の外国文化の流入に合わせて、椅子を用いた立礼式りゅうれいしきの点前てまえを考案することで、伝統を重んじながらも日本文化の開放性と適応性を内外にアピールし、茶の湯の近代化を図った。

松平乗謨(まつだいら のりかた)・大給恒(おぎゅう ゆずる) 天保10年(1839)～明治43年(1910)

奥殿藩8代・田野口藩初代・龍岡藩初代の藩主。明治2年(1869)に大給恒と改名。幼い頃より才覚を現し、外国にも関心が高く、特にフランス語が堪能。最後の奥殿藩主として領民からも慕われた。文久3年(1863)に奥殿から田野口(長野県佐久市)へ藩の役所を移す。その後の慶応3年(1867)に、フランスの建築様式を取り入れた龍岡城五稜郭ごりょうかくを建設した。函館五稜郭と共に星形りょうほの稜堡式城郭として貴重である。明治10年(1877)西郷隆盛さいごうたかもりが九州で政府軍との戦いを始めると、敵味方区別なく傷ついた人を助けたいと博愛社はくあいしゃを創立。その後、博愛社は日本赤十字社と名前を変え、今も世界の人々の平和と幸福のために活動を続けている。



図1-3-81 松平乗謨

臥雲辰致(がうん とくむね・たっち) 天保13年(1842)～明治33年(1900)

綿糸紡績機めんしぼうせききとして有名なガラ紡ぼうの発明者。幼少から足袋たび底織そこおりを手伝ううちに労を省くための機械のことを考え出し、明治6年(1873)、足袋底に用いる太糸用のガラ紡機械を完成し、さらに同9年(1876)、細糸用に改良し、松本開産社内に連綿社を設立して製造を開始した。同10年(1877)の第1回内国勸業博覧会に出品して最高ほうもんしょうの鳳紋賞牌はいを受賞したことによりガラ紡はその後各地に広まった。額田紡績組合は、明治21年(1888)に臥雲辰致を招き技術指導を受け、滝村や矢作古川を中心に発展した。大正10年(1921)三河紡績組合は、臥雲の功績に感謝し、市公会堂北庭に記念碑を建立した。



図1-3-82 臥雲辰致

本多忠直(ほんだ ただなお)

天保15年(1844)~明治13年(1880)

信濃国小諸藩の牧野遠江守康哉の次男として生まれる。慶応3年(1867)10月、本多忠民の娘、久を妻として婿養子に入り、翌月、平八郎忠直と改名。慶応4年(1868)、藩主忠民の代行として上京参内し、朝廷側恭順の誓約書に名を連ねる。明治2年(1869)2月、忠民隠居に伴い家督を継いで岡崎藩主となり、6月、版籍奉還により岡崎藩知事となる。同年(1869)藩校允文館、允武館建設。明治4年(1871)廃藩置県により藩知事を罷免され、東京本郷の森川邸に移る。明治5年(1872)~11年(1878)、ヨーロッパに留学。



図1-3-83 本多忠直像

志賀重昂(しが しげたか)

文久3年(1863)~昭和2年(1927)

岡崎市出身の地理学者。明治中期にベストセラーとなった『日本風景論』(明治27年(1894))は、我が国で初めてといわれる科学的解説を試みたもので、当時の日本人に新しい風景観をもたらした。日本人が「風景」という言葉を得たのは、この『日本風景論』によるともいわれている。岡崎市民にとっては「三河男児の歌」が最も親しみ深い。木曾川の「日本ライン」の名付け親でもある。

なお、東公園には、志賀重昂の像、歌碑、墓のほか、自身が東京の敷地内に建てた茶室「南北亭」が移築されている。



図1-3-84 志賀重昂